

厚生労働科学研究費補助金

難治性疾患等政策研究事業（難治性疾患政策研究事業）

**キャッスルマン病の疫学診療実態調査と
患者団体支援体制の構築に関する研究**

平成27、28年度 総合・分担研究報告書

研究代表者 吉崎 和幸

平成29（2017）年 3月

目 次

・総合研究報告

研究代表者 吉崎和幸	1
------------------	---

・分担研究報告

1. 診療体制の確立	51
------------------	----

矢野真吾

東京慈恵会医科大学医学部腫瘍・血液内科

2. 診断基準、臨床的病型分類、重症度分類、および、診療の参照ガイドの策 定	53
---	----

川端浩

金沢医科大学医学部血液免疫内科学

3. TAFRO 症候群の確立のための研究/多中心性 Castleman 病との異同について	55
--	----

正木康史

金沢医科大学医学部血液免疫内科学

4. 国際キャスルマン病臨床ネットワーク (CDCN) との Collaboration につ いて	61
---	----

井出眞

日本赤十字社高松赤十字病院血液内科

5. 診断基準、臨床的病型分類、重症度分類に向けての研究	64
------------------------------------	----

川上純

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科先進予防医学共同専攻

6. リウマチと多中心型キャスルマン病のトシリズマブ治療前後の	67
---------------------------------------	----

サイトカイン・ケモカイン動態と疾患特性

宇野賀津子

(公財)ルイ・パストゥール医学研究センター

7. Multicentric Castleman 病に対する tocilizumab 治療後に.....71

IgG4 関連疾患を発症した一例

水木満佐央

大阪大学医学部附属病院 血液・腫瘍内科

. 班会議

・平成 27 年度 第 1 回班会議プログラム.....平成 27 年度総括・分担研究報告書参照

・平成 27 年度 第 2 回班会議プログラム

・抄録集平成 27 年度総括・分担研究報告書参照

・平成 28 年度 第 1 回班会議プログラム.....平成 28 年度総括・分担研究報告書参照

・平成 28 年度 第 2 回班会議プログラム

・抄録集平成 28 年度総括・分担研究報告書参照

. その他資料

・国際キャスルマン病臨床ネットワーク

(CDCN)平成 27・28 年度総括・分担研究報告書参照

・患者会.....平成 27・28 年度総括・分担研究報告書参照

. 研究成果の刊行に関する一覧表.....平成 27・28 年度総括・分担研究報告書参照

. 名簿

・班構成員平成 27・28 年度総括・分担研究報告書参照

・拠点病院・診療連携施設平成 27・28 年度総括・分担研究報告書参照

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等政策研究事業）
総合研究報告書

キャスルマン病の疫学診療実態調査と
患者団体支援体制の構築に関する調査研究

研究代表者 吉崎和幸 大阪大学産業科学研究所第3研究部門医薬品化学研究分野、特任教授

研究要旨 平成27年4月にキャスルマン病に関する調査研究班が初めて公的支援により発足した。キャスルマン病に関するあらゆる情報が乏しいため、本疾患の基本的な情報を把握し、診療における必要項目を整理整頓して疾患分類や診断基準、重症度分類などを策定することを27年度の主たる目標とした。また、キャスルマン病が指定難病としてふさわしい疾患と考えられるため、その認定のための条件をクリアーするべく研究調査し、患者が1日も早く良い環境で治療が継続できるように支援することを目的とした。初年度は以下の項目について研究・検討し、一部は結果を示した。即ち、我が国のキャスルマン病患者数を1,500名と推定したが、疫学調査後により正確な患者数を算定する。どの地域においても診療できる体制にするため、全国を8ブロックに分けそれぞれに拠点病院を設置した。

患者会を発足させた。キャスルマン病の分類、病理分類、診断基準、重症度分類の策定を行った。今後、日本血液学会と日本リウマチ学会の承認を得て公知を予定している。診療ガイドラインを確立した。診療実態把握の疫学調査を行うため倫理委員会の認可申請を行っている。国際キャスルマン病臨床ネットワーク(CDCN)のメンバーになり、特に中核メンバー(SAB)に参画し、グローバルな情報を得るとともに我が国の意見を反映させた。キャスルマン病を指定難病にするための条件をほぼクリアーした。しかし、診断基準と重症度分類を公知することができなかった。

28年度、当初未達成の件の多くが達成済みとなった。即ちキャスルマン病患者が約1,500名と推定できたが、今後詳細な疫学調査研究を行うことによって、より確かな患者数を推定する。全国医療体制の確立するため、全国を8ブロックに分け拠点病院を設置した。更に各ブロック毎に関連医療施設を設定しつつある。現時点で約100施設となっている。患者会発足を支援した後、患者教育、医療相談、医療講演を通じ継続的に支援している。最も重要な診断基準、重症度分類、診療参照ガイドについては班で策定した後、平成28年12月に日本血液学会に承認され、学会誌「臨床血液」の平成29年2月号に掲載された。次いで日本リウマチ学会に対しては、学会誌「Modern Rheumatology」に掲載すべく、現在投稿準備中である。診療実態把握のため大阪大学の倫理委員会の許可を得たので、今後アンケート調査等で疫学調査を行う。国際的活動としては、CDCNの中核メンバーとして、国際診断基準策定に関与した。本論文はBloodに掲載され著者に班員2名が記載された。キャスルマン病が指定難病に認可できるように、そのすべての条件をクリアーした。

研究分担者

岡本真一郎：慶應義塾大学医学部血液内科、教授
川端浩：京都大学医学研究科血液・腫瘍内科学、
講師
水木満佐央：大阪大学医学部附属病院血液・腫瘍
内科、准教授

川上純：長崎大学大学院医歯薬学総合研究科展開
医療科学講座（第一内科）教授
正木康史：金沢医科大学医学部血液免疫内科学、
教授
矢野真吾：東京慈恵会医科大学医学部腫瘍・血液

内科、講師

井出眞：日本赤十字社高松赤十字病院血液内科、
部長

宇野賀津子：(公財)ルイ・パストゥール医学研
究センター、室長

八木克巳：(公財)ルイ・パストゥール医学研
究センター、主任研究員

研究協力者

小島俊行：日本赤十字社名古屋第一赤十字病院救
急部、副部長

水谷実：三重厚生連松阪中央総合病院血液内科、
部長

徳嶺進洋：市立伊丹病院血液内科、部長

西本憲弘：大阪リウマチ・膠原病クリニック、
院長

藤原寛：宗教法人在日本南プレスビテリミッシ
ョン淀川キリスト教病院呼吸器内科、副院長

中塚伸一：独立行政法人労働者健康福祉機構関西
労災病院病理診断科、部長

塩沢和子：一般財団法人甲南会甲南加古川病院リ
ウマチ膠原病センター、センター長

岩城憲子：金沢大学医薬保健研究域医学系細胞移
植学講座、研究員

事務局

谷川美紀：大阪大学産業科学研究所第3研究部門
医薬品化学研究分野、研究員

A. 研究目的

原因不明の希少病である「キャッスルマン病」は、今まで病態解析が不十分で医師ですら認知度が低く、診断基準や重症度分類、診療ガイドラインもなく、患者臨床実態もほとんど把握されていない。このため、治療法の確立もされていない。この度、公的に初めて研究班が承認されたため上記の問題点を明らかにし、患者に最適な治療を提供できるようにすることを目的とする。27年は以下の項目を研究目的とした。28年度は達成済みを目指す。

1) キャッスルマン病の患者数を推定する。

2) キャッスルマン病の診療がどこでも可能になる医療体制の構築をめざす。

3) キャッスルマン病患者会の発足と活動を支援する。

4) キャッスルマン病の分類を確立する。

5) キャッスルマン病の病理診断基準を策定する。

6) キャッスルマン病の診断基準を策定する。

7) キャッスルマン病の重症度分類を策定する。

8) キャッスルマン病の診療ガイドラインを作成する。

9) 国際キャッスルマン病臨床ネットワークに参加する。

10) キャッスルマン病の疫学実態調査を行う。

11) キャッスルマン病の疾患概念を検討する。

12) キャッスルマン病の指定難病への認可に努力する。

B. 研究方法

本研究目的は、研究分担者が従来主に行っていた研究とは少し異なるので、あえて目的毎に分担グループを以下のように設定し、28年度は効率よく達成する方法を行った(図1)。

1) **キャッスルマン病の患者数の推定**：(川端、水木)

本来なら疫学調査によって患者数を決定すべきであるが、未調査のため既存の文献から推定した。28年度は、疫学調査による患者数の推定を行う方法を考えた。そのため「人を対象とした調査研究」であるため各医療施設の倫理委員会の了承の下に行うこととした。まずは研究代表者施設の大阪大学倫理委員会の承認を得ることとする。

2) **キャッスルマン病の拠点病院構築**：(矢野、岡本) 我国どの地域の患者でも診療が受けられる体制を構築するため、全国を8ブロックに分け、それぞれ拠点病院を設立した。主に研究班員所属の病院を選択したが、北海道、東北、中国地方は新たに拠点病院を設定した。28年度は、各ブロック病院に接触関連する地方医療機関の設定を開始する。

3) **キャッスルマン病患者会の発足と活動支援**：(川端、吉崎、川上、矢野、井出、水谷、藤原、谷川) 発足と活動を支援した。また患者会顧問と事務局を研究班員から選定した。また、患者会と

研究班との疎通を考慮し、事務局を研究代表者所属に設置した。28年度は、患者会の総会への出席、患者会主催の講演会、勉強会、医療相談会に出席する。その他血液学会、リウマチ学会での広報活動の支援を行う。患者会が発足したので事務局を患者に設置することを促す。

4) キャッスルマン病の分類診断基準:(川端、水木、正木)従来の病理像を基盤とした分類と、「HHV-8ウイルス感染有無の分類との検討を行った。TAFROの位置付けの検討も行った。即ち従来のヒアリン血管型、形質細胞型、その混合の基本線にそって検討した。TAFROについてはリンパ節で病理診断できたもののみ検討した。

5) キャッスルマン病の病理診断基準:(中塚)硝子血管型と形質細胞型を中心に病理学的に診断基準を策定した。

6) キャッスルマン病の診断基準:(全班員)分担グループより原案の提案(川端、岡本ら)があり、研究班員全員で検討し、平成28年1月の班会議で再討議され、研究班として策定した。即ちリンパ節腫大及びその特異病理像を主項目と病状・所見から診断基準を策定した。本年は更に日本血液学会の承認を得、学会誌「臨床血液」に投稿する。日本リウマチ学会に対しては、その後に対応する。

7) キャッスルマン病の重症度分類:(全班員)分担グループより原案(川端、川上ら)が提出され、検討後、平成28年1月の班会議で再討議され、研究班として策定した。即ち重症度分類については、軽度、中等症、重症と大別する。

8) キャッスルマン病の診療ガイドライン:(全班員)分担グループより原案(川端、井出ら)が提出され、検討後、平成28年1月の班会議で再討議され、研究班として策定した。即ち分担グループ(川端、井出)から提案され全員の検討で診療参照ガイドが平成28年1月の班会議で研究班として策定された。本年度は日本血液学会及び日本リウマチ学会で承認されることを目指す。

9) 国際キャッスルマン病臨床ネットワーク(CDCN)活動:(井出、吉崎)研究班員の吉崎と井出がCDCNのメンバーとなると共にCDCN

の中核 Scientific Advisory Board (SAB)の一員となった。年3~4回の国際テレビ会議や米国開催のCDCN総会、SAB会議に出席し情報交換した。また、国際診断基準や重症度分類の策定においても意見交換した。グローバルな患者登録に参入案が出された。28年度は、国際キャッスルマン病診断基準策定に関与する。グローバルな患者登録に参入するかどうか検討する。

10) キャッスルマン病の疫学実態調査:(水木、岡本、宇野、八木ら)研究代表者所属の大阪大学で倫理委員会の承認を行い(水木)、つづいて施設毎に研究班員所属の倫理委員会の許可を得る。その後、アンケート調査項目の設定を行う。28年度はアンケート調査の原案を検討する。

11) キャッスルマン病の疾患概念:(川上、宇野、八木)本疾患、特に本邦のほとんどの患者はIdiopathic Multi-Castleman Disease (iMCD)型で、その病因は全く不明であり、CDCNでも最大の研究また検討事項である。また、病態においてもIL-6の関与は大きいものの不明な点も多い。更に、本疾患が感染症か自己免疫疾患か自己炎症性疾患かその他の慢性炎症性疾患か不明で、疾患概念すら不明である。この状況から少しでも明らかにするため、サイトカインの本疾患における意義の解析を行う。28年度は、多岐に亘る本疾患の分類を病理解析以外の方法でも検討し、疾患の病態を知るため、主に患者血中のサイトカインの動態から推定することとした。

12) キャッスルマン病の指定難病への認可努力:(全班員)厚労省による難病、更に指定難病の条件を検討し、その条件をクリアーするための活動を行なった(吉崎)。特に診断基準及び重症度分類策定に研究班員全員が検討努力した。28年度は、指定難病のためには公的研究、臨床機関の認知を必要とする。本疾患の場合には、診療基準、重症度分類、診療ガイドラインの血液学会及びリウマチ学会の承認が必要である。本年はこれら両学会の承認を得る努力を行う。

(倫理面への配慮)

ヘルシンキ宣言を遵守し、患者に対する身体的および精神的な不利益性が生じないように配慮する。患者に対するアンケート調査などにより検査

値経過、診療経過や病状把握など個人情報を収集することになるので、個人情報の特定および漏洩に配慮し守秘する。情報は事務局台帳などで個人が特定できないよう、個人名を記入せず登録番号を用いて記入する。これを用いて統計処理を行う。当然、あらかじめ患者毎にインフォームドコンセントを得て、被験者の健康を損なうことなく調査活動を行う。ただし、患者の一般検査の余剰分の血清を用いてサイトカインなどの測定をし、患者亜分類、治療効果測定などに用いるため、人を対象とする医学系研究に関する倫理指針(臨床研究に関する倫理指針)を遵守する。以上のため本研究組織には倫理精通員及び疫学・生物統計専門家が参画する。

C. 研究結果

1) キャッスルマン病の患者数の推定:(川端) 本邦における患者数の推計は1,500人。根拠となった調査は、多中心性キャッスルマン病の「アクテムラ特定使用成績調査(中外製薬株)」、厚労科難治性事業「新規疾患;TAFRO症候群の確立のための研究(代表者:正木康史)」研究班からの報告。疫学調査を行うため大阪大学倫理委員会の承認を得た。今後各診療施設の倫理委員会の承認を得た後、調査を開始し、実態に合致した患者数を再推定する。

2) キャッスルマン病の拠点病院構築:(矢野、岡本) 我国を8つのブロックに分割し、それぞれに拠点病院を構築した。

北海道地方;北海道大学(血液内科)
 東北地方;東北大学(血液・免疫科)
 関東地方;慶應義塾大学(血液内科)・東京慈恵会医科大学(腫瘍・血液内科)
 中部・北陸地方;名古屋第一赤十字病院(血液内科)・金沢医科大学(血液・リウマチ膠原病科)
 近畿地方;京都大学(血液・腫瘍内科)・大阪大学(血液・腫瘍内科)
 中国地方;岡山大学(血液・腫瘍内科)
 四国地方;高松赤十字病院(血液内科)
 九州地方;長崎大学(第一内科)

本年はその関連医療機関の設定を開始し、現時点で約100施設の了解を得た。施設は全国に及んで

いる。(資料1)

今後、拠点病院の実質的活動を予定する。

3) キャッスルマン病患者会の発足と活動支援:(全班員)

患者会顧問に研究班班員が兼任し、吉崎、川上、川端、井出、矢野、水谷、藤原の計7名。

患者会事務局は研究班事務局に置き(大阪大学)、患者会と研究班の意思疎通を密にした。

平成27年8月1日発足に先立ち、6月6日の第1回研究班班会議終了後、患者有志による討議で患者会設立準備会を発足した。また、患者会暫定代表として福島かおり氏(現代表)、事務局長を研究班班員の谷川と決めた。

平成27年9月27日(日)に第1回患者会総会・医療講演を開催した。役員が正式に承認された。また、医療講演は吉崎が「キャッスルマン病とは」、川端が「キャッスルマン病の治療」を各30分講演した。

平成27年10月16-18日に川端の協力を得て、第77回日本血液学会学術集会で広報活動を行なった。

平成27年11月13日、吉崎が患者会代表に同行し、厚労副大臣に難病指定要望書と嘆願署名、研究班の研究進捗を説明した。

指定難病のための署名活動および啓発活動に研究班班員全員が参加した。

28年度としては、

患者会事務局を研究班事務局から患者会員に変更、患者会の独自運営を促した。

患者会主催の難病指定のための署名活動、及び啓蒙活動に協力した。

講演会、相談会、総会に参加した(東京、岡山)

4) キャッスルマン病の分類診断基準を確立:(川端、水木、正木) 従来病理像による分類を採用した。

硝子血管型、混合型、形質細胞型
 また、肥大リンパ節により、単中心型(unicentric)と多中心性(multicentric)に分ける。TAFROの位置付けは未定であるが、キャッスルマン病の分類内にとどめる。今後の注意点として、国際的分類はHHV-8陽性か陰性で大別しているため、将来、本邦の分類との整合性を検討しなければならない。

昨年の基準を再確認した。即ち 従ヒアリン血管型、形質細胞型、混合型。TAFRO については病理所見のある者のみ、高血管、少数形質細胞型と一時的に提案した。

5) キャッスルマン病の病理診断基準:(中塚) 従来通り、硝子血管型と形質細胞型、その混合型と診断する。最終的には、すべての検体は中塚により決定されることとした。

キャッスルマン病の組織像

硝子血管型 (Hyaline vascular type)

- ・リンパ節の基本構造は保たれる。
- ・リンパ濾胞は拡大するが、胚中心は萎縮性で、相対的にマントル層が肥厚する。
- ・胚中心内のリンパ球は減少し、壁の硝子化を伴った小血管の増生と軽度の異型を示す濾胞樹状細胞の集団によって置き換えられる (angiosclerosis)。
- ・硝子化した小血管が放射状に胚中心に侵入する像をしばしば認める。
- ・マントル層のリンパ球が同心円 (onion-skinning) に配列するように見えることがあるが、診断に必須な所見ではない。

形質細胞型 (Plasma cell type)

- ・リンパ節の基本構造は保たれる。
- ・リンパ濾胞、胚中心は正～過形成を示す。
- ・濾胞間領域に著明な形質細胞のびまん性の浸潤を認める。ときに Russell 小体の出現を伴う。
- ・胚中心に小血管の増生を認めることがあるが、angiosclerosis を認めることは通常ない。
- ・濾胞間領域に小血管の増生、線維化を認めることがあるが、硝子化した血管を認めることは通常ない。
- ・マントル層～濾胞間領域に核小体の明瞭な大型偏在核を示す形質芽球を認めることがある。

混合型 (Mixed type)

- ・胚中心の angiosclerosis と形質細胞の著明な浸潤を伴うような硝子血管型と形質細胞型の特徴を兼ね備えた組織像を示す。

補足: ヒト・ヘルペスウイルス 8 型 (HHV-8) 関連多中心性キャッスルマン病の組織像
形質細胞型ないしは混合細胞型の組織像を示す。しばしば胚中心の萎縮と angiosclerosis が目立つ。マントル層～濾胞間領域に HHV-8 陽性の形質芽

球を多数認める。形質芽球は IgM を発現し、軽鎖制限がみられるが、IgH 再構成検査でみると多クローン性である。欧米では形質芽球亜型 (plasmablastic variant) として扱われる。

6) キャッスルマン病の診断基準:(川端、他全班員) 研究班としては暫定的に下記のように策定した。

A および B を満たすものをキャッスルマン病と診断する。

A. 以下の 2 項目を満たす。

- (1) 腫大した (長径 1 cm 以上の) リンパ節を認める。
- (2) リンパ節または臓器の病理組織所見が、～のいずれかのキャッスルマン病の組織像に合致する。

硝子血管型、形質細胞型、硝子血管型と形質細胞型の混合型

B. 以下の疾患が除外できる。

- 1 .悪性腫瘍; 血管免疫芽球性 T 細胞性リンパ腫、ホジキンリンパ腫、濾胞樹状細胞肉腫、腎がん、悪性中皮腫、肺がん、子宮頸がんなど。
- 2 .感染症; 非結核性抗酸菌症、ねこ引っかき病、リケッチャ感染症、トキソプラズマ感染症、真菌性リンパ節炎、伝染性単核球症、慢性活動性 EB ウイルス感染症、急性 HIV 感染症など。
- 3 .自己免疫疾患; SLE、関節リウマチ、シェーグレン症候群など。
- 4 .その他の類似した症候を呈する疾患; IgG4 関連疾患、組織球性壊死性リンパ節炎、特発性門脈圧亢進症など。

診断に際しての参考事項

- 1 .自覚症状は、無症状のものから重篤なものまで様々である。頻度の高い症状として、微熱～中等度の発熱、全身倦怠感、易疲労感、体重減少、盗汗、リンパ節腫脹がある。一部の症例では皮疹 (扁平ないし軽度隆起した褐色～暗赤色の皮疹、類天疱瘡、キサントーマ)、腹満、浮腫、息切れ、呼吸困難感、出血傾向がみられる。ときに脳梗塞などの血栓症や、末梢神経障害を認める。
- 2 .画像検査では、リンパ節腫脹のほかに、肝脾腫や、胸水、腹水、間質性の肺陰影をみとめることがある。

- 3 . 血液検査では、多くの場合に炎症反応 (CRP) が陽性で、血中のインターロイキン 6 (IL-6) 濃度の上昇がみられる。また、小球性貧血、血小板増多、血清 LDH 低値、低アルブミン血症、高アルカリホスファターゼ血症、多クローン性の高ガンマグロブリン血症、高 IgE 血症、高 VEGF 血症を呈することが多い。また、しばしば抗核抗体などの自己抗体が陽性となる。
- 4 . 一部の症例では腎障害 (蛋白尿、血清クレアチニン値上昇) 間質性の肺病変、肺高血圧症、拡張型心筋症、自己免疫性の血小板減少症、自己免疫性溶血性貧血、内分泌異常 (甲状腺機能低下症など) アミロイドーシス、肺高血圧症を合併する。
- 5 . 高ガンマグロブリン血症にともなって血清 IgG4 高値や組織中 IgG4 陽性細胞増多を示すことがある。その際に、発熱、CRP 高値、小球性貧血、血小板増多などの高 IL-6 血症に伴う反応が認められる場合は、IgG4 関連疾患よりもキャッスルマン病の可能性を強く考える。
- 6 . HHV-8 関連のキャッスルマン病は、特徴的なリンパ節組織像と、リンパ節組織中あるいは血中における HHV-8 の存在を証明することによって診断する。多くは HIV 感染者に見られ、カポジ肉腫や悪性リンパ腫を合併することも多い。
- 7 . POEMS 症候群は、単クローン性のガンマグロブリン血症をとまなう進行性のポリニューロパチーで、多発性骨髄腫類縁のリンパ系腫瘍と考えられるが、その一部がキャッスルマン病と重なる病態を呈する。本診断基準では除外すべき疾患には含めない。
- 8 . TAFRO 症候群は、血小板減少、全身性の浮腫、発熱、骨髄の線維化、肝脾腫を特徴とした疾患概念である。キャッスルマン病に合致するリンパ節病理組織像がみられることがあり、現時点では除外すべき疾患には含めない。
- 7) キャッスルマン病の重症度分類 : (川端、他全班員) 研究班として下記のように暫定的に策定した。なお、特発性 MCD については、CDCN が各症候をスコア化して分類する国際基準を策定しつつある。

外科的切除などの局所療法が可能な単中心性

(限局型) の場合は軽症とする。

多中心性、および外科的切除などの局所療法が不可能な単中心性 (限局型) については、キャッスルマン病に起因すると考えられる下記の症候の有無によって重症度を判定する。

1 . おおむね 1 ヶ月間以上、下記の症候のいずれかがみられる場合、重症とする。

- (1) 炎症性貧血 : Hb 7 g/dl 以下、または定期的な赤血球輸血を要する貧血。
- (2) 低アルブミン血症 : 血清アルブミン値 1.5 g/dl 以下。
- (3) 腎機能障害 : GFR 15 ml/分/1.73m² 以下。
- (4) 肺病変 : 間質性の肺陰影がみられ、安静時にも酸素吸入を要する。
- (5) 胸腹水 : 症状緩和のためにドレナージを要する程度の胸水あるいは腹水の貯留。
- (6) 心不全 : EF 40%未満の心機能低下。

2 . 重症に該当しないが、下記のいずれかがみられる場合、中等症とする。

- (1) 炎症性貧血 : Hb 8 g/dl 以下。
- (2) 低アルブミン血症 : 血清アルブミン値 2.0g/dl 以下。
- (3) 腎機能障害 : GFR 30 ml/分/1.73m² 以下。
- (4) 肺病変 : 間質性の肺陰影がみられ、日常の軽い労作で呼吸困難がみられる。
- (5) 心不全 : EF 50%未満の心機能低下。

3 . 上記に該当しない場合、軽症とする。

ただし、長期にわたってトシリズマブなどの高額薬剤による治療、あるいはステロイド剤の全身投与の継続が必要な場合、上記に該当しない場合でも中等症として取り扱う。班内での策定後、28年12月に日本血液学会に上提し学会承認を得た後、29年2月号の「臨床血液」に掲載された。(資料2)

8) キャッスルマン病の診療ガイドライン : (全班員) 診療ガイドラインの原案を班会議で全員の討議によって暫定的に策定された。今後の調査研究により改正案を策定する予定である。診療ガイドラインについては分担研究報告を参照。診療参照ガイドとして策定された後、日本血液学会でも承認され、更に「臨床血液」に掲載された。現在、日本リウマチ学会に対して認可要請し、学会誌「Modern Rheumatology」に掲載準備中である。

(資料3)

9) 国際キャスルマン病臨床ネットワーク (CDCN) 活動:(吉崎、井出、川端、西本)

吉崎と井出が CDCN メンバーに参画、同時にそのコアメンバーである SAB (Scientific Advisory Board) の一員となった。年3~4回の国際テレビ会議において CDCN 活動の検討を行い、平成27年12月は年1回開催の CDCN 総会(オランダ、米国)に出席、患者会ミーティングや SAB ミーティングに参加し情報交換を行った。更に、平成27年11月に開かれた(フィラデルフィア、米国) SAB ミーティングにおける国際診断基準や重症度分類の検討会に出席し意見を述べた。また、患者会主催のチャリティーバザールにも出席した。CDCN により国際的診断基準が検討され、29年1月に Blood に掲載承認された。著者に我々も含まれた。CDCN の総会(平成28年12月)において、吉崎が本研究班の情報を発表し、川端が正木の代理で TAFRO 症候群を提示し、西本がキャスルマン病の Tocilizumab 治療について紹介した。(資料4)

10) キャスルマン病の疫学実態調査:(水木、岡本、矢野、宇野、八木) 疫学調査は、精神的負担をかける可能性もあるため、先ず大阪大学の倫理委員会の承認を得る。続いて各施設の IRB もしくは倫理委員会の許可を得る。調査項目や調査対象者、調査方法については検討中である。28年度は、大阪大学の倫理委員会での承認を得、全国の施設倫理委員会の承認を得ているところである。更に CDCN 主催の研究への参画のため、海外への患者血清、組織等の提供、及び患者臨床データの情報提供の必要性が生じ、再度倫理委員会の承認を得る準備を行っている。

11) キャスルマン病の疾患概念:(川上、宇野、八木、吉崎) 慢性炎症性疾患の一種と考えられるが、膠原病や血管炎症候群、自己免疫性疾患、ましてや悪性腫瘍ではない。このため、当班としては血清たん白、特にサイトカインの網羅的研究を行った。診断的意義、アクテムラ治療の有効患者の特定などを目的とした。現在、進行中である。28年度は、継続的に患者血中サイトカインの解析を行なっている。新たに TAFRO の患者も対象としている。

12) キャスルマン病の指定難病への認可努力:(吉崎他、全班員)

難病および指定難病の6つの条件を満足するように活動を行なった。しかし、診断基準や重症度分類については班内での策定を可能としたが、日本血液学会と日本リウマチ学会の承認を得るところまでは進まず、またジャーナルなどによる公知発表も未完成となった。28年度は、指定難病の最後の条件である診断基準、重症度分類、診療参照ガイドの学会承認を平成28年12月に受諾された。また学会誌「臨床血液」の平成医29年2月号に掲載された。現在、リウマチ学会の承認及び学会誌「Modern Rheumatology」への投稿を準備している。

13) 研究協力者の活動:

研究協力者は、本研究班の主たる研究の遂行に多大な貢献をした。特に、研究グループに加わりグループの研究を分担すると共に、診断基準や重症度分類、診断ガイドラインなどの策定には全員が討議に加わり、提案、修正、補足、確定に協力した。同時に、独自の研究も行った。小島は自らが医師であると共に患者でもあるので、特別な立場で診療に対する意見を出した。水谷、塩沢、藤原、西本、徳嶺らは自らの体験をもとに診療に対する見解を提供した。更に、中塚、岩城はキャスルマン病および TAFRO 症候群の病理所見についての見解をそれぞれ展開した。特に、中塚は当班が対象とする患者の最終診断を担当することとなった。

28年度は、前年と同様、研究分担者と共に多大な研究協力を行い、貢献した。特にキャスルマン病の診断基準、重症度分類、診療参照ガイドの策定には提案、修正、補足を行い、内容の充実した策提案が提供できた。中塚、岩城は病理所見に見解を述べ、西本は重症度分類における内臓異常の有無の関与を提案した。

D. 考察

1) キャスルマン病の患者数の推定:

既存の文献より、我国には1,500名の患者を推定したが、今後行われる。疫学調査によって患者数

の増加が予測される。また医師、患者への啓蒙活動、並びに指定難病承認による認知度の向上によっても増加が予測される。

2) キャッスルマン病の拠点病院構築：

拠点病院の構築はできたが、実際の活動により全国いずれの地域でも平等に情報が行き届き、患者数が把握でき、治療も可能になることが期待できる。キャッスルマン病診療施設の増加が見込まれる。また、班から拠点病院及び関連施設への伝達、逆に関連施設からの患者の実態把握により実質的な拠点病院の活動を推進しなければならない。

3) キャッスルマン病患者会の発足と活動支援：

患者会の発足を支援し、また事務局を代表者の大阪大学にした。会員数は現在約 90 名である。会員数を増やし、広報活動を通して支援を継続する。指定難病の承認へのアプローチにより患者診断の向上、経済的支援が可能になると考えられる。全国の患者の治療の平等化を更に支援する。患者会参加者を 100 名以上にする。

4) キャッスルマン病の分類診断基準：

CDCN との整合性の検討を要す。

5) キャッスルマン病の病理診断基準：

TAFRO の病理像の特定を要す。

6) キャッスルマン病の診断基準：

暫定診断基準を確定診断基準にする予定。

7) キャッスルマン病の重症度分類：

暫定重症度分類を国際重症度分類との相互性を考慮して確定する。今後我が国の重症度分類を更に確かなものとしなければならない。CDCN による重症度分類の決定は当班の分類も参照されると思われる。

8) キャッスルマン病の診療ガイドライン：

暫定診療ガイドラインを策定したが、それを日本血液学会と日本リウマチ学会で承認ができた。現在は診断参照ガイドであるが、診断ガイドラインの策定を要する。また、国際診断基準とのすり合わせについても検討を要す。

9) 国際キャッスルマン病臨床ネットワーク

(CDCN) 活動：

CDCN の SAB メンバーとして出席し、諸問題に発言をし、CDCN 運営に貢献した。また、診断基準と重症度分類においても提言など意見を述べ、CDCN の中で主要メンバーとして日本を印象付けた。CDCN の重症度分類の策定に協力する。CDCN が独自の研究に参画を予定する。特に患者臨床データベース作成による国際臨床データベースへの参画は重要と考えられる。

10) キャッスルマン病の疫学実態調査：

倫理委員会の調査認証に時間がかかっており、疫学実態調査が少し遅れている。早急にアンケート項目を決め開始する予定である。

11) キャッスルマン病の疾患概念：

患者血清中のサイトカインなどのバイオマーカーを測定中である。診断に貢献するマーカーや治療の有効性を予測するマーカーを検索中である。血中サイトカインから診断マーカー、疾患分類の可能性、TAFRO との相同相異、他の類縁疾患との鑑別を行う。更に病因、病態に繋げていきたい。

12) キャッスルマン病の指定難病への認可努力：

指定難病の条件は、満足できた。血液学会に承認され、学会誌「臨床血液」に掲載された。またリウマチ学会には、学会誌「*Modern Rheumatology*」に投稿した。学会承認の可能性は高い。

本研究班は今年度で終了であるが、残された課題にあるように今後も継続して研究活動しなければならない。

次年度以降は、TAFRO 研究班と合同で、IgG4 関連疾患、POEMS 等の類縁疾患との位置付けを明確にし、本領域の更なる研究を要すると考える。

E. 結論

(1) キャッスルマン病患者を 1,500 名と推定したが、増加が予測される。

(2) 全国で平等な治療を行うため、拠点病院構想を立ち上げた。

(3) キャッスルマン病患者会の発足を援助し、今後も活動を支援する。

(4) キャッスルマン病の診断基準、重症度分類、診

療参照ガイドを策定した。日本血液学会に承認され、学会誌に掲載された。

(5)(4)に対して更に改正し再策定を要す。

(6) 国際キャスルマン病臨床ネットワーク (CDCN) の主要メンバー (SAB) として国際診断基準に参画し、Blood に掲載された。

(7) キャスルマン病の疫学調査を開始した。

(8) キャスルマン病の病態又は診断マーカー探索のため血中サイトカインの動態を検討した。

(9) キャスルマン病の指定難病としての条件をクリアした。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

(主要原著論文のみを下に示す、発表の詳細は分担研究報告を参照のこと)

1. 論文発表

1) 吉崎和幸, 岡本真一郎, 川端浩, 水木満佐央, 川上純, 正木康史, 矢野真吾, 井出眞, 宇野賀津子, 八木克巳, 小島俊行, 水谷実, 徳嶺進洋, 西本憲弘, 藤原寛, 中塚伸一, 塩沢和子, 岩城憲子, 古賀智裕: キャスルマン病診療の参照ガイド. 臨床血液. 2017, 58; 97-107.

2) 川端浩: Castleman 病; 岡明編 小児科診療増刊号 小児の症候群. 東京都, 診断と治療社, 2016, vol 79 suppl, pp 183.

3) Masaki Y, Kawabata H, Kurose N, Ide M, et al. (他 25 名、筆頭、2 番目、7 番目、8 番目) Proposed diagnostic criteria, disease severity classification and treatment strategy for TAFRO syndrome, 2015 version. Int J Hematol. 2016 Jun;103(6):686-92. doi: 10.1007/s12185-016-1979-1. Epub 2016 Mar 18.

4) 正木康史, 川端 浩, 黒瀬 望, ほか (他 8 名、筆頭、2 番目、7 番目) 平成 27 年度厚生労働科学研究費補助金 (難治性疾患政策研究事業) 新規疾患; TAFRO 症候群の確立のための研究班. 新規疾患; TAFRO 症候群の診断基準・重症度分類・治療指針. 臨床血液. 第 78 回日本血液学会学術集会「教育講演」号. 臨床血液 57; 195-203 (2029

- 2037) 2016

5) 正木康史, 藤本信乃. TAFRO 症候群. 臨床免疫・アレルギー科 65(6):604-607, 2016

6) 正木康史, 藤本信乃, 川端 浩. TAFRO 症候群の診断と治療. EMB 血液疾患の治療 2017- 2018 金倉謙, 木崎昌弘, 鈴木律朗, 神田善伸編. (中外医学社) 2016 年 10 月 15 日発行 p385- 390

7) 正木康史. 新たな指定難病としての IgG4 関連疾患. 臨床免疫・アレルギー科 65(1):28-34, 2016

8) 正木康史. (特集; IgG4 関連疾患の病因・病態を考える) IgG4 関連リンパ節炎から 分子リウマチ治療 9(1):17-20, 2016

9) 正木康史. IgG4 関連疾患の管理と治療における国際コンセンサス -日本人臨床医にも妥当で有用か? - リウマチ科 55(2):221-226, 2016

10) 正木康史. II 章 薬物療法の実践. B. リンパ腫. 33. 免疫不全に続発するリンパ増殖性疾患 p278-282. 白血病・リンパ腫薬物療法ハンドブック松村到編集. 2016 年 6 月 25 日発行 (南江堂)

11) Fujita Y, Masaki Y, et al. Isolation of vascular smooth muscle antigen-reactive CD4(+) Th1 clones that induce pulmonary vasculitis in MRL/Mp-Fas(+/+) mice. Cell Immunol. 2016 May;303:50-4. doi: 10.1016/j.cellimm.2016.03.004. Epub 2016 Mar 21. (他 14 名、12 番目)

12) 正木康史. 不明熱の理解のために知っておくべきエビデンスとアート. 不明熱の原因疾患 pick up. 血管内リンパ腫. Modern Practice 33(7):1105-1107, 2016

13) 正木康史. IgG4 関連疾患の治療の最前線 - 日米における診断と治療の違いを中心に. 医学のあゆみ 258(3)217-222, 2016

14) 正木康史, 黒瀬 望. IgG4 関連疾患と間違っ
てはいけない疾患. 肝胆膵 73(4):585-590, 2016

- 15) 正木康史、川端 浩、ほか。(他6名、筆頭、7番目) IgG4 関連疾患の診断と治療. 金沢医科大学雑誌
- 16) 正木康史、ほか。(他4名、筆頭) シェーグレン症候群とリンパ増殖性疾患. リウマチ科 56(5):452-457,2016.
- 17) Masaki Y, Kurose N, et al. (他 33 名、筆頭、31 番目) A multicenter phase II prospective clinical trial of glucocorticoid for patients with untreated IgG4-related disease. Mod Rheumatol. 2016 Dec 15:1-6.
- 18) 正木康史. IgG4関連疾患をどのように治療しているか. アレルギーの臨床 36(13):(1255)41-(1258)44,2016
- 19) 正木康史、川端 浩、ほか。(他6名、筆頭、7番目) IgG4関連疾患の診断と治療. 金医大誌 41:67-72,2016
- 20) 正木康史. 白血病やリンパ腫の治療緊急性. Medical Practice 34(2);335, 2017
- 21) 正木康史. 血管内リンパ腫. 血液疾患最新の治療2017-2019, pp177-179. 小澤敬也、中尾眞二、松村 到編(南江堂)2017年2月25日発行
- 22) Satoh-Nakamura T, Masaki Y. (他 10 名、最終) CD14⁺ follicular dendritic cells in lymphoid follicles may play a role in the pathogenesis of IgG4-related disease. Biomedical Res (Tokyo) 36(2) 143-153,2015
- 23) Khosroshahi A, Masaki Y. (他 40 名、20 番目) International consensus guidance statement on the treatment of IgG4-related disease. Arthritis Rheum67(7):1688-99. 2015
- 24) Nakajima A, Masaki Y. (他 30 名、2 番目) Decreased expression of innate immunity-related genes in peripheral blood mononuclear cells from patients with IgG4-related disease. PLoS One. 14;10(5): e0126582. doi:10.1371/journal.pone.0126582. eCollection,2015.
- 25) Sakai T, Masaki Y. (他 17 名、2 番目) Prospective clinical study of R-CMD therapy for indolent B-cell lymphoma and mantle cell lymphoma from the Hokuriku Hematology Oncology Study Group. Medical Oncol 32:232. DOI 10.1007/s12032-015-0677-9,2015
- 26) Yoshida H, Masaki Y. (他8名、9番目) A case of probable IgG4-related disease involving the unilateral trigeminal nerve of the cheek region. Oral Radiol 31:193- 198,2015
- 27) 正木康史. (他10名、筆頭) IgG4関連疾患の診断と治療～IgG4関連皮膚病変も含めて～. 日本皮膚アレルギー接触性皮膚炎学会雑誌 Vol.9 No.4(Serial No.42):212-217,2015
- 28) 正木康史. (他1名、筆頭) III 治療の実際 1. 病型別治療方針 -標準的治療, 研究的治療 L. 治療上特別な配慮を要する疾患 8) 中枢神経系のリンパ腫 pp201-203. 悪性リンパ腫治療マニュアル. 改訂第4版. 飛内賢正、木下朝博、塚崎邦彦編(南江堂)2015年9月30日発行
- 29) 正木康史. II. 臓器別病変の診断と治療 11. リンパ節病変 治療と予後 pp143-145. 臨床医必読最新 IgG4関連疾患. 岡崎和一、川 茂幸編集主幹(診断と治療社)2015年10月9日発行
- 30) 正木康史. 4章. 疾患の理解と治療/リンパ腫. 医原性免疫不全状態に伴うリンパ増殖性疾患. pp434-438. 最新ガイドライン準拠 血液疾患 診断・治療指針. 金倉 譲編集(中山書店)2015年10月30日発行
- 31) 正木康史. (他4名、筆頭) X. 節外リンパ腫の臓器別特徴と治療. 唾液腺リンパ腫. pp627-631. 日本臨床 73巻増刊号 8 リンパ腫学

-最新の研究動向- (日本臨床社) 2015年10月20日発行

32) 正木康史. (他4名、筆頭) XI. 特論. TAFRO症候群.pp674-678. 日本臨床 73巻増刊号8 リンパ腫学 -最新の研究動向- (日本臨床社) 2015年10月20日発行

33) 正木康史. IgG4関連疾患の鑑別診断.Modern Physician 11 特集 全身疾患としてのIgG4関連疾患 2015 Vol.35 No.11 p1312-1317 (新興医学出版社)

34) 正木康史. Question ; 不明熱と皮膚生検から考えられる疾患は何か (p30) Answer ; 不明熱と皮膚生検から考えられる疾患は何か (p97-98) ; 血管内大細胞型B細胞リンパ腫 「一発診断! 一目瞭然! 目で診る症例から瞬時に診断!」一般社団法人 日本内科学会専門医部会編 2015年4月10日 一般社団法人日本内科学会発行(ヤマノ印刷株式会社)

35) 北川 泉, 正木康史. 「特集 関節が痛いんです! - コモンからレアものまでの診断と治療」関節痛・関節炎へのアプローチ 病因で診る関節痛・関節炎. 総合診療 25(4).330-332, 2015

36) 正木康史. 新たな指定難病としてのIgG4関連疾患. 臨床免疫・アレルギー科65(1):28-34,2016

37) 正木康史. (特集 ; IgG4関連疾患の病因・病態を考える) IgG4関連リンパ節炎から 分子リウマチ治療 9(1):17-20,2016

38) 井出眞. International, evidence-based consensus diagnostic criteria for HHV-8-negative/idiopathic multicentric Castleman disease Blood(2017 電子版)

39) 宇野賀津子 分担執筆 「放射線必須データ32 被ばく影響の根拠」田中、角山、中島、坂東編 創元社 2016年3月刊

40) 宇野賀津子 低線量放射線の影響:福島から何を学ぶ ADC Letter for Infectious Disease Control 27 Volume 3 (2), July 2016

41) 川端浩: Castleman Disease; in 血液診療ハンドブック改訂3版(吉田弥太郎編). 大阪市, 医薬ジャーナル社, pp 463-475, 2015.

42) Hiramatsu S, Ohmura K, Tsuji H, Kawabata H, Kitano T, Sogabe A, Hashimoto M, Murakami K, Imura Y, Yukawa N, Yoshifuji H, Fujii T, Takaori-Kondo A, Mimori T: Successful treatment by rituximab in a patient with TAFRO syndrome with cardiomyopathy. Jpn J Clin Immunol (in press)

43) Satoh-Nakamura T, Masaki Y. (他10名、最終、査読有) CD14+ follicular dendritic cells in lymphoid follicles may play a role in the pathogenesis of IgG4-related disease. Biomedical Res (Tokyo) 36(2) 143-153,2015

44) Khosroshahi A, Masaki Y. (他40名、20番目、査読有) International consensus guidance statement on the treatment of IgG4-related disease. Arthritis Rheum67(7):1688-99. 2015

45) Nakajima A, Masaki Y. (他30名、2番目、査読有) Decreased expression of innate immunity-related genes in peripheral blood mononuclear cells from patients with IgG4-related disease. PLoS One. 14;10(5): e0126582. doi:10.1371/journal.pone.0126582. eCollection,2015.

46) Sakai T, Masaki Y. (他17名、2番目、査読有) Prospective clinical study of R-CMD therapy for indolent B-cell lymphoma and mantle cell lymphoma from the Hokuriku Hematology Oncology Study Group. Medical Oncol 32:232. DOI 10.1007/s12032-015-0677-9,2015

47) Yoshida H, Masaki Y. (他8名、9番目、査読有) A case of probable IgG4-related disease involving the unilateral trigeminal nerve of the cheek region. Oral Radiol 31:193-198, 2015

48) 正木康史. (他10名、筆頭、査読有) IgG4関連疾患の診断と治療~IgG4関連皮膚病変も含めて~. 日本皮膚アレルギー接触性皮膚炎学会雑誌 Vol.9 No.4(Serial No.42):212-217,2015

49) 正木康史. (他1名、筆頭) III 治療の実際 1.病型別治療方針 -標準的治療, 研究的治療 L.

治療上特別な配慮を要する疾患

50) 中枢神経系のリンパ腫 pp201-203. 悪性リンパ腫治療マニュアル改訂第4版. 飛内賢正、木下朝博、塚崎邦彦編 (南江堂) 2015年9月30日発行
51) 正木康史. II. 臓器別病変の診断と治療 11. リンパ節病変 治療と予後 pp143-145. 臨床医必読最新 IgG4 関連疾患. 岡崎和一、川 茂幸編集主幹 (診断と治療社) 2015年10月9日発行
52) 正木康史. 4章. 疾患の理解と治療 / リンパ腫. 医原性免疫不全状態に伴うリンパ増殖性疾患. pp434-438. 最新ガイドライン準拠 血液疾患 診断・治療指針. 金倉 譲編集 (中山書店) 2015年10月30日発行

53) 正木康史. (他4名、筆頭) X. 節外リンパ腫の臓器別特徴と治療. 唾液腺リンパ腫. pp627-631. 日本臨床 73巻増刊号8 リンパ腫学 -最新の研究動向- (日本臨床社) 2015年10月20日発行

54) 正木康史. (他4名、筆頭) XI. 特論. TAFRO症候群. pp674-678. 日本臨床 73巻増刊号8 リンパ腫学 -最新の研究動向- (日本臨床社) 2015年10月20日発行

55) 正木康史. IgG4 関連疾患の鑑別診断. Modern Physician 11 特集 全身疾患としてのIgG4 関連疾患 2015 Vol.35 No.11 p1312-1317 (新興医学出版社)

56) 正木康史. Question ; 不明熱と皮膚生検から考えられる疾患は何か (p30) Answer ; 不明熱と皮膚生検から考えられる疾患は何か (p97-98); 血管内大細胞型B細胞リンパ腫 「一発診断! 一目瞭然! 目で診る症例から瞬時に診断!」一般社団法人 日本内科学会専門医部会編 2015年4月10日 一般社団法人日本内科学会発行 (ヤマノ印刷株式会社)

57) 北川 泉、正木康史. 「特集 関節が痛いんです! -コモンからレアものまでの診断と治療」 関節痛・関節炎へのアプローチ 病因で診る関節痛・関節炎. 総合診療 25(4).330-332, 2015

58) 正木康史. 新たな指定難病としてのIgG4 関連疾患. 臨床免疫・アレルギー科 65(1):28-34, 2016

59) 正木康史. (特集 ; IgG4 関連疾患の病因・病態を考える) IgG4 関連リンパ節炎から 分子リウマチ治療 9(1):17-20, 2016

59) Ichinose K, Arima K, Umeda M, Fukui S,

Nishino A, Nakashima Y, Suzuki T, Horai Y, Koga T, Kawashiri SY, Iwamoto N, Fujikawa K, Aramaki T, Tamai M, Nakamura H, Sato S, Origuchi T, Kawakami A: Predictors of clinical outcomes in patients with neuropsychiatric systemic lupus erythematosus. *Cytokine* 79: 31-37, 2015.

60) Suzuki T, Iwamoto N, Yamasaki S, Nishino A, Nakashima Y, Horai Y, Kawashiri SY, Ichinose K, Arima K, Tamai M, Nakamura H, Origuchi T, Miyamoto C, Osaki M, Ohyama K, Kuroda N, Kawakami A. Upregulation of Thrombospondin 1 Expression in Synovial Tissues and Plasma of Rheumatoid Arthritis: Role of Transforming Growth Factor- β 1 toward Fibroblast-like Synovial Cells. *J Rheumatol* 42 (6): 943-947, 2015.

61) Nakamura H, Takahashi Y, Yamamoto-Fukuda T, Horai Y, Nakashima Y, Arima K, Nakamura T, Koji T, Kawakami A: Direct infection of primary salivary gland epithelial cells by human T lymphotropic virus type I in patients with Sjögren's syndrome. *Arthritis Rheumatol* 67 (4): 1096-1106, 2015.

62) Ikezoe K, Handa T, Tanizawa K, Kubo T, Oguma T, Hamada S, Watanabe K, Aihara K, Sokai A, Nakatsuka Y, Muro S, Nagai S, Uno K, Chin K, Fukui M, Hirai T, Mishima M. Bone mineral density in patients with idiopathic pulmonary fibrosis. *Respir Med.* 2015 Sep;109(9):1181-7. doi: 10.1016/j.rmed.2015.06.014. Epub 2015 Jul 6. PMID: 26174191

63) Sokai A, Handa T, Tanizawa K, Oga T, Uno K, Tsuruyama T, Kubo T, Ikezoe K, Nakatsuka Y, Tanimura K, Muro S, Hirai T, Nagai S, Chin K, Mishima M.

Matrix metalloproteinase-10: a novel biomarker for idiopathic pulmonary fibrosis. *Respir Res.* 2015 Sep 29;16:120. doi: 10.1186/s12931-015-0280-9. PMID: 26415518

64) Sato K, Yamamoto H, Nomura T, Matsumoto I, Miyasaka T, Zong T, Kanno E, Uno K, Ishii K, Kawakami K. *Cryptococcus neoformans* Infection in Mice Lacking Type I Interferon Signaling Leads to Increased Fungal Clearance and IL-4-Dependent Mucin Production in the Lungs. *PLoS One.* 2015 Sep

18;10(9):e0138291. doi:
10.1371/journal.pone.0138291. eCollection 2015.
PMID: 26384031
65) Uno K, Yoshizaki K, Iwahashi M, Yamana J,
Yamana S, Tanigawa M, Yagi K. Pretreatment
Prediction of Individual Rheumatoid Arthritis
Patients' Response to Anti-Cytokine Therapy Using
Serum Cytokine/Chemokine/ Soluble Receptor
Biomarkers. PLoS One. 2015 Jul 15;10(7):e0132055.
doi:10.1371/journal.pone.0132055. eCollection 2015.

2. 学会発表

- 1) Masaki Y. Retrospective analysis of patients with a novel Japanese variant of multicentric Castleman disease associated with anasarca and thrombocytopenia; TAFRO syndrome. 第 59 回日本リウマチ学会総会・学術集会. 名古屋. 2015 年 4 月 25 日
- 2) Masaki Y. A multicenter phase II prospective clinical trial of glucocorticoid treatment for patients with untreated IgG4-related disease. 13th International Sjögren's syndrome symposium. Bergen, Norway. 2015 年 5 月 21 日
- 3) 正木康史. IgG4 関連疾患の診断と治療. 北陸皮膚免疫セミナー. 金沢. 2015 年 6 月 27 日
- 4) 正木康史. IgG4 関連疾患に対する第 II 相多施設共同前方視的治療研究. 第 55 回日本リンパ網内系学会総会. 岡山. 2015 年 7 月 11 日
- 5) 正木康史. 21 世紀に本邦より発信された疾患概念; IgG4 関連疾患と TAFRO 症候群. Meet the Expert in Hematology. 横浜. 2015 年 7 月 18 日
- 6) 正木康史. IgG4 関連疾患に対する前方視的多施設共同治療研究. 日本シェーグレン症候群学会. 岡山. 2015 年 9 月 19 日
- 7) 正木康史. IgG4 関連疾患の診断と治療. 日本内科学会信越支部 第 53 回信越支部生涯教育講演会. 新潟. 2015 年 10 月 11 日
- 8) 正木康史. IgG4 関連疾患の診断と治療 ~シェーグレン症候群との違いを中心に~. 平

- 成 27 年度 東海・北陸地区リウマチ教育研修会. 福井. 2015 年 11 月 11 日
- 9) 正木康史. IgG4 関連疾患; 21 世紀に入り本邦より発信された新たな疾患概念. 第 70 回 岐阜呼吸器疾患研究会 岐阜. 2015 年 11 月 7 日(土)
 - 10) 正木康史. 悪性リンパ腫の治療. 北國健康生きがい支援事業. 平成 27 年度・第 2 回金沢医科大学プログラム がんプロ、がん拠点病院運営委員会共催 テーマ: がん治療の進歩と患者・家族のサポートを知ろう. 金沢. 2016 年 1 月 7 日(日)
 - 11) 正木康史. 悪性リンパ腫の治療. 市民公開講座「血液の病気と共に生きていくために」主催; のと血液疾患地域包括ケア研究会. 能登. 2016 年 2 月 14 日(日)
 - 12) 正木康史. IgG4 関連疾患の診断と治療. 第 5 回兵庫・大阪シェーグレンフォーラム. 大阪. 2016 年 3 月 12 日(土)
 - 13) 正木康史. IgG4 関連疾患に対する前方視的多施設共同治療研究 ~ 病理中央診断後の解析 ~ 第 60 回 日本リウマチ学会総会・学術集会 Workshop 49 「IgG4 関連疾患 3」
 - 14) 正木康史. 特別講演 新規疾患: TAFRO 症候群の診断基準と治療指針の作成. 第 31 回悪性リンパ腫治療研究会. 富山. 2016 年 4 月 23 日
 - 15) 正木康史. 集中治療管理が必要となりそうな血免の病気 ~ 血管内リンパ腫、IgG4 関連疾患、TAFRO 症候群 ~. 第 21 回 金沢医科大学麻酔科同門会. 金沢. 2016 年 5 月 21 日(土)
 - 16) 正木康史. 血液の病気 ~ 貧血の話 ~. 平成 28 年度 シェーグレンの会 中部ブロックミニ集会. (金沢) 2016 年 7 月 9 日(土)
 - 17) 正木康史. TAFRO 症候群の診断基準・診療ガイドラインの作成. 第 56 回日本リンパ網内系学会総会. 熊本. 2016 年 9 月 3 日(土)
 - 18) 正木康史. イブニングセミナー講演「指定難病としての SS&IgG4 ~ 患者さんとともに ~」第 25 回日本シェーグレン症候群学会. 東京. 2016 年 9

月9日(金)

19) 正木康史. 21世紀に本邦より発信された疾患; IgG4関連疾患とTAFRO症候群. 札幌シエーグレン勉強会. 札幌. 2016年9月16日(金)

20) 正木康史. 21世紀に本邦より発信された疾患概念; IgG4関連疾患とTAFRO症候群. 第12回日本橋血液交流会 NEXT (Nihonbashi Exchange Meeting on Hematology T) 東京. 2016年9月29日(木)

21) 正木康史. 教育講演「新たな疾患概念—TAFRO症候群—」. 第78回日本血液学会学術集会. 横浜. 2016年10月14日(金)

22) 正木康史. ベーチェット病の病態と治療について. ベーチェット病の講演会と療養相談会. 富山. 2016年10月29日

23) 正木康史. 世界の診断基準とスタンダード治療. 第31回日本臨床リウマチ学会. 特別企画「IgG4関連疾患の世界トップレベル」東京. 2016年10月30日(日)

24) 正木康史. キャッスルマン病とTAFRO症候群の診断と治療. 北日本血液研究会学術集会. 札幌. 2016年11月25日(金)

25) 井出. 2016年12月3日 5th Annual “Accelerating Research & Treatments for Castleman Disease” Working Dinner at ASH(San Diego America)において以下の発表を行った

Epidemiological research on the MCD therapy in Japan and establishment of patient organization

Kazuyuki Yoshizawa

Castleman disease in Japan

Norihiro Nishimoto

Tentative Diagnostic Criteria and Disease Severity Classification of Castleman Disease in Japan

Hiroshi Kawabata

TAFRO syndrome and iMCD —Toward a consensus in Japan—

Yasufumi Masaki*, Hiroshi Kawabata, and the Japanese Nation-wide Research Team

on TAFRO Syndrome

26) 宇野賀津子、嶋田裕記、坪倉正治、尾崎章彦、及川友好 他 福島県南相馬・相馬地域仮設住宅の健康に関する仮設懇談会と検診の取り組み: IFN- 産生能検査から見えて来たもの 第81回日本インターフェロン・サイトカイン学会学術集会 発表 長崎(平成28年5月)

27) 宇野賀津子、嶋田裕記、坪倉正治、尾崎章彦、及川友好 他 福島県南相馬・相馬地域仮設住宅の健康に関する仮設懇談会と検診の取り組み: IFN- 産生能検査から見えて来たもの 第16回日本抗加齢医学会総会発表 横浜(平成28年6月)

28) 高垣雅緒、宇野賀津子 NARRATIVE CASE STUDIES: HOW MADE THEIR FINAL DECISION TO SURVIVE FROM JAPANESE MAGA-EARTHQUAKE, TSUNAMI, AND NUCLEAR REACTOR ACCIDENT FOR TRANSGENDER PEOPLES. WPATH2016 国際会議参加発表 アムステルダム(平成28年6月)

29) 宇野賀津子 低線量放射線の生体影響と食の重要性～福島から何を学ぶ～ 「日本エネルギー環境教育学会第11回全国大会」シンポジウム講演 北海道(平成28年8月)

30) 宇野賀津子 「ふくしまから見る”性・家族”-災害が引き起こしたオトコとオンナの実態-」世界性の健康デー記念イベント2016性と神話- 解き放つー シンポジウム講演 京都教育文化センター(平成28年9月)

31) 宇野賀津子「低線量放射線の様々な影響」低線量放射線とその影響に関するシンポジウム 核融合研究所 シンポジウム講演(平成28年9月)

32) 宇野賀津子、嶋田裕記、坪倉正治、尾崎章彦、及川友好 他 USING IFN PRODUCTION TESTS, CLINICAL AND PSYCHOLOGICAL INDICATORS TO PROVIDE INDIVIDUALIZED SUPPORT FOR EVACUEES LIVING IN TEMPORARY HOUSING IN MINAMI-SOMA AND SOMA CITY (FUKUSHIMA) Cytokines 2016 (4th ANNUAL MEETING OF THE INTERNATIONAL CYTOKINE AND INTERFERON SOCIETY) 発表 サンフランシスコ平成28年10

33) 宇野賀津子、嶋田裕記、坪倉正治、尾崎章彦、藤宮仁、及川友好 他 多項目ビーズアレ

イ結果の非負値行列因子分解による解析の試み 第22回MPO研究会発表 京都(平成28年12月)

34) 宇野賀津子 USING IFN PRODUCTION TESTS, CLINICAL AND PSYCHOLOGICAL INDICATORS TO PROVIDE INDIVIDUALIZED SUPPORT FOR EVACUEES LIVING IN TEMPORARY HOUSING IN MINAMI-SOMA AND SOMA CITY (FUKUSHIMA) 第45回免疫学会総会 発表 沖縄コンベンションセンター(平成28年12月)

35) 川端浩: 多中心性キャスルマン病にみられる高ヘプシジン血症と炎症性貧血(シンポジウム講演). 第39回日本鉄バイオサイエンス学会学術集会, 岡山, 8月30日, 2015.

36) Masaki Y. Retrospective analysis of patients with a novel Japanese variant of multicentric Castleman disease associated with anasarca and thrombocytopenia;TAFRO syndrome. 第59回日本リウマチ学会総会・学術集会. 名古屋. 2015年4月25日

37) Masaki Y. A multicenter phase II prospective clinical trial of glucocorticoid treatment for patients with untreated IgG4-related disease. 13th International Sjögren's syndrome symposium. Bergen, Norway. 2015年5月21日

38) 正木康史. IgG4 関連疾患の診断と治療. 北陸皮膚免疫セミナー. 金沢. 2015年6月27日

39) 正木康史. IgG4 関連疾患に対する第II相多施設共同前方視的治療研究. 第55回日本リンパ網内系学会総会. 岡山. 2015年7月11日

40) 正木康史. 21世紀に本邦より発信された疾患概念; IgG4 関連疾患と TAFRO 症候群. Meet the Expert in Hematology. 横浜. 2015年7月18日

41) 正木康史. IgG4 関連疾患に対する前方視的多施設共同治療研究. 日本シェーグレン症候群学会. 岡山. 2015年9月19日

42) 正木康史. IgG4 関連疾患の診断と治療. 日本内科学会信越支部 第53回信越支部生涯教育講演会. 新潟. 2015年10月11日

43) 正木康史. IgG4 関連疾患の診断と治療 ~シェーグレン症候群との違いを中心に~. 平成27年度 東海・北陸地区リウマチ教育研修会. 福井. 2015年11月11日

44) Makoto Ide, Epidemiological research on the MCD therapy in Japan and establishment of patient organization.

International Castleman Disease Diagnostic Criteria Meeting, Philadelphia, Pennsylvania America. 2015.11.20-21

45) Koga T, Migita K, Sato S, Umeda M, Fukui S, Nishino A, Kawashiri S, Iwamoto N, Ichinose K, Tamai M, Nakamura H, Origuchi T, Ueki Y, Agematsu K, Eguchi K, and Kawakami A: Multiple Serum Cytokine Profiling to Identify Specific Molecular Networks in Attacks of Familial Mediterranean fever. ACR 2015 - 米国リウマチ学会議, San Francisco USA, 11/6-11, 2015.

46) Ushigusa T, Ichinose K, Tshuji S, Umeda M, Fukui S, Nishino A, Nakashima Y, Suzuki T, Horai Y, Koga T, Kawashiri S-Y, Iwamoto N, Hirai Y, Tamai M, Nakamura H, Origuchi T, Kawakami A: Evaluation of soluble a-klotho in neuropsychiatric systemic lupus erythematosus. Annual European Congress of Rheumatology 2015, Rome, Italy, 6/10-13, 2015.

47) 岩本直樹, 福田紘介, 荒牧俊幸, 一瀬邦弘, 寺田馨, 植木幸孝, 川上純: 異なる生物学的製剤投与による血清サイトカイン、ケモカイン、血管新生因子プロファイルの比較検討. 第59回日本リウマチ学会総会・学術集会, 名古屋市, 4/23-25, 2015.

48) 川尻真也, 折口智樹, 西野文子, 福井翔一, 辻創介, 梅田雅孝, 竇來吉朗, 中島好一, 鈴木貴久, 古賀智裕, 岩本直樹, 一瀬邦弘, 玉井慎美, 中村英樹, 青柳潔, 川上純: IgG4 関連疾患の病態は血清 GDF-15 濃度と関連する. 第59回日本リウマチ学会総会・学術集会, 名古屋市, 4/23-25, 2015.

49) 中村英樹, 高橋良子, 福田智美, 竇來吉朗, 中島好一, 有馬和彦, 小路武彦, 川上純: シェーグレン症候群唾液腺上皮細胞へのHTLV-直接感染と関連分子の発現について. 第59回日本リウマチ学会総会・学術集会, 名古屋市, 4/23-25, 2015.

50) 宇野賀津子, 岩橋充啓, 八木克巳, 吉崎和幸 多項目サイトカイン・ケモカイン・可溶性受容体

測定によるリウマチ抗体療法選択のバイオマーカーの探索 第 80 回日本インターフェロン・サイトカイン学会, 東京,7.17-18,2015

51) Kazuko Uno, Kazuyuki Yoshizaki, Mitsuhiro Iwahashi, Miki Tanigawa, Katsumi Yagi Pretreatment Prediction of Individual Rheumatoid Arthritis Patients' Response to Anti-Cytokine Therapy Using Serum Cytokine/Chemokine/Soluble Receptor Biomarkers Third Annual Meeting of the International Cytokine and Interferon Society. Bamberg, 10.11-14, 2015

52) Kazuko Uno, Kazuyuki Yoshizaki Is it possible to predict rheumatoid arthritis patients' response to anti-cytokine therapy using serum cytokine/chemokine/soluble receptor biomarkers before they are treated? 第 44 回日本免疫学会、札幌 11.18-20,2015

53) Kazuyuki Yoshizaki, Kazuko Uno Opposite role

of soluble forms of IL-6 receptor system, sIL-6R and sgp130, on the regulation of inflammatory status in rheumatoid arthritis 第 44 回日本免疫学会、札幌 11.18-20,2015

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

1) 正木康史(他 3 名、2 番目). IgG4 関連疾患診断用マーカー及びその利用(特許第 5704684 号「出願番号 特願 2010-194326」)・平成 27 年 3 月 6 日「出願年月日 平成 22 年 8 月 31 日」

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

資料1 キャスルマン病の拠点病院

地区	病院名	部門	称号	名前	〒	住所	
北海道	札幌北楡病院	血液内科	部長	太田 秀一	003-0006	札幌市白石区東札幌6条6丁目5番1号	
	北海道がんセンター	血液内科	医長	黒澤 光俊	003-0804	札幌市白石区菊水4条2-3-54	
	札幌医科大学附属病院	腫瘍・血液内科(第四内)	准教授	小船 雅義	060-8543	札幌市中央区南一条西16-291	
	札幌医科大学附属病院	小児科	准教授	要藤 裕孝	060-8543	札幌市中央区南一条西16-291	
	市立札幌病院	リウマチ・免疫内科	副院長	向井 正也	060-8604	札幌市中央区北十一条西13-1-1	
	市立札幌病院	小児科	部長	川村 信明	060-8604	札幌市中央区北十一条西13-1-1	
	勤医協中央病院	血液内科	部長	石原 敏道	007-8505	札幌市東区東苗穂5条1-9-1	
	旭川医科大学病院	第三内科	科長	奥村 利勝	078-8510	旭川市緑が丘東2条1丁目1番1号	
	帯広厚生病院	血液内科	部長	小林 一	080-0016	帯広市西六条南8-1	
	青森県	弘前大学附属病院	小児科	診療科長	伊藤 悦朗	036-8563	青森県弘前市本町53
山形県	山形大学附属病院	小児科	教授	三井 哲夫	990-9585	山形市飯田西2-2-2	
福島県	福島県立医科大学附属病院	血液内科	教授	池添 隆之	960-1295	福島市光が丘1	
茨城県	筑波大学附属病院	血液内科	教授	千葉 滋	305-8576	つくば市天久保2-1-1	
	水戸医療センター	血液内科	部長	米野 琢哉	311-3193	東茨城郡茨城町桜の郷280番地	
群馬県	群馬大学附属病院	血液内科	診療科長	半田 寛	371-8511	前橋市昭和町3-39-15	
	群馬大学附属病院	小児科		柴 徳生	371-8511	前橋市昭和町3-39-15	
埼玉県	藤岡総合病院	血液内科	医長	外山 耕太郎	375-8503	藤岡市藤岡942-1	
	埼玉医科大学総合医療センター	血液内科	教授	大崎 昌弘	350-8550	川越市鴨田1981	
千葉県	埼玉医科大学総合医療センター	リウマチ・膠原病内科	教授	天野 宏一	350-8550	川越市鴨田1981	
	埼玉医科大学附属病院	血液内科	教授	中村 裕一	350-0495	入間郡毛呂山町毛呂本郷38	
千葉県	千葉大学医学部附属病院	血液内科	科長	中世古 知昭	260-8677	千葉市中央区亥鼻1-8-1	
	国立国際医療センター国府台病院	リウマチ・膠原病科	科長	狩野 俊和	272-8516	市川市国府台1-7-1	
東京都	亀田総合病院	血液・腫瘍内科	部長	未永 孝生	296-8602	鴨川市東町929	
	東京女子医科大学病院	血液内科	教授	田中 淳司	162-0054	新宿区河田町8番1号	
	永寿総合病院	血液内科	部長	萩原 政夫	111-8645	台東区東上野二丁目2番16号	
	東京大学附属病院	血液腫瘍内科		中村 文彦	113-0033	文京区本郷七丁目3番1号	
	JR東京総合病院	血液内科	医長	杉本 耕一	151-8528	渋谷区代々木2-1-3	
	東邦大学大橋病院	膠原病リウマチ科	教授	亀田 秀人	153-8515	目黒区大橋2-17-6	
	JCHO東京山手メディカルセンター	血液内科	部長	柳 富子	169-0073	新宿区百人町3-22-1	
	日本医科大学附属病院	血液内科	部長	猪口 孝一	113-8603	文京区千駄木1-1-5	
	東京医療センター	血液内科	医長	矢野 尊啓	152-8902	東京都目黒区東が丘2-5-1	
	災害医療センター	血液内科		関口 直宏	190-0014	東京都立川市緑町3256	
	東京大学医科学研究所附属病院	血液内科	診療科長	東條 有伸	108-8639	東京都港区白金台4-6-1	
	東京大学医科学研究所附属病院	アレルギー免疫科	診療科長	田中 廣壽	108-8639	東京都港区白金台4-6-1	
	日本赤十字社医療センター	血液内科	部長	石田 禎夫	150-8935	渋谷区広尾4-1-22	
	東京医科歯科大学附属病院	膠原病・リウマチ科		斎藤 鉄也	113-8519	文京区湯島1-5-45	
	湯川リウマチ内科クリニック		院長	湯川 宗之助	180-0023	武蔵市境南町3-14-6 山桃ビル3F	
神奈川県	横浜市立附属病院	血液・リウマチ・感染症	部長	中島 秀明	236-0004	横浜市金沢区福浦3-9	
	横浜市立附属病院	小児科	部長	伊藤 秀一	236-0004	横浜市金沢区福浦3-9	
	神奈川県立循環器呼吸器病センター	呼吸器内科	副院長	小倉 高志	236-0051	横浜市金沢区富岡東6-16-1	
	昭和大学藤が丘病院	血液内科	医長	原田 浩史	227-8501	横浜市青葉区藤が丘1-3-0	
	虎の門病院分院	血液内科	部長	和氣 敦	213-0015	川崎市高津区梶ヶ谷1-3-1	
	聖マリアンナ医科大学病院	血液内科	准教授	富田 直人	216-8511	川崎市宮前区菅生2-16-1	
	聖マリアンナ医科大学横浜西西部病院	血液内科	副部長	佐野 文明	241-0811	横浜市旭区矢指町1197-1	
	JCHO横浜保土ヶ谷中央病院	膠原病・リウマチ科	副院長	川井 孝子	240-8585	横浜市保土ヶ谷区釜台町43-1	
	新潟県	新潟県立がんセンター新潟病院	内科	臨床部長	張 高明	951-8566	新潟市中央区川岸町2丁目15番地3
	新潟市民病院	血液内科	副院長	高井 和江	950-1197	新潟市中央区鐘木46番地7	
富山県	富山県立中央病院	内科(血液)	部長	奥村 廣和	930-8550	富山市西長江2-2-78	
	富山大学附属病院	免疫・膠原病内科	科長	多喜 博文	930-0194	富山市杉谷2630	
	富山赤十字病院	血液内科	部長	黒川 敏郎	930-0859	富山市牛島本町2-1-58	
石川県	金沢大学附属病院	血液内科		近藤 恭夫	920-8641	金沢市宝町13番1号	
福井県	福井大学附属病院	血液・腫瘍内科	科長	山内 高弘	910-1193	福井県吉田郡永平寺町松岡下合月23-3	
山梨県	山梨大学医学部附属病院	血液・腫瘍内科	科長	桐戸 敬太	409-3898	中央市下河東1110	
長野県	信州大学医学部附属病院	血液内科		中澤 英之	390-8621	松本市旭3-1-1	
	まつもと医療センター 松本病院	血液内科	院長	北野 豊良	399-8701	長野県松本市村井町南2-20-30	
岐阜県	岐阜大学医学部附属病院	血液内科	科長	鶴見 寿	501-1193	岐阜市柳戸1-1	
静岡県	順天堂大学附属静岡病院	血液内科	教授	小池 道明	410-2295	伊豆の国市長岡1129番地	
	浜松医療センター	血液内科	科長	内藤 健助	432-8002	浜松市中区塚塚町328	
愛知県	豊橋市民病院	血液・腫瘍内科	部長	杉浦 勇	441-8570	豊橋市青竹町八間西50	
	総合大雄会病院	血液内科	部長	爾見 雅人	491-0036	一宮市桜1-9-9	
	JA愛知厚生海南病院	血液内科	部長	矢野 寛樹	498-0017	弥富市前ヶ須町南本田396	
	愛知医科大学病院	血液内科	部長	高見 昭良	480-1195	長久手市岩作雁又1-1	
名古屋医療センター	血液内科	医長	飯田 浩充	460-0001	名古屋市中区三の丸4-1-1		
三重県	松坂中央総合病院	血液内科	部長	水谷 実	515-8566	松坂市川井町字小望102	
	伊勢赤十字病院	血液内科	部長	玉木 茂久	516-8512	伊勢市船江1-471-2	
	三重大学附属病院	血液内科		山口 素子	514-8507	津市江戸橋2-174	
滋賀県	大津赤十字病院	血液免疫内科	部長	大野 辰治	520-0046	大津市長等1-1-35	
京都府	京都桂病院	血液内科	部長	森口 寿徳	615-8256	京都市西京区山田平尾町17	
	京都第二赤十字病院	血液内科	部長	魚嶋 伸彦	602-8026	京都市上京区釜座通丸太町上ル春帯町355	
	京都府立医科大学附属病院	血液内科	部長	黒田 純也	602-8566	京都市上京区河原町通広小路上ル槐井町465	
大阪府	高槻赤十字病院	血液・腫瘍内科	部長	安齋 尚之	569-1045	高槻市阿武野一丁目1番1号	
	関西医科大学病院	血液腫瘍内科	教授	野村 昌作	569-1045	枚方市新町二丁目5番1号	
	関西医科大学総合医療センター	血液腫瘍内科	教授	石井 一慶	570-8507	守口市文園町10-15	
	近畿大学附属病院	呼吸器・アレルギー内科	教授	東田 有智	589-8511	大阪府大阪狭山市大野東377-2	
	吹田徳洲会病院	総合診療科	部長	川上 英孝	565-0814	吹田市千里丘西21番1号	
	淀川キリスト教病院	呼吸器内科	部長	藤原 寛	533-0024	大阪市東淀川区柴島1丁目7番50号	
	NTT西日本大阪病院	アレルギー・リウマチ	部長	緒方 篤	543-8922	大阪市天王寺区烏ヶ辻2-6-40	
	八尾徳洲会総合病院	膠原病リウマチ科		吉崎 和幸	581-0011	大阪府八尾市若草町1番17号	
	住友病院	膠原病・リウマチ内科	部長	角田 慎一郎	530-0005	大阪府北区中之島5丁目3番20号	

兵庫県	兵庫県立加古川医療センター	リウマチ膠原病センター		塩沢 和子	675-0009	兵庫県加古川市神野町西条1545-1
	兵庫医科大学病院	血液内科	診療部長	小川 啓恭	573-1191	西宮市武庫川町 1 - 1
	神戸市医療センター西市民病院	呼吸器内科		富岡 洋海	653-0013	神戸市長田区1-2-4
	西脇市立西脇病院	血液内科	部長	松井 利充	565-0871	西脇市下戸田 6 5 2 番地の 1
	兵庫県立こども病院	血液・腫瘍内科	部長	小阪 嘉之	654-0081	神戸市須磨区高倉台 1 丁目 1 番 1 号
	神戸徳洲会病院	膠原病・リウマチ外来		吉崎 和幸	655-0017	兵庫県神戸市垂水区上高丸1-3-10
	赤穂中央病院	内科	部長	矢部 博樹	678-0239	赤穂市加里屋字新町99
	神鋼記念病院	膠原病リウマチ科	センター	熊谷 俊一	651-0072	兵庫県神戸市 中央区脇浜町 1 丁目 4 - 4 7
	西神戸医療センター	免疫血液科		新里 偉咲	651-2273	神戸市西区梶台5-7-1
	JCHO神戸中央病院	内科(血液・免疫)	部長	足立 陽子	651-1145	神戸市北区惣山町2-1-1
	神戸医療センター中央市民病院	血液内科	部長	石川 隆之	650-0047	神戸市 中央区 港島南町2-1-1
奈良県	近畿大学奈良病院	血液内科	診療科長	花本 仁	677-0043	生駒市乙田町 1 2 4 8 - 1
和歌山県	和歌山県立医科大学病院	血液内科	教授	園木 孝志	641-8510	和歌山市 紀三井寺811-1
	和歌山県立医科大学病院	リウマチ・膠原病科	教授	藤井 隆夫	641-8510	和歌山市 紀三井寺811-1
岡山県	倉敷中央病院	血液内科	部長	上田 恭典	710-8602	岡山県倉敷市美和1-1-1
	岡山医療センター	血液内科	医長	角南 一貴	701-1192	岡山市北区田益1711-1
広島県	広島西医療センター	内科	診療部長	下村 壮司	683-8518	広島県大竹市玖波4-1-1
	広島赤十字・原爆病院	血液内科	部長	麻奥 英毅	730-8619	広島市 中区 千田町1-9-6
	広島赤十字・原爆病院	リウマチ科	部長	澤部 琢哉	730-8619	広島市 中区 千田町1-9-6
愛媛県	愛媛県立中央病院	血液内科	部長	名和由一郎	790-0024	松山市春日町 8 3 番地
	松山市民病院	内科		成見 弘	790-0067	松山市大手町 2 丁目 6 番地 5
	愛媛大学医学部附属病院	血液内科	教授	安川正貴	791-0295	東温市志津川
香川県	KKR高松病院	血液内科	副院長	森 由弘	760-0018	高松市 天神前4-18
高知県	吉井病院		院長	吉井 一郎	787-0033	四万十市 中村大橋通6-7-5
福岡県	福岡大学病院	腫瘍・血液・感染症内科	部長	高松 泰	903-0125	福岡県福岡市城南区七隈 7 丁目 4 5 番 1 号
	福岡大学病院	小児科		野村 優子	903-0125	福岡県福岡市城南区七隈 7 丁目 4 5 番 1 号
	久留米大学病院	血液・腫瘍内科	教授	長藤 宏司	830-0011	福岡県久留米市旭町 6 7 番地
	地域医療機能推進機構(JCHO)九州病院	血液・腫瘍内科	医長	牟田 毅	814-0180	福岡県北九州市八幡西区岸の浦一丁目 8 番 1 号
	九州大学病院	免疫・膠原病・感染症内科		有泉 洋二郎	830-0011	福岡県福岡市東区馬出 3 丁目 1 - 1
	産業医科大学病院	血液内科	教授	塚田 順一	807-8555	北九州市 八幡西区 医生ヶ丘1-1
長崎県	長崎医療センター	血液内科	医長	吉田 真一郎	902-0061	長崎県大村市久原2-1001-1
宮崎県	宮崎大学附属病院	第2内科	科長	下田 和哉	889-1692	宮崎市 清武町木原5200
鹿児島県	大隅鹿屋病院	内科		田村 幸大	893-0015	鹿児島市新川町6081-1
沖縄県	琉球大学附属病院	第二内科	教授	益崎 裕章	890-0075	中頭郡西原町上原 2 0 7

資料 2.3 キャッスルマン病の診療ガイドライン

キャッスルマン病診療の参照ガイド

厚生労働科学研究費補助金(難治性疾患等政策研究事業)

キャッスルマン病の疫学診療実態調査と
患者団体支援体制の構築に関する調査研究班

参照ガイド作成責任者

吉崎 和幸 大阪大学産業科学研究所 第3研究部門医薬品化学研究分野

参照ガイド作成メンバー

岡本真一郎 慶應義塾大学医学部血液内科学

川端浩 金沢医科大学血液免疫内科学

水木満佐央 大阪大学医学部附属病院化学療法部

川上純 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科先進予防医学講座

正木康史 金沢医科大学血液免疫内科学

矢野真吾 東京慈恵会医科大学腫瘍・血液内科学

井出眞 日本赤十字社高松赤十字病院血液内科

宇野賀津子 (公財)ルイ・パストゥール医学研究センター

八木克巳 (公財)ルイ・パストゥール医学研究センター

小島俊行 日本赤十字社名古屋第一赤十字病院救急部

水谷実 三重厚生連松阪中央総合病院血液内科

徳嶺進洋 市立伊丹病院血液内科

西本憲弘 大阪リウマチ・膠原病クリニック

藤原寛 在日本南プレスビテリアンミッション淀川キリスト教病院呼吸器内科

中塚伸一 関西ろうさい病院病理診断科

塩沢和子 一般財団法人甲南会甲南加古川病院リウマチ膠原病センター

岩城憲子 金沢大学医薬保健研究域医学系細胞移植学

古賀智裕 長崎大学病院医療教育開発センター

1. 序文

キャスルマン病は、原因不明の難治性のリンパ増殖性疾患であり、適切な治療を行わなければ患者のQOL 低下や生命予後の短縮につながる病態を呈する。しかしながら、これまで本疾患の明確な診断基準や重症度分類が定まっておらず、医療者の間でもその認知度が低かった。これに対して、厚生労働科学研究費補助金(難治性疾患等政策研究事業)の「キャスルマン病の疫学診療実態調査と患者団体支援体制の構築に関する調査研究班」では、本疾患の診断基準案と重症度分類案を策定した。さらに、本疾患の診療ガイドラインの策定を目指して活動を行っている。診療ガイドラインは、診療上のさまざまな問題点に対してエビデンスに基づいた現時点での妥当な診療方針を推奨レベルとともに提示するものであるが、キャスルマン病は希少疾患であり、世界的にみてもエビデンス・レベルの高い臨床研究が極めて少ない。このため、正式な診療ガイドラインを作成する前の課題として、まず、本疾患の臨床的な概要を医療者に広く周知することを目的とした「診療の参照ガイド」を策定することとした。

この「診療の参照ガイド」は、医師、看護師、検査技師、薬剤師、放射線技師などの医療従事者を対象として、キャスルマン病の診療において医療上参考になる基本情報を提供することを目的として作成された。今後、本疾患に関するさまざまなエビデンスの集積によって、質の高い「診療ガイドライン」へと発展させていくことを目指す。

2. キャッスルマン病の疾患概念と分類

キャッスルマン病は、1950年代にマサチューセッツ総合病院の Castleman らによって最初に記載された、非クローン性のリンパ増殖性疾患である^{1, 2)}。最初の報告は胸腺腫に類似した縦隔腫瘤で、リンパ節の濾胞過形成と胚中心に向って貫通する硝子化した血管が特徴的とされた(硝子血管型(hyaline-vascular type))。当初は「巨大リンパ節過形成症(giant lymph node hyperplasia)」とも呼ばれていた。その後、病理組織学的に、リンパ節の濾胞間領域にシート状に形質細胞が増生する(形質細胞型(plasma cell type))、および硝子血管型と形質細胞型の組織像が混在する(混合型(mixed type))の存在が明らかになった³⁾。病理組織所見だけでなく、病変の分布によっても病型が分けられる(Fig. 1)。すなわち、病変が1つの領域に局限する単中心性(局限型; unicentric Castleman disease, UCD)と、複数の領域に広がる多中心性(multicentric Castleman disease, MCD)が明確に区別される⁴⁻⁶⁾。MCDはさらに、ヒト・ヘルペスウイルス8型(human herpesvirus-8, HHV-8; カポジ肉腫関連ヘルペスウイルス Kaposi's sarcoma-associated herpesvirus, KSHVとも呼ばれる)の感染によるHHV-8関連MCDと、HHV-8感染のみられない特発性MCDに分類される^{7, 8)}。

3. 疫学

キャスルマン病は小児から70歳代まで幅広い年齢層で見られるが、発症年齢中央値はUCDが30歳代、MCDは50歳代とされる。海外からの報告はUCDが多いが、わが国からの報告は圧倒的にMCDが多い⁹⁻¹²⁾。

HHV-8関連MCDの多くは、ヒト免疫不全ウイルス(human immunodeficiency virus, HIV)の感染者にみられる¹³⁾。現在のところ、わが国ではまれである^{12, 14)}。

わが国におけるキャスルマン病の発症率や有病率についての信頼できるデータは今のところない。本研究班では、既存のデータ(金沢医科大学を中心施設として行われている疫学調査「新規疾患;TAFRO 症候群の疾患概念確立のための多施設共同後方視的研究」と、中外製薬株式会社が実施し tocilizumab 使用者を全例登録してきた「アクテムラ特定使用成績調査」¹⁵⁾)から、わが国におけるMCDの有病者数を1500人程度、年間発症頻度を100万人あたり1人程度と推定した。Robinsonらは、米国の2施設における調査の結果から、米国におけるMCDの100万人あたりの発症率を年間0.24人と推定している¹⁶⁾。一方、Munshiらは、健康保険レセプトデータベースを利用して、米国におけるキャスルマン病の発症率を推計した。これによると、キャスルマン病の年間発症率は100万人当たり21~25人で、このうちUCDが16~19人、MCDが5~6人と推定された¹⁷⁾。これを単純に日本の人口に当てはめると、わが国のMCD患者の発症数は年間600人程度となる。

4. 病因論

キャッスルマン病のリンパ節では成熟 B 細胞や形質細胞が増加しているが、これらは多クローン性であり、反応性の増加と考えられる。同様に、病変リンパ節で見られる血管増生も反応性の変化と考えられる。こういったリンパ節組織像の変化、およびキャッスルマン病で見られる症候の多くは、炎症性サイトカインであるインターロイキン6 (interleukin 6, IL-6) などの過剰によって説明できる¹⁸⁻²⁰。IL-6 は形質細胞への分化を誘導し、血管内皮増殖因子 (vascular endothelial growth factor, VEGF) の発現を増加させて血管増生を促し、血小板を増加させ、発熱や CRP 上昇、小球性貧血などのキャッスルマン病で見られるさまざまな症候の原因となる²¹。キャッスルマン病における IL-6 の産生細胞はリンパ濾胞の胚中心の B 細胞とする報告がある¹⁸。

HHV-8 関連 MCD においては、ウイルスゲノム由来の vIL-6 が病態形成に深くかかわっている²²。HHV-8 はカポジ肉腫 (Kaposi's sarcoma) や原発性滲出液リンパ腫 (primary effusion lymphoma) の原因ウイルスでもある。病変リンパ節における vIL-6 の発現は、宿主の細胞の IL-6 の産生を刺激して、協調的に全身性のリンパ節腫脹や炎症症状を惹起するものと考えられる^{23, 24}。

一方、HHV-8 陰性のキャッスルマン病については、どういった機序で IL-6 が過剰産生されるのか、正確には解明されていない。仮説として、未知のウイルスなどによる感染症、自己免疫的な機序、あるいは腫瘍随伴症候群などが想定されている²⁵。キャッスルマン病は非腫瘍性の疾患と考えられているが、キャッスルマン病患者のリンパ節の短期培養系を用いた実験で、濾胞樹状細胞 (follicular dendritic cells) や筋様細胞 (myoid cells) などのストローマ細胞にクローン性の染色体異常がみられたという報告がある²⁶⁻²⁸。こういった細胞が IL-6 を産生して病態形成にかかわっているのかもしれない。実際、キャッスルマン病患者に続発した濾胞樹状細胞肉腫 (follicular dendritic cell sarcoma) が多数報告されている²⁹⁻³⁷。このほか、MCD の患者では IL-6 受容体の可溶化を促す SNP を有する頻度が高いという報告があり、遺伝学的素因の関与もあるのかもしれない³⁸。

5.診断

キャッスルマン病の診断には、病理診断が必須である。原則として、リンパ節の病理診断を行う。身体所見、全身の CT あるいは FDG-PET (保険適用外)³⁹⁾によりリンパ節病変のサイズや分布を評価し、生検するリンパ節を選定する。

本研究班では、キャッスルマン病の診断基準を下記のように暫定的に策定した。

キャッスルマン病の診断基準案

A および B を満たすものをキャッスルマン病と診断する。

A 以下の2項目を満たす。

- 1 腫大した(長径 1 cm 以上の)リンパ節を認める。
- 2 リンパ節または臓器の病理組織所見が、下記のいずれかのキャッスルマン病の組織像に合致する。

- 1) 硝子血管型
- 2) 形質細胞型
- 3) 硝子血管型と形質細胞型の混合型

B リンパ節腫大の原因として、以下の疾患が除外できる。

- 1 悪性腫瘍⁵⁾
血管免疫芽球性 T 細胞性リンパ腫、ホジキンリンパ腫、濾胞樹状細胞肉腫、腎がん、悪性中皮腫、肺がん、子宮頸がんなど。
- 2 感染症
非結核性抗酸菌症、ねこひっかき病、リケッチア感染症、トキソプラズマ感染症、真菌性リンパ節炎、伝染性単核球症、慢性活動性 EB ウイルス感染症、急性 HIV 感染症など。
- 3 自己免疫疾患
SLE、関節リウマチ、シェーグレン症候群など。
- 4 その他の類似した症候を呈する疾患
IgG4 関連疾患¹⁾、組織球性壊死性リンパ節炎、サルコイドーシス、特発性門脈圧亢進症など。

*キャスルマン病の組織像¹⁻³⁾

1) 硝子血管型 Hyaline vascular type (Fig. 2)

- ・リンパ節の基本構造は保たれる (Fig.2-a)。
- ・リンパ濾胞は拡大するが、胚中心は萎縮性で、相対的にマントル層が肥厚する (Fig.2-b)。
- ・胚中心内のリンパ球は減少し、壁の硝子化を伴った小血管の増生と軽度の異型を示す濾胞樹状細胞の集団によって置き換えられる(angiosclerosis; Fig.2-c, d)。
- ・診断に必須な所見ではないが、マントル層のリンパ球が同心円状(onion-skinning)に配列するように見えることがある (Fig.2-c,d)。
- ・硝子化した小血管が放射状に胚中心に侵入する像をしばしば認める (Fig.2-d)。

2) 形質細胞型 Plasma cell type (Fig. 3)

- ・リンパ節の基本構造は保たれる (Fig.3-a)。
- ・リンパ濾胞、胚中心は正～過形成を示す (Fig.3-b)。
- ・胚中心に小血管の増生を認めることがあるが、angiosclerosis を認めることは通常ない (Fig.3-c)。
- ・濾胞間領域に小血管の増生、線維化を認めることがあるが、硝子化した血管を認めることは通常ない (Fig.3-b,c)。
- ・濾胞間領域に著明な形質細胞のびまん性の浸潤を認める。ときに Russell 小体の出現を伴う (Fig.3-c, d)。
- ・マントル層～濾胞間領域に核小体の明瞭な大型偏在核を示す形質芽球を認めることがある (Fig.3-d)。

3) 混合型 Mixed type

- ・胚中心の angiosclerosis と形質細胞の著明な浸潤を伴うような硝子血管型と形質細胞型の特徴を兼ね備えた組織像を示す。

補足:ヒト・ヘルペスウイルス8型 (HHV-8) 関連多中心性キャスルマン病の組織像⁴⁾

形質細胞型ないしは混合細胞型の組織像を示す。しばしば胚中心の萎縮と angiosclerosis が目立つ。マントル層～濾胞間領域に HHV-8 陽性の形質芽球を多数認める。形質芽球は IgM を発現し、軽鎖制限がみられるが、IgH 再構成検査でみると多クローン性である。欧米では形質芽球亜型 (plasmablastic variant) として扱われる。

診断に際しての参考事項

- 1 自覚症状は、無症状のものから重篤なものまで様々である。頻度の高い症状として、微熱～中等度の発熱、全身倦怠感、易疲労感、体重減少、盗汗、リンパ節腫脹がある。一部の症例では皮疹(扁平ないし軽度隆起した褐色～暗赤色の皮疹、類天疱瘡、キサントーマ、アトピー性皮膚炎、黄色腫、血管腫)、腹満、浮腫、息切れ、呼吸困難感、出血傾向がみられる。ときに脳梗塞などの血栓症や、末梢神経障害を認める。
- 2 画像検査では、リンパ節腫脹のほかに、肝脾腫や、胸水、腹水、間質性の肺陰影をみとめることがある。
- 3 血液検査では、多くの場合に炎症反応(CRP)が陽性で、血中の IL-6 濃度の上昇がみられる。また、小球性貧血、血小板増多、血清 LDH 低値、低アルブミン血症、高アルカリホスファターゼ血症、多クローン性の高ガンマグロブリン血症、高 IgE 血症、高 VEGF 血症を呈することが多い。また、しばしば抗核抗体などの自己抗体が陽性となる。
- 4 一部の症例では腎障害(蛋白尿、血清クレアチニン値上昇)、間質性の肺病変、肺高血圧症、拡張型心筋症、自己免疫性の血小板減少症、自己免疫性溶血性貧血、内分泌異常(甲状腺機能低下症など)、アミロイドーシスを合併する。
- 5 高ガンマグロブリン血症にともなって血清 IgG4 高値や組織中 IgG4 陽性細胞増多を示すことがある。その際に、発熱、CRP 高値、小球性貧血、血小板増多などの高 IL-6 血症に伴う反応が認められる場合は、IgG4 関連疾患よりもキャッスルマン病の可能性を強く考える。
- 6 HHV-8 関連のキャッスルマン病は、特徴的なリンパ節組織像と、リンパ節組織中あるいは血中における HHV-8 の存在を証明することによって診断する。多くは HIV 感染者に見られ、カボジ肉腫や悪性リンパ腫を合併することも多い。
- 7 POEMS 症候群は、単クローン性のガンマグロブリン血症をとともなう進行性のポリニューロパチーで、多発性骨髄腫類縁のリンパ系腫瘍と考えられるが、その一部がキャッスルマン病と重なる病態を呈する。治療法や予後は異なるが、本診断基準では除外すべき疾患には含めない。
- 8 TAFRO 症候群は、血小板減少、全身性の浮腫、発熱、骨髄の線維化、肝脾腫を特徴とした臨床像から提唱された疾患概念である。キャッスルマン病に合致するリンパ節病理組織像がみられることがあり、特発性多中心性キャッスルマン病との異同が議論されている。現時点では除外すべき疾患には含めない。

6, 臨床的病型分類

本研究班では、キャスルマン病の臨床的病型分類を下記のように暫定的に策定した²⁵⁾。

単中心性(限局型)

病変リンパ節が1個のみ、あるいは外科的全切除が可能な一つの領域に限局しているもの。

多中心性

病変リンパ節が複数の領域にまたがっているもの。

HHV-8 関連

免疫不全を背景とした HHV-8 感染によるもの。

特発性

HHV-8 感染のみられないもの。

7. 重症度分類

本研究班では、キャスルマン病の重症度分類を下記のように暫定的に策定した。なお、特発性MCDについては、Castleman Disease Collaborative Networkを中心として、各症候をスコア化して重症度分類を行う国際基準が策定されつつある。

重症度分類

外科的切除などの局所療法が可能な単中心性(限局型)の場合は軽症とする。

多中心性、および外科的切除などの局所療法が不可能な単中心性(限局型)については、キャスルマン病に起因すると考えられる下記の症候の有無によって重症度を判定する。

おおむね1か月間以上、下記の症候のいずれかがみられる場合、重症とする。

- ◆ 炎症性貧血: Hb 7 g/dL 未満(フェリチン値の低下の無いことを確認すること)、または定期的な赤血球輸血を要する貧血。
- ◆ 血小板減少: 輸血不応状態または輸血依存性の血小板減少。
- ◆ 低アルブミン血症: 血清アルブミン値 1.5 g/dl 未満。
- ◆ 腎機能障害: GFR 15 ml/分/1.73m² 未満またはネフローゼ症候群。
- ◆ 肺病変: 間質性の肺陰影がみられ、安静時にも酸素吸入を要する。
- ◆ 胸腹水: 症状緩和のためにドレナージを要する程度の胸水あるいは腹水の貯留。
- ◆ 心不全: EF 40%未満またはNYHA IV度の心機能低下。

重症に該当しないが、下記のいずれかがみられる場合、中等症とする。

- ◆ 炎症性貧血: Hb 9 g/dL 未満(フェリチン値の低下の無いことを確認すること)。
- ◆ 血小板減少: 血小板数2万/μL 未満。
- ◆ 低アルブミン血症: 血清アルブミン値 2.0g/dL 未満。
- ◆ 腎機能障害: GFR 45 mL/分/1.73m² 未満または尿蛋白 Cr 比 0.5 g/gCr 以上。
- ◆ 肺病変: 間質性の肺陰影がみられ、日常の軽い労作で呼吸困難がみられる。
- ◆ 胸腹水: 画像上明らかな胸水あるいは腹水の貯留。
- ◆ 心不全: EF 50%未満またはNYHA III度の心機能低下。
- ◆ 病理診断された二次性アミロイドーシスに起因する臓器障害(神経、心

臓、腎臓、消化管、呼吸器、泌尿器、眼、骨・関節、または内分泌臓器
のいずれか)。

上記に該当しない場合、軽症とする。

8. 病型別の臨床像・診断・治療・予後

(1) 単中心性(限局型)キャスルマン病(UCD)

UCD は、リンパ節の腫大以外には自覚症状に乏しく、たまたま画像検査などで見つかることが多い。鉄剤不応性の小球性貧血としてみつかるとともに小児例もある⁴¹⁾。病変部位は胸部が多く、次いで頸部、腹部、後腹膜の順である。病変リンパ節のサイズはMCDに比べてやや大きく、長径5～6 cm程度のことが多い⁴²⁾。病変部位が1か所に限局していることと、病理組織所見(多くは硝子血管型)によって診断する。

病変リンパ節に対する局所療法(外科的切除など)によって治癒が期待できる。治癒には完全にとりきることが重要である。外科切除後に再発した場合や、切除が困難で全身性の炎症症状がみられる場合は、特発性MCDに準じた治療を行う。Talatらの予後に関する多変量解析では、年齢や性別、病変部位、組織型は生存予後に関係なく、手術による病変の全摘除が行われたか否かのみが予後に関連していた¹⁰⁾。この報告によると、硝子血管型のUCD 206例の3年無病生存率は92.5%であった。

(2) 特発性 MCD

a. 臨床像と診断

臨床症状としては、リンパ節腫脹、肝脾腫、発熱、倦怠感、盗汗、貧血がみられ、ときに皮疹、浮腫、胸腹水、腎障害、間質性の肺病変、関節痛などの多彩な症状を呈する¹²⁾。リンパ節は表在性のものが多く、UCDに比べるとやや小さい⁴²⁾。血液検査では、正～小球性の貧血、多クローン性の高ガンマグロブリン血症、高CRP血症がみられる。多くの症例で血清アルカリホスファターゼ高値を示すが、LDHは正常～低値のことが多い¹²⁾。高IL-6血症がみられ、血漿中のVEGFも高値を示す。小球性の貧血は、IL-6によって鉄代謝制御ホルモンのヘプシジンが過剰に産生され、鉄の利用障害を生じるためと考えられる^{43, 44)}。血小板は炎症を反映して増加していることが多いが、ときに免疫学的な機序による減少を認める。主な症候と検査値異常をTable 1に示す。

リンパ節病理組織像は、多くの場合、形質細胞型あるいは混合型を呈する。特発性MCDの診断には、類似した臨床像と病理組織像をとりうるさまざまな疾患の除外が極めて重要である^{45, 46)}。

b. 治療

臨床症状が軽微な場合には無治療で経過観察する場合もあるが、多くの場合、倦怠感などの症状を緩和するために治療介入が必要となる。全身性の炎症症状が軽度の場合には、まず低用量～中等量のprednisolone(臓器症状がない場合は～0.3 mg/kg、臓器症状がみられる場合は0.5～1 mg/kg程度)で症状の緩和を試み、症状が改善したら徐々に減量する。prednisoloneは約半数の患者で有効である⁴⁷⁾。ごく少量のprednisoloneによって長期間にわたって安定している症例もあるが、完全に中止できる例は少ない。長期に投与を行う場合は、糖尿病や骨粗鬆症の発症、ヘルペスウイルスや真菌などによる感染症に注意が必要である。

炎症症状が強い場合や、腎や肺などに重篤な臓器障害を有する場合(重症度分類で中等症以上)には、tocilizumabの併用を検討する。現時点では軽症であっても、ステロイド投与で臨床症状あるいは臓器障害の進行が十分コントロールできないと考えられる場合にも、Tocilizumabの投与を考慮する。Tocilizumabは、現時点でMCDに対して臨床試験で有効性が確認されて我が国で保険収載されている唯一の薬剤である。

Tocilizumab 治療開始に当たっては、生涯にわたって本治療の継続が必要になる可能性について患者に説明しておく。原則として 8 mg/kg を 2 週間ごとに点滴投与する(症状により 1 週間まで投与間隔を短縮できる)。併存疾患などのためにステロイド治療が不相当と判断される場合には、初期治療として tocilizumab を単独で用いてもよい。多くの場合、tocilizumab 治療を開始すると、さまざまな全身の炎症症状や検査値異常がすみやかに改善する^{20, 48)}。併用している prednisolone を減量・中止できることも多い。また、腫大していた脾臓やリンパ節も徐々に縮小する。合併する心筋障害に対しても有効であったという報告もある^{49, 50)}。副作用としては、頭痛、上気道炎、掻痒、皮疹、アレルギーなどがある。これらは軽微なものが多いが、肺炎や敗血症などの重篤な感染症も報告されている^{15, 51)}。Tocilizumab の投与は CRP の上昇をおさえるので、感染症を見逃さないように十分な注意が必要である。アナフィラキシーは 1% 強の症例に認められている。Tocilizumab は、いったん投与を開始すると中止しないのが原則であるが、やむを得ず中止する場合は、ステロイドを一時的に投与または増量して炎症症状のリバウンドを予防する。Tocilizumab 治療を開始すると血清中の IL-6 濃度(保険適用外検査)が跳ね上がるが、これは、IL-6 が受容体に結合できずに血漿中から除去されないためである¹⁵⁾。治療中に血清 IL-6 濃度が徐々に低下してくる場合は、症状の再燃なしに tocilizumab の投与間隔を延長ないし中止できることがある¹²⁾。

IL-6 に対する抗体製剤の siltuximab は tocilizumab に匹敵する治療効果がみられ、2014 年に米国の FDA で認可された(本邦未承認)。現時点ではランダム化比較試験で有効性が確認された唯一の薬剤である⁵²⁾。

副腎皮質ステロイドや tocilizumab による治療に不応性または不耐容で病勢のコントロールが困難な場合には、ステロイドパルス療法や、悪性リンパ腫や多発性骨髄に準じた抗がん剤治療(cyclophosphamide, doxorubicin, vincristine, etoposide, rituximab, melphalan, bortezomib, thalidomide など)が試みられている(いずれも保険適用外)⁵³⁻⁵⁵⁾。

c. 予後

特発性 MCD は、適切な治療を行えば比較的予後が良好である¹⁴⁾。1980 年代の欧米からの報告では MCD の予後は生存期間中央値が 26~30 か月と芳しくなかったが、これは HHV-8 関連 MCD を含んでいたためであろう^{56, 57)}。小島らの解析によると、我が国における特発性 MCD の 5 年生存率は 91%、10 年生存率 80%であった¹⁴⁾。京都大学医学部附属病院での 21 例の解析では、診断から追跡期間中央値 98 か月間で、死亡例は 3 例、死因は二次性白血病、膵臓がん、および感染症であった¹²⁾。

(3)HHV-8 関連 MCD

HHV-8 関連 MCD は、主として HIV 感染者に見られる亜型であるが、ときに HIV 感染者以外にも見られる⁵⁸⁾。現在のところ、わが国では極めてまれと考えられる^{12, 14)}。この病型は、発熱、盗汗、全身倦怠感などの全身の炎症症状を呈して急速に進行し、しばしばカポジ肉腫や悪性リンパ腫を合併する⁵⁸⁾。

診断は、特徴的な病理組織所見と、血中または組織中における HHV-8 ウイルスゲノムの検出、あるいは HHV-8 の免疫組織染色検査によって行う⁵⁹⁾。リンパ節組織にはウイルス由来の IL-6 (vIL-6)も発現している⁵⁸⁾。

2 年を超える生存はまれとされていたが、最近、高用量の zidovudine (azidothymidine, AZT) + valganciclovir + rituximab の 3 剤、あるいは rituximab + liposomal doxorubicin + 抗 HIV 薬による非常に良好な治療成績が報

告されている^{60, 61)}。Rituximab 単独では、カポジ肉腫の悪化のために生存率が悪い⁶²⁾。寛解後の維持療法としては interferon あるいは高用量 AZT が用いられる。Rituximab + liposomal doxorubicin で治療を行った National Cancer Institute の Uldrick らの報告では、58 か月の追跡期間中央値で 3 年無増悪生存率が 69%、3 年全生存率が 81%であった⁶¹⁾。

補遺1 POEMS 症候群

POEMS 症候群は、1956 年に Crow らによって最初に報告された多発神経炎 (polyneuropathy)、臓器腫大 (organomegaly)、内分泌異常 (endocrinopathy)、M 蛋白 (M-protein)、皮膚症状 (skin changes) を特徴とする症候群である⁶³。本邦では 1968 年に深瀬らによって同様の症例が報告され⁶⁴、その後、高月らによって症例が集積・解析された⁶⁵。まれに、形質細胞型の特発性 MCD に POEMS 症候群を合併することがある⁶⁶。POEMS 症候群では表面の免疫グロブリンが IgG または IgA で 型のクローン性の形質細胞の増生が見られ、通常の特発性 MCD とは治療法や予後が異なる⁶⁷。

補遺2 特発性形質細胞性リンパ節症 (idiopathic plasmacytic lymphadenopathy, IPL)

1980 年に森らによって提唱された、多クローン性の高ガンマグロブリン血症とリンパ節内の形質細胞増生を特徴とする歴史的な疾患概念で、形質細胞型の特発性 MCD にほぼ一致する⁶⁸。小島らは本邦における特発性 MCD を IPL 型と非 IPL 型に分類し、IPL 型は男性優位で、形質細胞型の病理組織像をとり、IgG が 3500 mg/dL 以上の高値であるのに対し、非 IPL 型は女性優位で、病理組織は硝子血管型ないし混合型で、血清 IgG の上昇は軽度で、しばしば胸水や腹水、血小板減少、自己免疫疾患を伴うことを報告した¹⁴。

補遺3 TAFRO 症候群

高井らは、血小板減少、胸腹水貯留、発熱、骨髓線維化、肝脾腫を伴い重篤な経過をたどった 3 症例を報告し、これを TAFRO (thrombocytopenia, anasarca, fever, reticulin fibrosis, organomegaly) 症候群と命名した。このなかの 1 例では腫大したリンパ節の組織像が硝子血管型のキャスルマン病に類似していた⁶⁹。岩城らの 25 症例の検討によると、TAFRO 症候群の発症年齢中央値は 50 歳で、アルカリホスファターゼが高値で、IgG の増加が見られず、一部では進行性の腎障害がみられた。過半数はステロイド単独では軽快せずにシクロスポリンや tocilizumab、rituximab などの追加治療が行われていた。リンパ節は比較的小さく、その組織像には共通して胚中心の萎縮と濾胞間の拡大、および高内皮細静脈 (high epithelial venules) の増生がみられた⁷⁰。TAFRO 症候群は、非 IPL 型の特発性 MCD の亜型とも考えられるが胸腹水や浮腫が顕著にみられ、胸腹水中の IL-6 が異常高値を呈することから、漿膜炎を主体とした独立した疾患概念とする考えもある^{71, 72}。最近、正木らによって、本邦から診断基準案が提唱された⁷³。

著者の COI (conflicts of interest) 開示: 吉崎和幸; 特許使用料(中外製薬), 岡本真一郎; 寄付金(中外製薬), 川上純; 講演料(田辺三菱製薬、中外製薬、ファイザー、武田薬品工業、小野薬品工業、アッヴィ、アステラス製薬、MSD), 研究費・助成金(小野薬品工業, ヤンセンファーマ, 第一三共, ブリストル・マイヤーズスクイブ, アクテリオンファーマシューティカルズジャパン), 寄付金(武田薬品工業, アステラス製薬, アッヴィ, エーザイ, 小野薬品, 第一三共, 大塚製薬, 田辺三菱製薬, 中外製薬, 参天製薬, ブリストル・マイヤーズスクイブ, キッセイ薬品, アストラゼネカ, MSD), 正木康史; 講演料(中外製薬、協和発酵キリン、武田製薬), 寄付金(協和発酵キリン、中外製薬、塩野義製薬), 西本憲弘; 報酬(中外製薬), 特許使用料(中外製薬), 研究費・助成金(中外製薬)。

文献

- 1) Castleman B, Towne VW. CASE records of the Massachusetts General Hospital Weekly Clinicopathological Exercises: Case 40011. *N Engl J Med*. 1954; **250**: 26-30.
- 2) Castleman B, Iverson L, Menendez VP. Localized mediastinal lymphnode hyperplasia resembling thymoma. *Cancer*. 1956; **9**: 822-830.
- 3) Keller AR, Hochholzer L, Castleman B. Hyaline-vascular and plasma-cell types of giant lymph node hyperplasia of the mediastinum and other locations. *Cancer*. 1972; **29**: 670-683.
- 4) Bartoli E, Massarelli G, Soggia G, Tanda F. Multicentric giant lymph node hyperplasia. A hyperimmune syndrome with a rapidly progressive course. *Am J Clin Pathol*. 1980; **73**: 423-426.
- 5) Gaba AR, Stein RS, Sweet DL, Variakojis D. Multicentric giant lymph node hyperplasia. *Am J Clin Pathol*. 1978; **69**: 86-90.
- 6) Frizzera G, Banks PM, Massarelli G, Rosai J. A systemic lymphoproliferative disorder with morphologic features of Castleman's disease. Pathological findings in 15 patients. *Am J Surg Pathol*. 1983; **7**: 211-231.
- 7) Soulier J, Grollet L, Oksenhendler E, et al. Kaposi's sarcoma-associated herpesvirus-like DNA sequences in multicentric Castleman's disease. *Blood*. 1995; **86**: 1276-1280.
- 8) Cronin DM, Warnke RA. Castleman disease: an update on classification and the spectrum of associated lesions. *Adv Anat Pathol*. 2009; **16**: 236-246.
- 9) Ye B, Gao SG, Li W, et al. A retrospective study of unicentric and multicentric Castleman's disease: a report of 52 patients. *Med Oncol*. 2010; **27**: 1171-1178.
- 10) Talat N, Schulte KM. Castleman's disease: systematic analysis of 416 patients from the literature. *Oncologist*. 2011; **16**: 1316-1324.
- 11) Shin DY, Jeon YK, Hong YS, et al. Clinical dissection of multicentric Castleman disease. *Leuk Lymphoma*. 2011; **52**: 1517-1522.
- 12) Kawabata H, Kadowaki N, Nishikori M, et al. Clinical Features and Treatment of Multicentric Castleman's Disease : A Retrospective Study of 21 Japanese Patients at a Single Institute. *J Clin Exp Hematop*. 2013; **53**: 69-77.
- 13) Lowenthal DA, Filippa DA, Richardson ME, Bertoni M, Straus DJ. Generalized lymphadenopathy with morphologic features of Castleman's disease in an HIV-positive man. *Cancer*. 1987; **60**: 2454-2458.
- 14) Kojima M, Nakamura N, Tsukamoto N, et al. Clinical implications of idiopathic multicentric castleman disease among Japanese: a report of 28 cases. *Int J Surg Pathol*. 2008; **16**: 391-398.
- 15) 中外製薬：アクテムラ全例調査の中間報告（キャッスルマン病），
http://chugai-pharm.jp/hc/ss/pr/drug/act_via0400/report/scs/PDF/20140225_act_epmpv_safe_cd.pdf,

2014.

- 16) Robinson D, Jr., Reynolds M, Casper C, et al. Clinical epidemiology and treatment patterns of patients with multicentric Castleman disease: results from two US treatment centres. *Br J Haematol.* 2014; **165**: 39-48.
- 17) Munshi N, Mehra M, van de Velde H, Desai A, Potluri R, Vermeulen J. Use of a claims database to characterize and estimate the incidence rate for Castleman disease. *Leuk Lymphoma.* 2015; **56**: 1252-1260.
- 18) Yoshizaki K, Matsuda T, Nishimoto N, et al. Pathogenic significance of interleukin-6 (IL-6/BSF-2) in Castleman's disease. *Blood.* 1989; **74**: 1360-1367.
- 19) Katsume A, Saito H, Yamada Y, et al. Anti-interleukin 6 (IL-6) receptor antibody suppresses Castleman's disease like symptoms emerged in IL-6 transgenic mice. *Cytokine.* 2002; **20**: 304-311.
- 20) Nishimoto N, Kanakura Y, Aozasa K, et al. Humanized anti-interleukin-6 receptor antibody treatment of multicentric Castleman disease. *Blood.* 2005; **106**: 2627-2632.
- 21) Nishimoto N, Kishimoto T. Interleukin 6: from bench to bedside. *Nat Clin Pract Rheumatol.* 2006; **2**: 619-626.
- 22) Du MQ, Liu H, Diss TC, et al. Kaposi sarcoma-associated herpesvirus infects monotypic (IgM lambda) but polyclonal naive B cells in Castleman disease and associated lymphoproliferative disorders. *Blood.* 2001; **97**: 2130-2136.
- 23) Mori Y, Nishimoto N, Ohno M, et al. Human herpesvirus 8-encoded interleukin-6 homologue (viral IL-6) induces endogenous human IL-6 secretion. *J Med Virol.* 2000; **61**: 332-335.
- 24) Oksenhendler E, Carcelain G, Aoki Y, et al. High levels of human herpesvirus 8 viral load, human interleukin-6, interleukin-10, and C reactive protein correlate with exacerbation of multicentric castleman disease in HIV-infected patients. *Blood.* 2000; **96**: 2069-2073.
- 25) Fajgenbaum DC, van Rhee F, Nabel CS. HHV-8-negative, idiopathic multicentric Castleman disease: novel insights into biology, pathogenesis, and therapy. *Blood.* 2014; **123**: 2924-2933.
- 26) Cokelaere K, Debiec-Rychter M, De Wolf-Peeters C, Hagemeyer A, Scot R. Hyaline vascular Castleman's disease with HMGIC rearrangement in follicular dendritic cells: molecular evidence of mesenchymal tumorigenesis. *Am J Surg Pathol.* 2002; **26**: 662-669.
- 27) Chen WC, Jones D, Ho CL, et al. Cytogenetic anomalies in hyaline vascular Castleman disease: report of two cases with reappraisal of histogenesis. *Cancer Genet Cytogenet.* 2006; **164**: 110-117.
- 28) Reichard KK, Robinett S, Foucar MK. Clonal cytogenetic abnormalities in the plasma cell variant of Castleman disease. *Cancer Genet.* 2011; **204**: 323-327.
- 29) Katano H, Kaneko K, Shimizu S, Saito T, Irie T, Mori S. Follicular dendritic cell sarcoma complicated by hyaline-vascular type Castleman's disease in a schizophrenic patient. *Pathol Int.* 1997; **47**: 703-706.

- 30) Lee IJ, Kim SC, Kim HS, et al. Paraneoplastic pemphigus associated with follicular dendritic cell sarcoma arising from Castleman's tumor. *J Am Acad Dermatol.* 1999; **40**: 294-297.
- 31) Chan AC, Chan KW, Chan JK, Au WY, Ho WK, Ng WM. Development of follicular dendritic cell sarcoma in hyaline-vascular Castleman's disease of the nasopharynx: tracing its evolution by sequential biopsies. *Histopathology.* 2001; **38**: 510-518.
- 32) Marzano AV, Vezzoli P, Mariotti F, Boneschi V, Caputo R, Berti E. Paraneoplastic pemphigus associated with follicular dendritic cell sarcoma and Castleman disease. *Br J Dermatol.* 2005; **153**: 214-215.
- 33) Meijs M, Mekkes J, van Noesel C, et al. Paraneoplastic pemphigus associated with follicular dendritic cell sarcoma without Castleman's disease; treatment with rituximab. *Int J Dermatol.* 2008; **47**: 632-634.
- 34) Westphal FL, Lima LC, Santana LC, Netto JC, Amaral VC, Silva Mdos S. Castleman's disease associated with follicular dendritic cell sarcoma and myasthenia gravis. *J Bras Pneumol.* 2010; **36**: 819-823.
- 35) Cakir E, Aydin NE, Samdanci E, Karadag N, Sayin S, Kizilay A. Follicular dendritic cell sarcoma associated with hyaline-vascular Castleman's disease. *J Pak Med Assoc.* 2013; **63**: 393-395.
- 36) Hwang SO, Lee TH, Bae SH, et al. Transformation of Castleman's disease into follicular dendritic cell sarcoma, presenting as an asymptomatic intra-abdominal mass. *Korean J Gastroenterol.* 2013; **62**: 131-134.
- 37) Lee BE, Korst RJ, Taskin M. Right pneumonectomy for resection of a posterior mediastinal follicular dendritic cell sarcoma arising from Castleman's disease. *Ann Thorac Surg.* 2014; **97**: e101-103.
- 38) Stone K, Woods E, Szmania SM, et al. Interleukin-6 receptor polymorphism is prevalent in HIV-negative Castleman Disease and is associated with increased soluble interleukin-6 receptor levels. *PLoS One.* 2013; **8**: e54610.
- 39) Polizzotto MN, Millo C, Uldrick TS, et al. 18F-fluorodeoxyglucose Positron Emission Tomography in Kaposi Sarcoma Herpesvirus-Associated Multicentric Castleman Disease: Correlation With Activity, Severity, Inflammatory and Virologic Parameters. *J Infect Dis.* 2015; **212**: 1250-1260.
- 40) Dupin N, Diss TL, Kellam P, et al. HHV-8 is associated with a plasmablastic variant of Castleman disease that is linked to HHV-8-positive plasmablastic lymphoma. *Blood.* 2000; **95**: 1406-1412.
- 41) Chandrakasan S, Bakeer N, Mo JQ, Cost C, Quinn CT. Iron-refractory microcytic anemia as the presenting feature of unicentric Castleman disease in children. *J Pediatr.* 2014; **164**: 928-930.
- 42) Talat N, Belgaumkar AP, Schulte KM. Surgery in Castleman's disease: a systematic review of 404 published cases. *Ann Surg.* 2012; **255**: 677-684.
- 43) Kawabata H, Tomosugi N, Kanda J, Tanaka Y, Yoshizaki K, Uchiyama T. Anti-interleukin 6

receptor antibody tocilizumab reduces the level of serum hepcidin in patients with multicentric Castleman's disease. *Haematologica*. 2007; **92**: 857-858.

44) Song S, N., J., Tomosugi N, Kawabata H, Ishikawa T, Nishikawa T, Yoshizaki K. Downregulation of hepcidin resulting from long-term treatment with an anti-IL-6 receptor antibody (tocilizumab) improves anemia of inflammation in multicentric Castleman's disease (MCD) *Blood* 2010; **116**: 3627-3634.

45) Kojima M, Nakamura S, Morishita Y, et al. Reactive follicular hyperplasia in the lymph node lesions from systemic lupus erythematosus patients: a clinicopathological and immunohistological study of 21 cases. *Pathol Int*. 2000; **50**: 304-312.

46) Sato Y, Notohara K, Kojima M, Takata K, Masaki Y, Yoshino T. IgG4-related disease: historical overview and pathology of hematological disorders. *Pathol Int*. 2010; **60**: 247-258.

47) Dispenzieri A, Armitage JO, Loe MJ, et al. The clinical spectrum of Castleman's disease. *Am J Hematol*. 2012; **87**: 997-1002.

48) Nishimoto N, Sasai M, Shima Y, et al. Improvement in Castleman's disease by humanized anti-interleukin-6 receptor antibody therapy. *Blood*. 2000; **95**: 56-61.

49) Kanda J, Kawabata H, Yamaji Y, et al. Reversible cardiomyopathy associated with multicentric castleman disease: successful treatment with tocilizumab, an anti-interleukin 6 receptor antibody. *Int J Hematol*. 2007; **85**: 207-211.

50) Man L, Goudar RK. Reversal of cardiomyopathy with tocilizumab in a case of HIV-negative Castleman's disease. *Eur J Haematol*. 2013; **91**: 273-276.

51) Nishimoto N, Terao K, Mima T, Nakahara H, Takagi N, Takeuchi T. Mechanisms and pathologic significances in increase in serum interleukin-6 (IL-6) and soluble IL-6 receptor after administration of an anti-IL-6 receptor antibody, tocilizumab, in patients with rheumatoid arthritis and Castleman disease. *Blood*. 2008; **112**: 3959-3964.

52) van Rhee F, Wong RS, Munshi N, et al. Siltuximab for multicentric Castleman's disease: a randomised, double-blind, placebo-controlled trial. *Lancet Oncol*. 2014; **15**: 966-974.

53) Soumerai JD, Sohani AR, Abramson JS. Diagnosis and management of Castleman disease. *Cancer Control*. 2014; **21**: 266-278.

54) Seo S, Yoo C, Yoon DH, et al. Clinical features and outcomes in patients with human immunodeficiency virus-negative, multicentric Castleman's disease: a single medical center experience. *Blood Res*. 2014; **49**: 253-258.

55) Cervantes CE, Correa R. Castleman Disease: A Rare Condition with Endocrine Manifestations. *Cureus*. 2015; **7**: e380.

56) Frizzera G, Peterson BA, Bayrd ED, Goldman A. A systemic lymphoproliferative disorder with morphologic features of Castleman's disease: clinical findings and clinicopathologic correlations in 15

patients. *J Clin Oncol*. 1985; **3**: 1202-1216.

57) Weisenburger DD, Nathwani BN, Winberg CD, Rappaport H. Multicentric angiofollicular lymph node hyperplasia: a clinicopathologic study of 16 cases. *Hum Pathol*. 1985; **16**: 162-172.

58) Parravicini C, Corbellino M, Paulli M, et al. Expression of a virus-derived cytokine, KSHV vIL-6, in HIV-seronegative Castleman's disease. *Am J Pathol*. 1997; **151**: 1517-1522.

59) Hassman LM, Ellison TJ, Kedes DH. KSHV infects a subset of human tonsillar B cells, driving proliferation and plasmablast differentiation. *J Clin Invest*. 2011; **121**: 752-768.

60) Uldrick TS, Polizzotto MN, Yarchoan R. Recent advances in Kaposi sarcoma herpesvirus-associated multicentric Castleman disease. *Curr Opin Oncol*. 2012; **24**: 495-505.

61) Uldrick TS, Polizzotto MN, Aleman K, et al. Rituximab plus liposomal doxorubicin in HIV-infected patients with KSHV-associated multicentric Castleman disease. *Blood*. 2014; **124**: 3544-3552.

62) Bower M, Powles T, Williams S, et al. Brief communication: rituximab in HIV-associated multicentric Castleman disease. *Ann Intern Med*. 2007; **147**: 836-839.

63) Crow RS. Peripheral neuritis in myelomatosis. *Br Med J*. 1956; **2**: 802-804.

64) 深瀬政市, 新保慎一郎, 福増広幸, ほか. 多発性神経炎および内分泌異常を惹起した孤立性骨髄腫. *日本臨床*. 1968; **26**: 2440 - 2456.

65) Takatsuki K, Sanada I. Plasma cell dyscrasia with polyneuropathy and endocrine disorder: clinical and laboratory features of 109 reported cases. *Jpn J Clin Oncol*. 1983; **13**: 543-555.

66) Frizzera G. Castleman's disease and related disorders. *Semin Diagn Pathol*. 1988; **5**: 346-364.

67) Dispenzieri A. POEMS syndrome: 2014 update on diagnosis, risk-stratification, and management. *Am J Hematol*. 2014; **89**: 214-223.

68) 森茂郎, 毛利昇, 内田俊和, 徹郎 島. 著しい多クローン性高免疫グロブリン血症と全身リンパ節の形質細胞増生を呈する症候群. *日本網内系学会会誌*. 1980; **20**: 85-94.

69) 高井和江, 新國公司, 渋谷宏行, 橋立英樹. 発熱、胸腹水、肝脾腫を伴い、骨髄に軽度の線維化を認める血小板減少症. *臨床血液*. 2010; **51**: 320-325.

70) Iwaki N, Fajgenbaum DC, Nabel CS, et al. Clinicopathologic analysis of TAFRO syndrome demonstrates a distinct subtype of HHV-8-negative multicentric Castleman disease. *Am J Hematol*. 2016; **91**: 220-226.

71) Kojima M, Nakamura N, Tsukamoto N, et al. Multicentric Castleman's disease representing effusion at initial clinical presentation: clinicopathological study of seven cases. *Lupus*. 2011; **20**: 44-50.

72) Kawabata H, Takai K, Kojima M, et al. Castleman-Kojima Disease (TAFRO Syndrome) : A Novel Systemic Inflammatory Disease Characterized by a Constellation of Symptoms, Namely, Thrombocytopenia, Ascites (Anasarca), Microcytic Anemia, Myelofibrosis, Renal Dysfunction, and Organomegaly : A Status Report and Summary of Fukushima (6 June, 2012) and Nagoya Meetings (22

September, 2012). J Clin Exp Hematop. 2013; **53**: 57-61.

73) Masaki Y, Kawabata H, Takai K, et al. Proposed diagnostic criteria, disease severity classification and treatment strategy for TAFRO syndrome, 2015 version. Int J Hematol. 2016; **103**: 686-692.

74) 中塚伸一. Castleman 病. In 青笹克之, 森井英一, eds. 癌診療指針のための病理診断プラクティス .リンパ球増殖疾患. 中山書店; 2010: p.96-103.

Table 1. 多中心性キャスルマン病の臨床像

<p>多くの症例に共通してみられる症状</p> <p>発熱</p> <p>全身倦怠感</p> <p>易疲労感</p> <p>体重減少</p> <p>盗汗</p> <p>リンパ節腫脹</p> <p>肝脾腫</p>
<p>時に合併する症状</p> <p>皮疹(扁平ないし軽度隆起した褐色～暗赤色の皮疹、類天疱瘡、キサントーマ、血管腫)</p> <p>胸水、腹水、心嚢水、浮腫</p> <p>脳梗塞などの血栓症</p> <p>末梢神経障害</p> <p>間質性の肺病変</p> <p>肺高血圧症</p> <p>AA アミロイドーシス</p> <p>腎障害(蛋白尿、血清クレアチニン値上昇)</p> <p>拡張型心筋症</p> <p>自己免疫性の血小板減少症</p> <p>自己免疫性溶血性貧血</p> <p>内分泌異常(甲状腺機能低下症など)</p>
<p>主な検査値異常</p> <p>CRP 高値</p> <p>赤沈亢進</p> <p>小球性貧血</p> <p>血小板増多(ときに免疫学的機序による減少)</p> <p>血清LDH 低値</p> <p>血清アルカリホスファターゼ高値</p> <p>血清アルブミン低値</p> <p>多クローン性の高ガンマグロブリン血症</p>

血清 IgG 高値

血清 IgE 高値

抗核抗体陽性、クームス試験陽性などの免疫検査異常

血清 IL-6 高値

可溶性インターロイキン2受容体高値

血漿 VEGF 高値

Figure legends

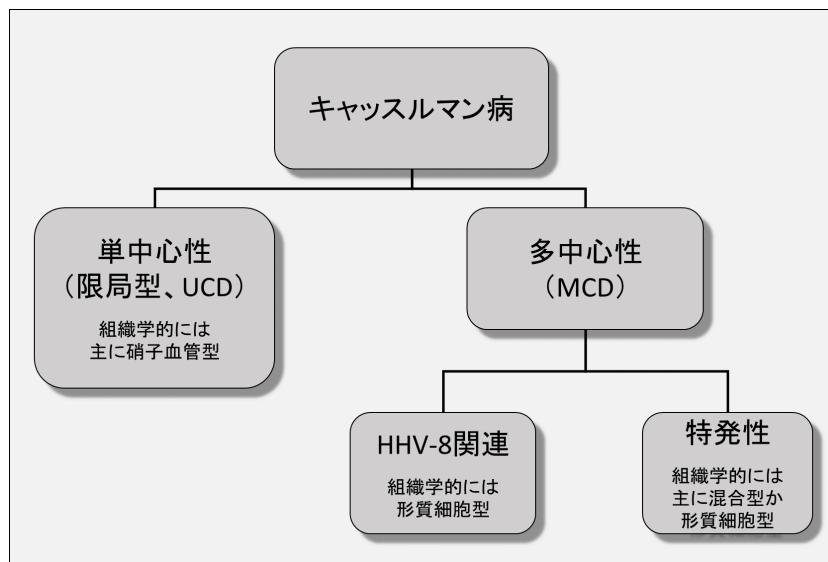


Fig. 1. キャッスルマン病の臨床的分類と組織学的な特徴。

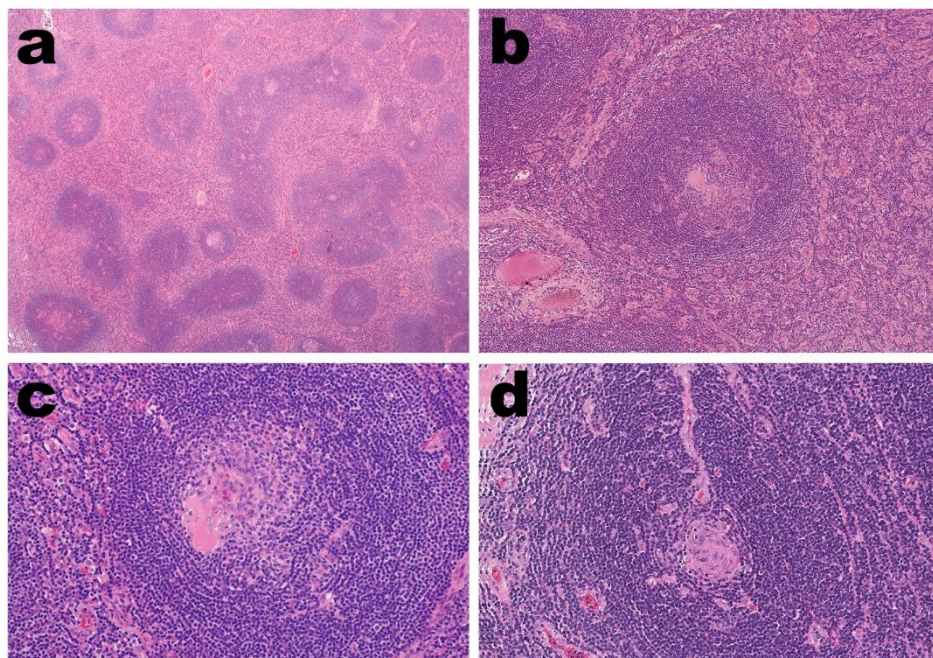


Fig. 2. 硝子血管型 (Hematoxylin-Eosin 染色)。(a; 弱拡大) リンパ節の基本構造は保たれており、リンパ濾胞の胚中心は萎縮的で、マントル層は肥厚する。(b; 中拡大) 萎縮した胚中心のリンパ球は減少し、壁の硝子化を伴った血管を伴う。(c, d; やや強拡大) マントル層のリンパ球は同心円状に配列する傾向を示す。萎縮した胚中心に向かって、血管の侵入像を認める。また、硝子化血管を認める。いずれも、胚中心内のリンパ球は減少している。(a, c, d は、「癌診療指針のための病理診断プラクティス・リンパ球増殖疾患」⁷⁴⁾より、出版社の許諾を得て転載)

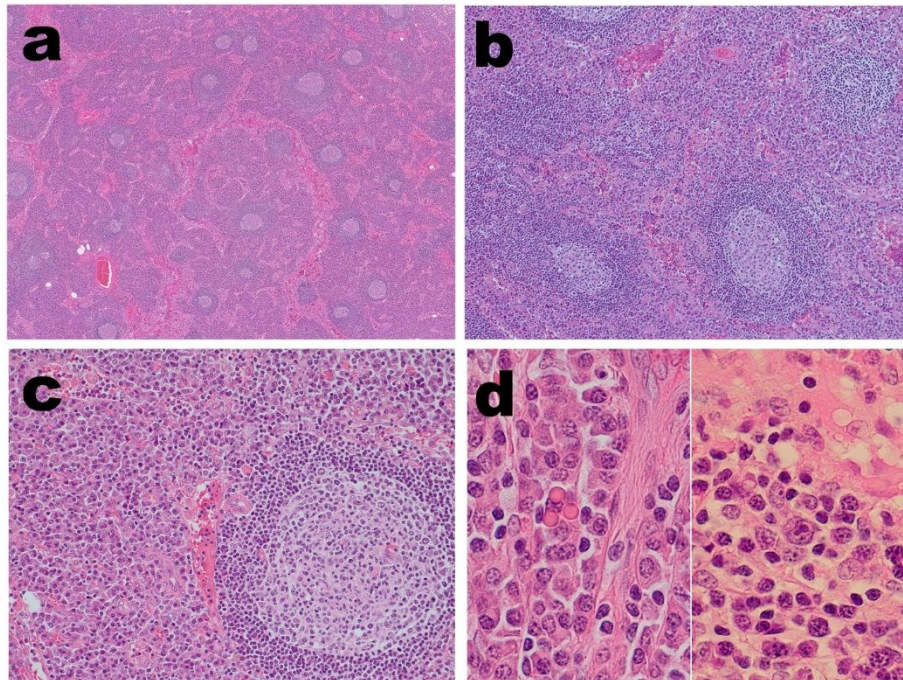


Fig. 3. 形質細胞型(Hematoxylin-Eosin染色)。(a; 弱拡大) リンパ節の基本構造は保たれており、リンパ濾胞、胚中心は正～過形成を示す。(b; 中拡大) 濾胞間領域には形質細胞のシート状の浸潤を認める。血管増生も比較的目立つ。(c; やや強拡大) 濾胞間領域に著明な形質細胞の浸潤を認める。胚中心の萎縮はなく、硝子化血管は認めない。(d; 強拡大) 左: 好酸性のRussell小体を細胞質に有する形質細胞。右: 核小体の明瞭な大型核を有する形質芽球。

資料 4. 国際キャスルマン病臨床ネットワーク (CDCN)

CDCN 会議より (2016 年 12 月 4 日)

CDCN Scientific Advisory Board Meeting

San Diego, CA
December 4, 2016

Agenda

- 10:30AM Welcome/new SAB and CDCN member introductions
- 4 Goals for 2016:
 - Continue to push forward International Research Agenda
 - Launch Registry
 - Launch Biobank
 - Finalize Diagnostic criteria
- Goals for 2017
- Tissue samples
- Closing business

Diagnostic criteria for iMCD – In Process

Major Criteria (need both):

1. Histopathological lymph node features consistent with the iMCD spectrum:
2. Enlarged lymph nodes (>1cm) in two or more lymph node stations

Minor Criteria (need ≥2 out of 11 criteria with ≥1 laboratory criteria):

Laboratory

1. Elevated CRP (greater than 10mg/L) or ESR (greater than 15mm/hr)
2. Anemia (Hgb less than 12.5g/dl for males, hemoglobin less than 11.5g/dl for females)
3. Thrombocytopenia (platelets <150k/uL) or thrombocytosis (platelets >400k/uL)
4. Hypoalbuminemia (albumin less than 3.5g/dL)
5. Renal dysfunction (eGFR <60 mL/min/1.73m²) or proteinuria (protein >150mg/100ml)
6. Polyclonal hypergammaglobulinemia (immunoglobulin G >1700mg/dL)

Clinical

1. Constitutional symptoms: sweats, fever (>38°C), weight loss, or fatigue
2. Large spleen and/or liver
3. Fluid accumulation: edema, anasarca, ascites, or pleural effusion
4. Eruptive cherry hemangiomas or violaceous papules
5. Lymphocytic interstitial pneumonitis

Pathology consistent with iMCD

Diagnoses to be excluded

- **Infections**
 - KSHV/HHV-8 (infection can be documented by blood PCR, diagnosis of KSHV-MCD requires IHC)
 - Clinical EBV-lymphoproliferative disorders such as infectious mononucleosis or Chronic Active EBV (Detectable EBV viral load not necessarily exclusion)
 - Inflammation and adenopathy due to other infections, e.g. acute or uncontrolled HIV (Controlled HIV not necessarily exclusion)
- **Autoimmune diseases**
 - Requires full clinical criteria, detection of autoimmune antibodies alone not exclusionary
 - Systemic lupus erythematosus, Rheumatoid arthritis, Adult Still's Disease, IgG4-related disease
- **Other lymphoproliferative disorders**
 - Lymphoma, autoimmune lymphoproliferative disorder
 - POEMS (polyneuropathy, organomegaly, endocrinopathy, monoclonal paraprotein, skin changes) considered associated

ACCELERATE: Global Patient Registry/ Natural History Study

- Finalized data elements, data flow, quality plan/SOPs, IRB approval
- Built IT system
- 10 EU sites moving forward, possibly expanding to Hong Kong, Taiwan, and Brazil
- We have enrolled 20 patients in the US and will soon have the 10 EU sites launched. We have begun collecting medical records and begun retrospective data entry shortly.
- Soon will have CAS do first quarterly review
- We will be contacting the physicians for each patient enrolled into the ACCELERATE registry via an email and/or letter to encourage them to complete surveys every 3 months.
- Please encourage patients to register: www.CDCN.org/ACCELERATE and fill out the survey every 3 months when you are sent reminder emails.

Discussion

- New ICD-10 code!
- How can we promote adoption of diagnostic criteria among the physician community?

ACCELERATE: Global Patient Registry/ Natural History Study

ACCELERATE Consent Progress

Month	Previous Mo. Cumulative Total	New Consents
August	0	4
September	4	0
October	12	4
November	16	14

**1,300 serum proteins X 400 sample study:
Still accepting iMCD (TAFRO) samples from collaborators**

<p>255 iMCD samples</p> <p>237 iMCD samples from siltuximab study - 79 patients - 3 time points each</p> <p>10 iMCD samples from UAMS - 10 patients</p> <p>8 samples from UPenn - 1 patient</p>	<p>20 HHV8+MCD samples</p>
<p>65 Age/gender-matched controls</p>	<p>20 Hodgkin lymphoma samples</p>
	<p>20 RA samples, 20 IgG4-RD Contributor to be confirmed</p>
	<p>20 HLH samples</p>

Discussion

- What other diseases should we gather as controls?
- How can we get more TAFRO samples and how many more should we aim to get?
- How to adjust for the variance in number of samples per patient? (e.g. some patients we have 3 timepoints, others we have 1 timepoint)

Treatments for iMCD

- Anti-IL-6**
 - Only FDA-approved treatment for iMCD; 34% response vs 0% placebo
- Rituximab**
 - Response is variable, but patients often relapse
- Cytotoxic chemotherapy (cytoxan, etoposide, etc)**
 - Good at inducing remission, but relapse is common
- Anti-IL-1**
 - Limited number of case reports
- Immunosuppressants**
 - Rapamycin and CyA being used in TAFRO-iMCD with success

**Rationale for using rapamycin + IVIg
in one highly treatment-refractory
iMCD-TAFRO patient**

**Accelerating Research & Treatment
for Castleman Disease**

Sponsored by:
Castleman Disease Collaborative Network (CDCN)
Janssen Pharmaceuticals



Kazuyuki Yoshizaki, MD, PhD

Professor, Department of Organic Fine Chemicals
The Institute of Scientific and Industrial Research
Osaka University

Hiroshi Kawabata, MD, PhD

Department Head of Department of Hematology and Immunology
Kanazawa Medical University



**Tentative Diagnostic Criteria and
Disease Severity Classification of
Castleman Disease in Japan**

Rinsho Ketsueki, in press.

presented by Hiroshi Kawabata, MD, PhD.

The Japanese Castleman Disease Research Group
(conducted by Prof. Kazuyuki Yoshizaki)

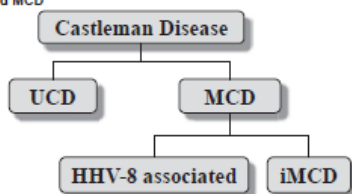
Essential Diagnostic Criteria for Castleman Disease (CD)
(both A and B must be met)

- A. Both of the following conditions should be met:**
1. Single or multiple **swollen lymph node/s** should be present.
 2. **Histopathological findings** of the affected lymph node(s) or organ(s) should be consistent with one of the following histological types of CD.
 - 1) Hyaline-vascular type
 - 2) Plasma cell type
 - 3) Mixed type
- B. The following diseases should be excluded as the cause of lymphadenopathy.**
1. Malignant neoplasms
 2. Infectious diseases
 3. Autoimmune diseases
 4. Other diseases manifesting symptoms similar to CD*
IgG4-related diseases, etc.
- *POEMS and TAFRO are not excluded from Castleman disease.

Clinical Classification of Castleman Disease

Unicentric Castleman disease (UCD)
Only a single lymph node is involved, or the distribution of affected lymph node(s) is restricted to a single site which is surgically resectable.

Multicentric Castleman disease (MCD)
Lymph nodes at multiple sites are affected.
Further classified as follows:
(1) HHV-8-associated MCD
(2) Idiopathic MCD



Classification of Disease Severities of iMCD

- Severe** : At least one of the following conditions persist for >1 month.
- (i) **Anemia** of inflammation: Hb <7.0 g/dL or RBC transfusion dependent.
 - (ii) **Thrombocytopenia**: Platelet counts <20,000/μL.
 - (iii) **Hypoalbuminemia**: Alb <1.5 g/dL.
 - (iv) **Renal dysfunction**: GFR <15 ml/min/1.73m² or nephrotic syndrome.
 - (v) **Pulmonary lesions** with always requiring oxygen inhalation.
 - (vi) **Anasarca**: Massive pleural effusion or ascites requiring drainage.
 - (vii) **Cardiac failure**: EF <40% or class IV in the NYHA classification.
- Moderate** : At least one of the following conditions persist for >1 month.
- (i) **Anemia** of inflammation: Hb <8.0.
 - (ii) **Thrombocytopenia**: Platelet counts <20,000/μL.
 - (iii) **Hypoalbuminemia**: Alb <2.0 g/dL.
 - (iv) **Renal dysfunction**: GFR <30 ml/min/1.73m² or Prot/Cr ratio >0.5 g/gCr.
 - (v) **Pulmonary lesions** with dyspnea on daily light exertion.
 - (vi) **Anasarca**: Pleural effusion or ascites.
 - (vii) **Cardiac failure**: EF <50% or class III in the NYHA classification.
 - (viii) Organ damages caused by histologically proven secondary **amyloidosis**.
- Mild** : Neither of the above conditions is met.

A proposal of CHAP score for objective evaluation of the disease activity and treatment efficacy in iMCD

(by H. Kawabata)

Score	1	2	3	4
CRP (mg/dL)	≥1, <5	≥5, <10	≥10, <20	≥20
Hemoglobin (g/dl)	<12, ≥10	<10, ≥8	<8	Transfusion dependent
Albumin (g/dL)	<3, ≥2.5	<2.5, ≥2	<2, ≥1.5	<1.5
P. S. (ECOG)	1	2	3	4

CHAP score = CRP score + Hb score + Albumin score + PS score

TAFRO syndrome and iMCD
—Toward a consensus in Japan—

Yasufumi Masaki*, Hiroshi Kawabata, and the Japanese Nation-wide Research Team on TAFRO Syndrome

*Department of Hematology and Immunology, Kanazawa Medical University, JAPAN
yasum@kanazawa-med.ac.jp

The CDCN's 6th annual "Accelerating Research & Treatment for Castleman disease" meeting on December 3rd, 2018 at the ASH conference in San Diego @ the Manchester Hyatt Grand Hotel

TAFRO syndrome

- Dr. Takai K, et al. reported 3 cases with thrombocytopenia, bone marrow fibrosis, fever, anasarca, and hepatosplenomegaly. (*Rinsho Ketsueki* 51:320-325, 2010.)
- Dr. Kojima M, et al. reported 7 cases with multicentric Castleman disease presenting effusion at initial clinical presentation. (*Lupus* 20:44-50,2011)

- T; Thrombocytopenia
- A; Anasarca (edema, pleural effusion and ascites)
- F; Fever
- R; Reticulin myelofibrosis
- O; Organomegaly (hepatosplenomegaly, lymphadenopathy)

Differences between TAFRO and non-TAFRO iMCD

	TAFRO syndrome	non-TAFRO iMCD
Concept/diagnosis	Clinical features	Pathological diagnosis
Clinical course	Acute or subacute	Chronic/indolent
Lymphadenopathy	Small or unclear	Large
Platelet	Decreased	Increased/decreased
Anasarca	Massive, definitely	Occasionally
γ-globulin	Normal	Marked increased
ALP, γGTP	Increased	Normal
FDP, D-dimer	Increased	Normal
Ferritin	Increased	Normal
Renal function	Impaired	Normal

Multicenter retrospective study in Japan, based on an on-line patient registry (UMIN000011809)

Purpose: To know the epidemiology, etiology, diagnosis and treatment strategy of TAFRO syndrome and iMCD in Japan.

Since launched in Sep, 2014, more than 200 cases of TAFRO syndrome, iMCD, and suspicious cases have been registered.

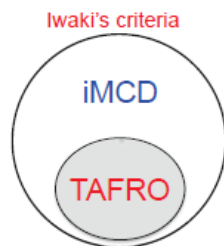
A criteria for TAFRO syndrome by Iwaki, et al.

Am J Hematol. 2016;91:220.

1. **Histopathological criteria;**
 - Compatible with pathological findings of lymph nodes as TAFRO-iMCD
 - Negative LANA-1 for HHV-8
2. **Major criteria;**
 - Presents 3 of 5 TAFRO symptoms
Thrombocytopenia, Anasarca, Fever, Reticulin fibrosis, Organomegaly.
 - Absence of hypergammaglobulinemia
 - Small volume lymphadenopathy
3. **Minor criteria need 1 or more;**
 - Hyper/normoplasia of megakaryocytes in bone marrow
 - High levels of serum ALP without markedly elevated serum transaminase

Requirements; fulfill histopathological criteria, all major criteria, and 1 or more of minor criteria.

Correlation between iMCD and TAFRO



Although histology is important, many cases with TAFRO syndrome have small or unclear lymphadenopathy, and have difficulty in biopsy because of anasarca and bleeding tendency. So, it is not easy to make diagnosis of TAFRO syndrome, while delayed diagnosis/treatment initiation may cause mortality.

Our diagnostic criteria for TAFRO syndrome

Int J Hematol. 2016;103:686-92.

All of the 3 major categories and at least 2 of 4 minor categories should be met.

A. Major categories

- 1) **Anasarca** (pleural effusion, ascites and general edema).
- 2) **Thrombocytopenia** (platelet count $\leq 100,000/\mu\text{l}$).
- 3) **Systemic inflammation** (BT $>37.5^\circ\text{C}$ and/or CRP $\geq 2\text{mg/dl}$).

B. Minor categories

- 1) Castleman disease-like features on **lymph node biopsy**.
- 2) Reticulin **myelofibrosis** and/or increased number of megakaryocytes in bone marrow.
- 3) Mild **organomegaly**, including hepatomegaly, splenomegaly and lymphadenopathy.
- 4) Progressive **renal insufficiency**.

Our diagnostic criteria for TAFRO syndrome

C. Diseases to be excluded

- 1) **Malignancies**, including lymphoma, myeloma, mesothelioma, *et cetera*.
- 2) **Autoimmune disorders**, including systemic lupus erythematosus (SLE), ANCA-associated vasculitis, *et cetera*.
- 3) **Infectious disorders**, including acid fast bacterial infection, rickettsial disease, lyme disease, severe fever with thrombocytopenia syndrome (SFTS), *et cetera*.
- 4) **POEMS syndrome**
- 5) **IgG4-related disease**
- 6) **Hepatic cirrhosis**
- 7) Thrombotic thrombocytopenic purpura (TTP)/ hemolytic uremic syndrome (HUS)

Correlation between iMCD and TAFRO



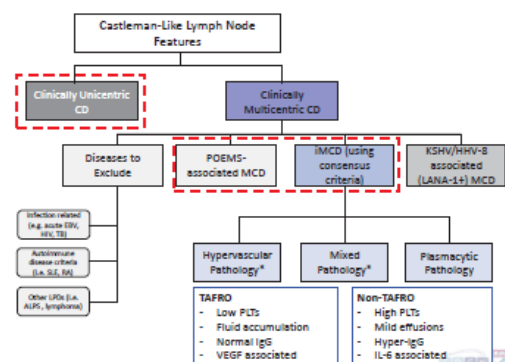
In our criteria, histology of lymph nodes is not necessary. Some of TAFRO patients do not fulfill the criteria of iMCD.

TAFRO SUMMARY

1. TAFRO syndrome was first described in 2010, and similar cases have since been reported.
2. We have been conducting a multicenter retrospective epidemiological study of TAFRO syndrome and iMCD in Japan.
3. Some clinical and pathological features of TAFRO syndrome overlap with those of iMCD, but unlike typical iMCD, its onset is acute or subacute, lymphadenopathy is small or unclear, serum γ -globulin level remains in the normal range, usually complicated by renal insufficiency, thrombocytopenia, and DIC, and progresses rapidly.
4. Based on these data and our experiences, we proposed a diagnostic criteria for TAFRO syndrome (*Int J Hematol.* 2016;103:686-92).

Agenda

- Overview of Meeting (Fajgenbaum)
- Castleman disease in Japan (Nishimoto)
- Review of clinical data for siltuximab (van Rhee)
- Diagnostic criteria update (Elenitoba-Johnson)
- Overview of 2016 Research Progress (Fajgenbaum)
- Overview of 2017 Research Plans and Collaboration Opportunities (Shilling)
- Small Group Discussion and Open Forum
- Call to Action



厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等政策研究事業）

キャスルマン病の疫学診療実態調査と患者団体支援体制の構築に関する調査研究班
分担研究報告書

診療体制の確立

研究分担者 矢野真吾 東京慈恵会医科大学医学部腫瘍・血液内科

共同研究者 吉崎和幸¹、岡本真一郎²、川端浩³、水木満佐央⁴、川上純⁵、正木康史⁶、井出眞⁷、宇野賀津子⁸、八木克巳⁸、小島俊行⁹、水谷実¹⁰、徳嶺進洋¹¹、西本憲弘¹²、藤原寛¹³、中塚伸一¹⁴、塩沢和子¹⁵、岩城憲子¹⁶

¹大阪大学産業科学研究所第3研究部門医薬品化学研究分野、²慶應義塾大学医学部血液内科、³京都大学医学部血液・腫瘍内科、⁴大阪大学医学部化学療法部、⁵長崎大学医学部病院第一内科、⁶金沢医科大学医学部血液・リウマチ膠原病科、⁷日本赤十字社高松赤十字病院血液内科、⁸ルイ・パストゥール医学研究センター基礎研究部、⁹日本赤十字社名古屋第一赤十字病院救急部、¹⁰三重厚生連松阪中央総合病院血液内科、¹¹市立伊丹病院 血液内科、¹²大阪リウマチ・膠原病クリニック、¹³宗教法人在日本南プレスビテリアン淀川キリスト病院呼吸器内科、¹⁴関西ろうさい病院病理診断科、¹⁵一般財団法人甲南会甲南加古川病院リウマチ膠原病センター、¹⁶金沢大学医薬保健研究域医学系細胞移植学

研究要旨 本研究はキャスルマン病患者さんが日本のどの地域にいても、適切な医療を受けられる診療体制を構築することを目標にしている。平成 27 年度は全国を 8 地域に分け、各地域にキャスルマン病診療推進拠点病院を定めた。平成 28 年度は診療推進拠点病院と連携をとりながらキャスルマン病の診療を行う地域連携施設を 113 施設選定した。

A. 研究目的

キャスルマン病は希少疾患のため、医師の知識不足により患者さんが正しく診断されないことや、適切な治療を受けられないことが、しばしば問題になる。この研究班の研究課題の一つは、キャスルマン病の患者さんが日本のどの地域にいても、適切な医療を受けられる診療体制を構築することである。全国を 8 地域に分け、その地域ごとの診療体制を整え吉崎班と密に連絡を取ることにより、キャスルマン病医療の均てん化を目指す。

B. 研究方法

平成 27 年度：全国を 8 地域に分けて、各地方にキャスルマン病の診療推進拠点病院を担う施設を選定する。診療推進拠点病院の選定は当研究代表者と相談し、全国から 11 施設を選び、当

研究班に所属していない施設には、直接連絡し承諾を得た。

平成 28 年度：日本血液学会の疾患登録、吉崎班や患者会のキャスルマン病診療に関する情報などから、診療推進拠点病院と連携を取りながらキャスルマン病の診療を行う地域連携施設の候補施設をリストアップした。全国から 236 施設がリストアップされ、それぞれの施設に対して、地域連携施設に関するアンケート調査を行った。

（倫理面への配慮）

患者さんに介入する研究ではないため、倫理面の問題は生じない。

C. 研究結果

平成27年度：全国から、北海道大学(血液内科)、東北大学(血液・免疫科)、慶應義塾大学(血液内科)、

東京慈恵会医科大学(腫瘍・血液内科)、金沢医科大学(血液・リウマチ膠原病科)、名古屋第一赤十字病院(血液内科)、京都大学(血液・腫瘍内科)、大阪大学(血液・腫瘍内科)、高松赤十字病院(血液内科)、岡山大学(血液・腫瘍内科)、長崎大学(第一内科)の11施設を診療推進拠点病院として選定し、診療推進拠点病院として役割を担うことの承諾を得た。

平成28年度：アンケート書を送った236施設のうち135施設(57%)から回答があり、113施設(48%)で地域連携施設としての役割を承諾していただいた。北海道地方 8施設、東北地方 3施設、関東地方 33施設、中部地方 21施設、近畿地方 28施設、中国地方 5施設、四国地方 5施設、九州地方 10施設であった。

D. 考察

吉崎班、診療推進拠点病院、地域連携施設が連携することにより、本邦におけるキャッスルマン病診療体制を構築することが可能となる。今後は吉崎班で作成したキャッスルマン病診療参照ガイドなどの研究成果を、診療推進拠点病院や地域連携施設と共有することにより、各地域の診療の質の向上に努めていく必要がある。また各地域ごとにキャッスルマン病の実態調査など、吉崎班で行う診療試験に対して、協力をしていただく予定にしている。

E. 結論

キャッスルマン病の診療体制を確立するため、全国から診療推進拠点病院を11施設選定した。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等政策研究事業）
 キャッスルマン病の疫学診療実態調査と患者団体支援体制の構築に関する調査研究班
 分担研究報告書

診断基準、臨床的病型分類、重症度分類、および、診療の参照ガイドの策定

研究分担者 川端浩 金沢医科大学血液免疫内科学

共同研究者 吉崎和幸¹、岡本真一郎²、水木満佐央³、川上純⁴、正木康史⁵、矢野真吾⁶、井出眞⁷、宇野賀津子⁸、八木克巳⁸、小島俊行⁹、水谷実¹⁰、徳嶺進洋¹¹、西本憲弘¹²、藤原寛¹³、中塚伸一¹⁴、塩沢和子¹⁵、岩城憲子¹⁶、古賀智裕⁴

¹大阪大学産業科学研究所第3研究部門医薬品化学研究分野、²慶應義塾大学医学部血液内科、³大阪大学医学部附属病院化学療法部、⁴長崎大学歯薬学総合研究科展開医療科学講座、⁵金沢医科大学血液免疫内科、⁶東京慈恵会医科大学腫瘍・血液内科、⁷日本赤十字社高松赤十字病院血液内科、⁸ルイ・パストゥール医学研究センター基礎研究部、⁹日本赤十字社名古屋第一赤十字病院救急部、¹⁰三重厚生連松阪中央総合病院血液内科、¹¹市立伊丹病院 血液内科、¹²大阪リウマチ・膠原病クリニック、¹³宗教法人在日本南プレスビテリミッション淀川キリスト病院呼吸器内科、¹⁴関西ろうさい病院病理診断科、¹⁵一般財団法人甲南会甲南加古川病院リウマチ膠原病センター、¹⁶金沢大学医薬保健研究域医学系細胞移植学

研究要旨 キャッスルマン病の診断基準、臨床的分類基準、および重症度分類は、当研究班の全国疫学調査や臨床研究を遂行するにあたって基本となる事項である。また、希少疾患であり認知度の低いキャッスルマン病を全国の医療関係者へ啓蒙するために、診療の参照ガイドの作成は急務である。本研究では、文献検索とキャッスルマン病の診療に詳しい医療者間での意見交換によって、わが国におけるキャッスルマン病の診断基準、臨床的病型分類、重症度分類、および、診療の参照ガイドの案の策定を行った。これらは、日本血液学会の学会誌上に公開された。今後、わが国におけるキャッスルマン病の臨床研究や診療に貢献するものと期待される。

A. 研究目的

当研究班は、キャッスルマン病の全国疫学調査、および同疾患の厚生労働省の指定難病への認定を目指して活動を行っている。これらを遂行するにあたって基本となる、診断基準、臨床的分類基準、及び重症度分類の策定を行う。また、診療の参照ガイドを策定し、これを学会誌や班のホームページ上で公開して、全国の医療関係者への啓発を行う。

に詳しい当研究班の研究分担者および研究協力者の間での意見交換を行い、わが国におけるキャッスルマン病の診断基準・臨床的病型分類・重症度分類の案を策定する。診療の参照ガイドについても同様の手続きによって策定する。なお、多中心性キャッスルマン病については、米国や欧州の医療関係者を中心とした Castleman Disease Collaborative Network (CDCN) による国際的な診断基準・重症度分類案などを参考に修正を行う。

B. 研究方法

国内外のキャッスルマン病に関する文献を参照するとともに、メーリングリストおよび当班の班会議の場を活用してキャッスルマン病の診療

(倫理面への配慮)

専門家の意見の収集と文献調査による研究であり、直接患者情報を取り扱わないので、個別の患者に対する倫理的な問題は生じ得ない。

C. 研究結果

キャッスルマン病の診断基準、臨床的病型分類、重症度分類案を作成した。概要は、診断のための必須基準として 腫大したリンパ節を認める、リンパ節または臓器の病理組織所見がキャッスルマン病の組織像に矛盾しない、の両者を満たすこととした。除外すべき疾患としては、悪性腫瘍、感染症、自己免疫疾患、その他の類似した症候を呈する疾患（IgG4関連疾患、組織球性壊死性リンパ節炎など）とした。POEMS症候群、TAFRO症候群は、本疾患に合併しうる疾患概念とした。臨床的病型分類としては、単中心性（限局型）特発性多中心性、HHV-8関連多中心性の3病型に分類した。重症度分類については、臓器障害の有無と程度により、軽症、中等症、重症に分類する案を策定した。これらは、2016年12月に米国 San Diegoで開かれたCDCN総会にて、わが国からの案として提示した。さらに、これらを盛り込んだ、キャッスルマン病診療の参照ガイド案を策定した。これは、医師、看護師、検査技師、薬剤師、放射線技師などの医療従事者を対象として、本疾患の診療において参考になる情報を記載している。内容は、序文、疾患概念と分類、疫学、病因論、診断、臨床的病型分類、重症度分類、病型別の臨床像・診断・治療・予後を網羅しており、日本血液学会の診療委員会の承認を経て、同学会の和文学会誌「血液内科」の2017年2月号に掲載された。

D. 考察

全国疫学調査など、本研究班の活動の基盤となる診断基準、臨床的病型分類、重症度分類、および、診療の参照ガイドを策定した。今後、研究班のホームページなどで公開して、全国の医療関係者や研究者からのご意見を募るとともに、本研究班が遂行する疫学研究、および国内外からの情報収集によって、改訂していく予定である。

E. 結論

本疾患の診断基準、臨床的病型分類、重症度分類、診療の参照ガイドが策定され、学会誌上に公開された。これらは、わが国におけるキャッスルマン病の臨床研究や診療に貢献するものと期待

される。

F. 健康危険情報
なし。

G. 研究発表

1. 論文発表

1) 川端浩: Castleman Disease; in 血液診療ハンドブック改訂3版(吉田弥太郎編). 大阪市, 医薬ジャーナル社, pp 463-475, 2015.

2) Hiramatsu S, Ohmura K, Tsuji H, Kawabata H, Kitano T, Sogabe A, Hashimoto M, Murakami K, Imura Y, Yukawa N, Yoshifuji H, Fujii T, Takaori-Kondo A, Mimori T: Successful treatment by rituximab in a patient with TAFRO syndrome with cardiomyopathy. Jpn J Clin Immunol 2016;39 (64-71).

3) 吉崎和幸, 岡本真一郎, 川端浩, 水木満佐央, 川上純, 正木康史, 矢野真吾, 井出眞, 宇野賀津子, 八木克巳, 小島俊行, 水谷実, 徳嶺進洋, 西本憲弘, 藤原寛, 中塚伸一, 塩沢和子, 岩城恵子, 古賀智裕: キャッスルマン病診療の参照ガイド. 臨床血液. 2017;58 (97-107).

4) 川端浩: Castleman 病; 岡明編 小児科診療増刊号 小児の症候群. 東京都, 診断と治療社, 2016, vol 79 suppl, pp 183.

2. 学会発表

1) 川端浩: 多中心性キャッスルマン病にみられる高ヘプシジン血症と炎症性貧血(シンポジウム講演). 第39回日本鉄バイオサイエンス学会学術集会, 岡山, 2015年8月30日,

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
なし。

2. 実用新案登録

なし。

3. その他

なし。

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等政策研究事業）
 キャスルマン病の疫学診療実態調査と患者団体支援体制の構築に関する調査研究班
 分担研究報告書

TAFRO 症候群の確立のための研究/多中心性 Castleman 病との異同について

研究分担者 正木康史¹、川端 浩¹、金沢医科大学医学部血液免疫内科
 共同研究者 中村栄男²、小島 勝³、青木定夫⁴、塚本憲史⁵、石垣靖人⁶、木下朝博⁷、
 黒瀬 望⁸、藤本信乃¹、井出 眞⁹、山本 洋¹⁰、ほか
²名古屋大学臓器病態診断学、³獨協医科大学病理学（形態）、⁴新潟薬科大学薬
 学部臨床薬学研究室、⁵群馬大学医学部附属病院腫瘍センター、
⁶金沢医科大学総合医学研究所/生命科学研究領域、⁷愛知県がんセンター中央病院血液・
 細胞療法部、⁸金沢医科大学臨床病理学、⁹高松赤十字病院血液内科、
¹⁰信州大学内科学第一講座（呼吸器内科）

研究要旨 TAFRO 症候群は、明らかな原因なしに急性あるいは亜急性に、発熱、全身性浮腫（胸水・腹水貯留）、血小板減少を来し、腎障害、貧血、臓器腫大（肝脾腫、リンパ節腫大）などを伴う全身炎症性疾患である。リンパ節生検の病理は Castleman 病様の像を呈し、臨床像も一部は特発性（HHV-8 陰性）多中心性 Castleman 病（iMCD）に類似するが本疾患特有の所見も多く、異同に関しては現時点で不明である。TAFRO 症候群診断基準の 2015 年度版を作成し、論文化した。また以前より「新規疾患；TAFRO 症候群の疾患概念確立のための多施設共同後方視的研究（UMIN000011809）」を行っており、今までに登録された症例から、TAFRO 症候群群と iMCD 群にて臨床所見の比較検討を行った。TAFRO 症候群は臨床像や病理組織像の一部が iMCD に類似するも、経過が急性～亜急性で、腫大するリンパ節も小さく、グロブリンも増加せず、腎機能障害、血小板減少（DIC 傾向）、肝胆道系酵素上昇などを伴い、異なった疾患単位である。本研究班と同時に採択された「厚生労働科学研究 難治性疾患政策研究事業；キャスルマン病の疫学診療実態調査と患者団体支援体制の構築に関する調査研究（H27-難治等(難)-一般-002）」研究班（研究代表者；吉崎和幸）とは、これまでも協力し議論しあい研究を行ってきた。今後、キャスルマン病班と TAFRO 症候群班の統合により両疾患を系統的に解析する事で、病因病態のより詳細な解析も可能となりえる。

A. 研究目的

TAFRO 症候群は、明らかな原因なしに急性あるいは亜急性に、発熱、全身性浮腫（胸水・腹水貯留）、血小板減少を来し、腎障害、貧血、臓器腫大（肝脾腫、リンパ節腫大）などを伴う全身炎症性疾患である。既知の単一疾患に該当せず、2010 年高井らにより Thrombocytopenia（血小板減少症）、Anasarca（全身浮腫、胸腹水）、Fever（発熱、全身炎症）、Reticulin fibrosis（骨髄の細網線維化、骨髄

巨核球増多）、Organomegaly（臓器腫大；肝脾腫、リンパ節腫大）より TAFRO 症候群（仮称）として報告され、その後に類似例の報告が相次いでいる。リンパ節生検の病理は Castleman 病様の像を呈し、臨床像も一部は特発性（HHV-8 陰性）多中心性 Castleman 病（iMCD）に重なるが、本疾患特有の所見も多く、異同に関しては現時点で不明である。TAFRO 症候群について診断基準をまず確立し、その後の研究へ発展させる必要がある。

B. 研究方法

本研究班において班会議およびその後のメール会議で議論の上で TAFRO 症候群診断基準、重症度分類、治療指針の 2015 年度版を作成し論文化した。また、以前より「新規疾患；TAFRO 症候群の疾患概念確立のための多施設共同後方視的研究 (UMIN000011809)」を行っており、今までに登録された症例から、TAFRO 症候群群と iMCD 群にて臨床所見の比較検討を行い、両疾患の臨床的異同につき検討した。さらに、全国の多施設より TAFRO 症候群あるいは多中心性 Castleman 病と診断された症例や疑い例、鑑別例につき臨床-病理中央診断会を開催し、臨床医と病理医のお互いの理解を深めた。

(倫理面への配慮)

UMIN000011809 研究は、介入を行わない後方視的な観察研究であり、「疫学研究に関する倫理指針」(文部科学省、厚生労働省 平成 14 年 6 月 17 日施行、平成 16 年 12 月 28 日改正、平成 17 年 6 月 29 日改正、平成 19 年 8 月 16 日改正、平成 20 年 12 月 1 日一部改正)を遵守する。診療録情報をもとにした後方視的な調査研究であり、カルテ ID も使用せず、施設毎の通し番号で情報を提出するため、個人情報の流出も起こらない。既に当院受診外の症例も多く、今から同意書を得る事も不可能である。今回の調査では、新規の症例を対象としない。試験情報は UMIN 登録し UMIN ホームページ上で公開される。個人情報、施設毎の通し番号で情報を提出する(匿名化)。

C. 研究結果

TAFRO 症候群の診断基準、重症度分類、治療指針の 2015 年度版を作成し論文化した (*Int J Hematol* 2016;103:686. , *臨床血液*57 ; 195 (2029) 2016)。

TAFRO 群と iMCD 群の比較において、PLT, IgG, Albumin は TAFRO 群で優位に低値、Hb, CRP, Creatinine, LDH, ALP, -GTP, T-bil, Ferritin, IgG, D dimer, FDP は TAFRO 群で優位に高値であった。

2016 年 7 月 16 日(土)の班会議後にキャスルマ

ン病・TAFRO 症候群・その他境界症例について、臨床-病理中央診断会を開催した。全 91 例の組織標本を、10 名の病理医ならびに 29 名の臨床医で中央診断を行った。多数例を一度に大勢で観察する事で、疾患の理解が進んだ

D. 考察

MCD の多くが慢性の経過をとるのに対して、TAFRO 症候群は急性あるいは亜急性の転帰をとる。TAFRO 症候群では、ステロイドや cyclosporin A などの免疫抑制剤、tocilizumab, rituximab などの有効例が報告されるも、様々な治療に抵抗性の症例も存在し、全身症状の悪化が急速なため、迅速かつ的確な診断と治療が必要な疾患である。TAFRO 症候群は臨床像や病理組織像の一部が iMCD に類似するも、経過が急性～亜急性で、腫大するリンパ節も小さく、グロブリンも増加せず、腎機能障害、血小板減少 (DIC 傾向) 肝胆道系酵素上昇などを伴い、異なった疾患単位である。今後、キャスルマン病班と TAFRO 症候群班の統合により両疾患を系統的に解析する事で、病因病態のより詳細な解析も可能となりえる。

E. 結論

TAFRO 症候群は現時点では MCD と一部が重なる疾患概念と認識され、今後の症例の蓄積および病因病態解析を進める事により、将来この両者の異同について明確となっていくであろう。

F. 健康危険情報

特になし。

G. 研究発表

1. 論文発表

1) Masaki Y, Kawabata H, Kurose N, Ide M, et al. (他 25 名、筆頭、2 番目、7 番目、8 番目) Proposed diagnostic criteria, disease severity classification and treatment strategy for TAFRO syndrome, 2015 version. *Int J Hematol*. 2016 Jun;103(6):686-92. doi: 10.1007/s12185-016-1979-1. Epub 2016 Mar

- 18.
- 2) 正木康史、川端 浩、黒瀬 望、ほか (他 8 名、筆頭、2 番目、7 番目)平成 27 年度厚生労働科学研究費補助金 (難治性疾患政策研究事業) 新規疾患 ; TAFRO 症候群の確立のための研究班. 新規疾患 ; TAFRO 症候群の診断基準・重症度分類・治療指針. 臨床血液. 第 78 回日本血液学会学術集会「教育講演」号. 臨床血液 57 ; 195-203 (2029-2037) 2016
- 3) 吉崎和幸、川端 浩、正木康史、ほか. (他 16 名、3 番目、6 番目) 厚生労働科学研究費補助金 (難治性疾患等政策研究事業) キャスルマン病の疫学診療実態調査と患者団体支援体制の構築に関する調査研究班. キャスルマン病診療の参照ガイド. 臨床血液 58(2) :97-107, 2017
- 4) 正木康史、藤本信乃. TAFRO 症候群. 臨床免疫・アレルギー科 65(6) :604-607, 2016
- 5) 正木康史、藤本信乃、川端 浩. TAFRO 症候群の診断と治療. EMB 血液疾患の治療 2017-2018 金倉讓・木崎昌弘・鈴木律朗・神田善伸編.(中外医学社) 2016 年 10 月 15 日発行 p385-390
- 6) 正木康史. 新たな指定難病としての IgG4 関連疾患. 臨床免疫・アレルギー科 65(1) :28-34, 2016
- 7) 正木康史. (特集 ; IgG4 関連疾患の病因・病態を考える) IgG4 関連リンパ節炎から 分子リウマチ治療 9(1) :17-20, 2016
- 8) 正木康史. IgG4 関連疾患の管理と治療における国際コンセンサス -日本人臨床医にも妥当で有用か? - リウマチ科 55(2) :221-226, 2016
- 9) 正木康史. II 章 薬物療法の実践. B. リンパ腫. 33. 免疫不全に続発するリンパ増殖性疾患 p278-282. 白血病・リンパ腫薬物療法ハンドブック松村到編集. 2016 年 6 月 25 日発行 (南江堂)
- 10) Fujita Y, Masaki Y, et al. Isolation of vascular smooth muscle antigen-reactive CD4(+) Th1 clones that induce pulmonary vasculitis in MRL/Mp-Fas(+/+) mice. Cell Immunol. 2016 May;303:50-4. doi: 10.1016/j.cellimm.2016.03.004. Epub 2016 Mar 21. (他 14 名、12 番目)
- 11) 正木康史. 不明熱の理解のために知っておくべきエビデンスとアート. 不明熱の原因疾患 pick up. 血管内リンパ腫. Modern Practice 33(7) :1105-1107, 2016
- 12) 正木康史. IgG4 関連疾患の治療の最前線- 日米における診断と治療の違いを中心に. 医学のあゆみ 258(3) 217-222, 2016
- 13) 正木康史、黒瀬 望. IgG4 関連疾患と間違っ てはいけない疾患. 肝胆膵 73(4) :585-590, 2016
- 14) 正木康史、川端 浩、ほか. (他 6 名、筆頭、7 番目) IgG4 関連疾患の診断と治療. 金沢医科大学 雑誌
- 15) 正木康史、ほか. (他 4 名、筆頭) シェーグレン症候群とリンパ増殖性疾患. リウマチ科 56(5) :452-457, 2016.
- 16) Masaki Y, Kurose N, et al. (他 33 名、筆頭、31 番目) A multicenter phase II prospective clinical trial of glucocorticoid for patients with untreated IgG4-related disease. Mod Rheumatol. 2016 Dec 15:1-6.
- 17) 正木康史. IgG4 関連疾患をどのように治療しているか. アレルギーの臨床 36(13) : (1255)41- (1258)44, 2016
- 18) 正木康史、川端 浩、ほか. (他 6 名、筆頭、7 番目) IgG4 関連疾患の診断と治療. 金医大誌 41:67-72, 2016
- 19) 正木康史. 白血病やリンパ腫の治療緊急性. Medical Practice 34(2);335, 2017

- 20) 正木康史. 血管内リンパ腫. 血液疾患最新の治療2017-2019, pp177-179. 小澤敬也、中尾眞二、松村 到編 (南江堂) 2017年2月25日発行
- 21) Satoh-Nakamura T, Masaki Y. (他 10 名、最終) CD14⁺ follicular dendritic cells in lymphoid follicles may play a role in the pathogenesis of IgG4-related disease. Biomedical Res (Tokyo) 36(2) 143-153,2015
- 22) Khosroshahi A, Masaki Y. (他 40 名、20 番目) International consensus guidance statement on the treatment of IgG4-related disease. Arthritis Rheum67(7):1688-99. 2015
- 23) Nakajima A, Masaki Y. (他 30 名、2 番目) Decreased expression of innate immunity-related genes in peripheral blood mononuclear cells from patients with IgG4-related disease. PLoS One. 14;10(5): e0126582. doi:10.1371/journal.pone.0126582. eCollection,2015.
- 24) Sakai T, Masaki Y. (他 17 名、2 番目) Prospective clinical study of R-CMD therapy for indolent B-cell lymphoma and mantle cell lymphoma from the Hokuriku Hematology Oncology Study Group. Medical Oncol 32:232. DOI 10.1007/s12032-015-0677-9,2015
- 25) Yoshida H, Masaki Y. (他8名、9番目) A case of probable IgG4-related disease involving the unilateral trigeminal nerve of the cheek region. Oral Radiol 31:193-198,2015
- 26) 正木康史. (他10名、筆頭) IgG4関連疾患の診断と治療～IgG4関連皮膚病変も含めて～. 日本皮膚アレルギー接触性皮膚炎学会雑誌 Vol.9 No.4(Serial No.42):212-217,2015
- 27) 正木康史. (他1名、筆頭) III 治療の実際 1.病型別治療方針 -標準的治療, 研究的治療 L. 治療上特別な配慮を要する疾患 8)中枢神経系のリンパ腫 pp201-203. 悪性リンパ腫治療マニュアル.改訂第4版. 飛内賢正、木下朝博、塚崎邦彦編 (南江堂) 2015年9月30日発行
- 28) 正木康史. II. 臓器別病変の診断と治療 11.リンパ節病変 治療と予後 pp143-145. 臨床医必読最新 IgG4関連疾患. 岡崎和一、川 茂幸編集主幹 (診断と治療社) 2015年10月9日発行
- 29) 正木康史. 4章.疾患の理解と治療/リンパ腫. 医原性免疫不全状態に伴うリンパ増殖性疾患. pp434-438. 最新ガイドライン準拠 血液疾患診断・治療指針. 金倉 讓編集 (中山書店) 2015年10月30日発行
- 30) 正木康史. (他4名、筆頭) X.節外リンパ腫の臓器別特徴と治療. 唾液腺リンパ腫. pp627-631. 日本臨床 73巻増刊号8 リンパ腫学 -最新の研究動向- (日本臨床社) 2015年10月20日発行
- 31) 正木康史. (他4名、筆頭) XI.特論. TAFRO症候群.pp674-678. 日本臨床 73巻増刊号8 リンパ腫学 -最新の研究動向- (日本臨床社) 2015年10月20日発行
- 32) 正木康史. IgG4関連疾患の鑑別診断.Modern Physician 11 特集 全身疾患としてのIgG4関連疾患 2015 Vol.35 No.11 p1312-1317 (新興医学出版社)
- 33) 正木康史. Question ; 不明熱と皮膚生検から考えられる疾患は何か (p30) Answer ; 不明熱と皮膚生検から考えられる疾患は何か (p97-98) ; 血管内大細胞型B細胞リンパ腫 「一発診断! 一目瞭然! 目で診る症例から瞬時に診断!」一般社団法人 日本内科学会専門医部会編 2015年4月10日 一般社団法人日本内科学会発行 (ヤマノ印刷株式会社)

- 34) 北川 泉、正木康史. 「特集 関節が痛いんです！-コモンからレアものまでの診断と治療」
関節痛・関節炎へのアプローチ 病因で診る関節痛・関節炎. 総合診療 25(4):330-332, 2015
- 35) 正木康史. 新たな指定難病としてのIgG4関連疾患. 臨床免疫・アレルギー科65(1):28-34, 2016
- 36) 正木康史. (特集; IgG4 関連疾患の病因・病態を考える) IgG4 関連リンパ節炎から 分子リウマチ治療 9(1):17-20, 2016

2. 学会発表

- 1) Masaki Y. Retrospective analysis of patients with a novel Japanese variant of multicentric Castleman disease associated with anasarca and thrombocytopenia; TAFRO syndrome. 第 59 回日本リウマチ学会総会・学術集会. 名古屋. 2015 年 4 月 25 日
- 2) Masaki Y. A multicenter phase II prospective clinical trial of glucocorticoid treatment for patients with untreated IgG4-related disease. 13th Internatinal Sjögren's syndrome symposium. Bergen, Norway. 2015 年 5 月 21 日
- 3) 正木康史. IgG4 関連疾患の診断と治療. 北陸皮膚免疫セミナー. 金沢. 2015 年 6 月 27 日
- 4) 正木康史. IgG4 関連疾患に対する第 II 相多施設共同前方視的治療研究. 第 55 回日本リンパ網内系学会総会. 岡山. 2015 年 7 月 11 日
- 5) 正木康史. 21 世紀に本邦より発信された疾患概念; IgG4 関連疾患と TAFRO 症候群. Meet the Expert in Hematology. 横浜. 2015 年 7 月 18 日
- 6) 正木康史. IgG4 関連疾患に対する前方視的多施設共同治療研究. 日本シェーグレン症候群学会. 岡山. 2015 年 9 月 19 日
- 7) 正木康史. IgG4 関連疾患の診断と治療. 日本内科学会信越支部 第 53 回信越支部生涯教育講演会. 新潟. 2015 年 10 月 11 日
- 8) 正木康史. IgG4 関連疾患の診断と治療

- ～シェーグレン症候群との違いを中心に～. 平成 27 年度 東海・北陸地区リウマチ教育研修会. 福井. 2015 年 11 月 11 日
- 9) 正木康史. IgG4 関連疾患; 21 世紀に入り本邦より発信された新たな疾患概念. 第 70 回 岐阜呼吸器疾患研究会 岐阜. 2015 年 11 月 7 日(土)
- 10) 正木康史. 悪性リンパ腫の治療. 北國健康生きがい支援事業. 平成 27 年度・第 2 回金沢医科大学プログラム がんプロ、がん拠点病院運営委員会共催 テーマ: がん治療の進歩と患者・家族のサポートを知ろう. 金沢. 2016 年 1 月 17 日(日)
- 11) 正木康史. 悪性リンパ腫の治療. 市民公開講座「血液の病気と共に生きていくために」主催; のと血液疾患地域包括ケア研究会. 能登. 2016 年 2 月 14 日(日)
- 12) 正木康史. IgG4 関連疾患の診断と治療. 第 5 回兵庫・大阪シェーグレンフォーラム. 大阪. 2016 年 3 月 12 日(土)
- 13) 正木康史. IgG4 関連疾患に対する前方視的多施設共同治療研究～病理中央診断後の解析～ 第 60 回 日本リウマチ学会総会・学術集会 Workshop 49 「IgG4 関連疾患 3」
- 14) 正木康史. 特別講演 新規疾患: TAFRO 症候群の診断基準と治療指針の作成. 第 31 回悪性リンパ腫治療研究会. 富山. 2016 年 4 月 23 日
- 15) 正木康史. 集中治療管理が必要となりそうな血免の病気 ～血管内リンパ腫、IgG4 関連疾患、TAFRO 症候群～. 第 21 回 金沢医科大学麻酔科同門会. 金沢. 2016 年 5 月 21 日(土)
- 16) 正木康史. 血液の病気～貧血の話～. 平成 28 年度 シェーグレンの会 中部ブロックミニ集会.(金沢) 2016 年 7 月 9 日(土)
- 17) 正木康史. TAFRO 症候群の診断基準・診療ガイドラインの作成. 第 56 回日本リンパ網内系学会総会. 熊本. 2016 年 9 月 3 日(土)
- 18) 正木康史. イブニングセミナー講演「指定難病としての SS&IgG4～患者さんとともに～」第 25

回日本シェーグレン症候群学会．東京．2016年9月9日（金）

19) 正木康史 .21世紀に本邦より発信された疾患；IgG4関連疾患とTAFRO症候群．札幌シェーグレン勉強会．札幌．2016年9月16日（金）

20) 正木康史 .21世紀に本邦より発信された疾患概念；IgG4関連疾患とTAFRO症候群．第12回日本橋血液交流会 NEXT（Nihonbashi Exchange Meeting on Hematology T）東京．2016年9月29日（木）

21) 正木康史．教育講演「新たな疾患概念－TAFRO症候群－」第78回日本血液学会学術集会．横浜．2016年10月14日（金）

22) 正木康史．ベーチェット病の病態と治療について．ベーチェット病の講演会と療養相談会．富山．2016年10月29日

23) 正木康史．世界の診断基準とスタンダード治療 第31回日本臨床リウマチ学会 特別企画「IgG4関連疾患の世界トップレベル」．東京．2016年10月30日（日）

24) 正木康史．キャッスルマン病とTAFRO症候群の診断と治療．北日本血液研究会学術集会．札幌．2016年11月25日（金）

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

1. 特許取得

1) 正木康史(他3名、2番目)．IgG4関連疾患診断用マーカー及びその利用（特許第5704684号「出願番号 特願2010-194326」）・平成27年3月6日「出願年月日 平成22年8月31日」

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

平成 27・28 年度厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等政策研究事業）
 キャッスルマン病の疫学診療実態調査と患者団体支援体制の構築に関する調査研究班
 分担研究報告書

国際キャッスルマン病臨床ネットワーク(CDCN)との Collaboration について

研究分担者 井出 眞 高松赤十字病院 血液内科

共同研究者 吉崎和幸*、岩城恵子**、水谷実***、徳嶺進洋****、塩沢和子*****、藤原寛*****、西本
 憲弘*****

*大阪大学産業科学研究所

**富山赤十字病院 血液内科

***三重厚生連 松阪中央総合病院 血液内科

****市立伊丹病院 血液内科

*****甲南加古川病院 リウマチ膠原病センター

*****淀川キリスト病院 呼吸器内科

*****大阪リウマチ・膠原病クリニック

研究要旨 国際キャッスルマン病研究団体である CDCN(Castleman Disease Collaborative Network)と協同し、診断基準の策定に参加した。具体的には International Castleman Disease Diagnostic Criteria Meeting において CDCN の診断基準の議論に参加し、成果を論文として発表した。

A. 研究目的

唯一の国際キャッスルマン病研究団体である CDCN(Castleman Disease Collaborative Network)と協同し、診断基準および調査方法を厚生省研究班の作業と擦り合わせ、相互に矛盾なく統一されたものとする。

また CDCN で進められている、Castleman 病についてのデータ収集、サンプル解析について日本がどう関わっていくかを調整していく。

B. 研究方法

2015 年に病理および臨床の診断基準の策定を試みた International Castleman Disease Diagnostic Criteria Meeting (2015 年 11 月 20-21 日) が、ペンシルバニア大学医学部で開催された。吉崎 和幸、井出 眞の両名はこれに参加し日本の診断基準や分類法などについて説明した。または 2015 年 12 月 5 日の 4th Annual

“Accelerating Research & Treatments for Castleman Disease” Working Dinner at ASH (Orlando America)に参加し引き続き診断基準を検討し、その後の論文化に参加した。

吉崎 和幸、井出 眞、川端 浩、矢野 真吾、西本 憲弘は 2016 年 12 月 3 日の 5th Annual “Accelerating Research & Treatments for Castleman Disease” Working Dinner at ASH (San Diego America)に参加し講演を行い CDCN メンバーと意見交換をした。また、吉崎 和幸、井出 眞 の両名は CDCN Scientific Advisory Board meeting at ASH(2016 年 12 月 4 日)に参加し次年度以後の研究計画についての議論に参加した。特に CDCN で進めている Castleman 病患者の臨床データ収集、及び血液などのサンプル収集

及び解析についての議論に参加した。

(倫理面への配慮)

現時点では疾患定義などの調整であり倫理面での問題はない。今後データやサンプル提供などで必要な場合には平成 26 年 12 月 12 日 文部科学省・厚生労働省発行の「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」に従う。

C. 研究結果

International Castleman Disease Diagnostic Criteria Meeting において日本の Castleman Disease の現状について説明し診断基準の策定に関与した。

この結果は吉崎 和幸、井出 眞の両名が共著者となって論文としてまとめられ“International, evidence-based consensus diagnostic criteria for HHV-8-negative/idiopathic multicentric Castleman disease”の題名で Blood:2017:129(12)1646-1757 に掲載された。

5th Annual “Accelerating Research & Treatments for Castleman Disease” Working Dinner at ASH での講演で日本の現状について説明し、特に日本で策定された Castleman 病及び TAFRO 症候群の診断基準について説明し、両疾患の異同等についてさらに考察を進める事となった。CDCN で進めている世界的な Castleman 病のデータ収集及びサンプル解析について日本がどう関わっていくかの結論は、倫理面への配慮が必要であり今回の会合では得られなかった。

D. 考察

International Castleman Disease Diagnostic Criteria Meeting において議論された診断基準は、最終的にアメリカ血液学会誌に “International, evidence-based consensus diagnostic criteria for HHV-8-negative/idiopathic multicentric Castleman disease”の題名で掲載された。

同時期に日本語で作成された診断基準も臨床血液 2 月号に「キャッスルマン病診療の参照ガイ

ド」として掲載されている。これは、キャッスルマン病全体の診断基準であり、HHV-8 陰性の idiopathic multicentric Castleman disease を対象とした CDCN の診断基準とはやや異なったものとなっている。日本側の診断基準としては、ほぼ組織所見のみの診断となったが CDCN はこれに検査データ異常を加味し症候群的な捉え方となっている。また類縁疾患の TAFRO 症候群については両基準とも関連が決定できておらず、これらの点は今後の議論を要する。

F. 健康危険情報

特になし

G. 研究発表

1. 論文発表

International, evidence-based consensus diagnostic criteria for HHV-8-negative/idiopathic multicentric Castleman disease Blood:2017:129(12)1646-1757

2. 学会発表

2016 年 12 月 3 日 5th Annual “Accelerating Research & Treatments for Castleman Disease” Working Dinner at ASH(San Diego America)において以下の発表を行った

Epidemiological research on the MCD therapy in Japan and establishment of patient organization

Kazuyuki Yoshizawa

Castleman disease in Japan

Norihiro Nishimoto

Tentative Diagnostic Criteria and Disease Severity Classification of Castleman Disease in Japan

Hiroshi Kawabata

TAFRO syndrome and iMCD —Toward a consensus in Japan —

Yasufumi Masaki*, Hiroshi Kawabata, and the Japanese Nation-wide Research Team on TAFRO Syndrome

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

特になし

1. 特許取得

特になし

2. 実用新案登録

特になし
3. その他
特になし

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等政策研究事業）
 キャッスルマン病の疫学診療実態調査と患者団体支援体制の構築に関する調査研究班
 分担研究報告書

診断基準、臨床的病型分類、重症度分類に向けての研究

研究分担者 川上 純 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科先進予防医学共同専攻
 リウマチ・膠原病内科学

共同研究者 古賀智裕^{1,2}、藤本信乃³、川端 浩³、正木康史³、吉崎和幸⁴、岡本真一郎⁵、水木満佐央⁶、矢野真吾⁷、井出眞⁸、宇野賀津子⁹、八木克巳⁹、小島俊行¹⁰、水谷実¹¹、徳嶺進洋¹²、西本憲弘¹³、藤原寛¹⁴、中塚伸一¹⁵、塩沢和子¹⁶、岩城恵子¹⁷

¹長崎大学大学院医歯薬学総合研究科先進予防医学共同専攻リウマチ・膠原病内科学、²長崎大学大学院医歯薬学総合研究科分子標的医学研究センター、³金沢医科大学血液免疫内科、⁴大阪大学産業科学研究所第3研究部門医薬品化学研究分野、⁵慶應義塾大学医学部血液内科、⁶大阪大学医学部附属病院化学療法部、⁷東京慈恵会医科大学腫瘍・血液内科、⁸日本赤十字社高松赤十字病院血液内科、⁹ルイ・パストゥール医学研究センター基礎研究部、¹⁰日本赤十字社名古屋第一赤十字病院救急部、¹¹三重厚生連松阪中央総合病院血液内科、¹²市立伊丹病院血液内科、¹³大阪リウマチ・膠原病クリニック、¹⁴宗教法人在日本南プレスビテリミッション淀川キリスト病院呼吸器内科、¹⁵関西ろうさい病院病理診断科、¹⁶一般財団法人甲南会甲南加古川病院リウマチ膠原病センター、¹⁷金沢大学医薬保健研究域医学系細胞移植学

研究要旨 キャッスルマン病の診断基準、臨床的病型分類、重症度分類の策定は、本疾患の啓蒙や均質な医療の提供に必須であり、それには本疾患を診療する医師の多くが所属する日本血液学会と日本リウマチ学会との連携が必須である。また、キャッスルマン病を識別し重症度を反映するバイオマーカーの特定は、本疾患に対する適正な医療の推進にはきわめて重要である。今年度はこれらを目標に、臨床血液に掲載されたキャッスルマン病診療の参照ガイド[臨床血液. 2017;58 (97-107)]をベースとして、“TAFRO 症候群の確立のための研究班(研究代表者正木康史)”の協力から得られたキャッスルマン病の診療情報を追加し、日本リウマチ学会の学会誌である「Mod Rheumatol」への投稿とキャッスルマン病の血液バイオマーカー解析を進めた。

A. 研究目的

キャッスルマン病の診断基準、臨床的病型分類、重症度分類の策定は、本疾患の啓蒙や均質な医療の提供に必須である。本研究班の川端 浩が中心となり、「キャッスルマン病診療の参照ガイド」が作成され、日本血液学会の学会誌である「臨床血液」へ掲載された。それを受けての日本リウマチ学会の学会誌である「Mod Rheumatol」への投稿とキャッスルマン病のバイオマーカー解析を、研究

の目的とした。

B. 研究方法

「Mod Rheumatol」への投稿に関しては「キャッスルマン病診療の参照ガイド」の英文化を基本に、“TAFRO 症候群の確立のための研究班(研究代表者正木康史)”の協力を得、TAFRO 班で集積された“特発性多中心性キャッスルマン病”149 例でその内容を検証した。バイオマーカーに関しては、

種々のアレイキットを検証し、適するキットを用いた血清バイオマーカーの解析を試みた。

(倫理面への配慮)

上記の研究は長崎大学病院および当該施設の臨床研究倫理委員会の承認および文書での研究への同意を得ている。

C. 研究結果

「臨床血液」に掲載された「キャスルマン病診療の参照ガイド」では、診断基準、臨床的病型分類、重症度分類が述べられており、「Mod Rheumatol」への投稿に関しては、「臨床血液」編集委員会の了承を得、これらのTablesを英文化した。また、TAFRO班での集積症例を用いて、これらの基準・分類を検証した成果を付け加え、「Mod Rheumatol」への投稿版を完成させた。バイオマーカーに関しては、既存のキットで最も多くの血清タンパク質を一度に解析できる(507種類)RayBio Antibody Array(L-507)を用いて、トシリズマブ治療前後血清での発現変動を解析中で、複数のタンパク質の発現変動を認めている。

D. 考察

「Mod Rheumatol」への投稿準備は終了し、平成29年4-5月には確実に投稿できる。バイオマーカー検索に関してはRayBio Antibody Array(L-507)の有用性が示唆され、これを用いての数例の解析でターゲットを絞り、その後はELISAなどでキャスルマン病の診断基準、臨床的病型分類、重症度分類に寄与するバイオマーカーを特定する。

E. 結論

TAFRO班での集積症例を用いてキャスルマン病の診断基準、臨床的病型分類、重症度分類を検証し、Mod Rheumatolに投稿し、日本リウマチ学会会員への啓蒙を図る。バイオマーカーはL-507での特定とELISAなどでの評価の過程を経て、平成29年度以降には研究班で集積された検体で検証する予定である。

F. 健康危険情報

なし。

G. 研究発表

1. 論文発表

- 1) Fukui S, Iwamoto N, Shimizu T, Umeda M, Nishino A, Koga T, Kawashiri SY, Ichinose K, Hirai Y, Tamai M, Nakamura H, Aramaki T, Iwanaga N, Izumi Y, Origuchi T, Migita K, Ueki Y, Sato S, **Kawakami A**. Fewer subsequent relapses and lower levels of IL-17 in Takayasu arteritis developed after the age of 40. *Arthritis Research & Therapy*. 2016 Dec 13;18(1):293.
- 2) Koga T, Migita K, Sato S, Umeda M, Nonaka F, Kawashiri SY, Iwamoto N, Ichinose K, Tamai M, Nakamura H, Origuchi T, Ueki Y, Masumoto J, Agematsu K, Yachie A, Yoshiura K, Eguchi K, **Kawakami A**. Multiple Serum Cytokine Profiling to Identify Combinational Diagnostic Biomarkers in Attacks of Familial Mediterranean Fever. *Medicine*. 2016 Apr;95(16): e3449.
- 3) Ohyama K, Baba M, Tamai M, Yamamoto M, Ichinose K, Kishikawa N, Takahashi H, **Kawakami A**, Kuroda N. Immune complexome analysis of antigens in circulating immune complexes isolated from patients with IgG4-related dacryoadenitis and/or sialadenitis. *Mod Rheumatol*. 2016 Mar;26(2):248-50.
- 4) Ichinose K, Arima K, Umeda M, Fukui S, Nishino A, Nakashima Y, Suzuki T, Horai Y, Koga T, Kawashiri SY, Iwamoto N, Fujikawa K, Aramaki T, Tamai M, Nakamura H, Sato S, Origuchi T, **Kawakami A**. Predictors of clinical outcomes in patients with neuropsychiatric systemic lupus erythematosus. *Cytokine* 79: 31-37, 2015.
- 5) Suzuki T, Iwamoto N, Yamasaki S, Nishino A, Nakashima Y, Horai Y, Kawashiri SY, Ichinose K, Arima K, Tamai M, Nakamura H, Origuchi T, Miyamoto C, Osaki M, Ohyama K, Kuroda N, **Kawakami A**. Upregulation of Thrombospondin

1 Expression in Synovial Tissues and Plasma of Rheumatoid Arthritis: Role of Transforming Growth Factor- β 1 toward Fibroblast-like Synovial Cells. *J Rheumatol* 42 (6): 943-947, 2015.

- 6) Nakamura H, Takahashi Y, Yamamoto-Fukuda T, Horai Y, Nakashima Y, Arima K, Nakamura T, Koji T, **Kawakami A**. Direct infection of primary salivary gland epithelial cells by human T lymphotropic virus type I in patients with Sjögren's syndrome. *Arthritis Rheumatol* 67 (4): 1096-1106, 2015.

2. 学会発表

- 1) 古賀智裕, 右田清志, 佐藤俊太郎, 上松一永, 谷内江昭宏, 梅田雅孝, 野中文陽, 中村英樹, 植木幸孝, **川上 純**. 血清サイトカインアレイを用いた家族性地中海熱における発作期の炎症サイトカインネットワークの解析. 第 113 回日本内科学会総会・講演会, 東京都, 4/15-17, 2016.
- 2) 古賀智裕, 右田清志, 吉浦孝一郎, 佐藤俊太郎, 上松一永, 谷内江昭宏, 増本純也, 植木幸孝, 江口勝美, **川上 純**. 家族性地中海熱: 疾患遺伝子・サイトカイン/ケモカイン・シグナル伝達からの新知見. 第 60 回日本リウマチ学会総会・学術総会, 横浜市, 4/21-23, 2016.
- 3) Nishino A, Kawashiri S, **Kawakami A**, Yoshitama T, Eiraku N, Matsuoka N, Ueki Y, Okada A, Hamada T, Fujikawa K, Arinobu Y. Ultrasound evaluation of efficacy of biologic and targeted synthetic DMARDs toward rheumatoid arthritis patients: Kyushu multicenter rheumatoid arthritis ultrasound prospective observational cohort in Japan. 第 60 回日本リウマチ学会総会・学術総会, 横浜市, 4/21-23, 2016.
- 4) Koga T, Migita K, Sato S, Umeda M, Fukui S, Nishino A, Kawashiri S, Iwamoto N, Ichinose K, Tamai M, Nakamura H, Origuchi T, Ueki Y, Agematsu K, Eguchi K, **Kawakami A**. Multiple Serum Cytokine Profiling to Identify Specific Molecular Networks in Attacks of Familial Mediterranean fever. ACR 2015 - 米国リウマチ学会議, San Francisco USA, 11/6-11, 2015.
- 5) Ushigusa T, Ichinose K, Tshuji S, Umeda M, Fukui S, Nishino A, Nakashima Y, Suzuki T, Horai Y, Koga T, Kawashiri S-Y, Iwamoto N, Hirai Y, Tamai M, Nakamura H, Origuchi T, **Kawakami A**. Evaluation of soluble a-klotho in neuropsychiatric systemic lupus erythematosus. Annual European Congress of Rheumatology 2015, Rome, Italy, 6/10-13, 2015.
- 6) 中村英樹, 高橋良子, 福田智美, 寶來吉朗, 中島好一, 有馬和彦, 小路武彦, **川上 純**. シェーグレン症候群唾液腺上皮細胞への HTLV-1 直接感染と関連分子の発現について. 第 59 回日本リウマチ学会総会・学術集会, 名古屋, 4/23-25, 2015.

H. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

1. 特許取得
なし。

2. 実用新案登録
なし。

3. その他
なし。

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等政策研究事業）
 キャスルマン病の疫学診療実態調査と患者団体支援体制の構築に関する調査研究班
 分担研究報告書

**リウマチと多中心型キャスルマン病の
 サイトカイン・ケモカイン動態と疾患特性**

研究分担者 宇野賀津子*、八木克己*（公財）ルイ・パストゥール医学研究センター

共同研究者 谷川美紀*、吉崎和幸#

*（公財）ルイ・パストゥール医学研究センター、#大阪大学・産業科学研究所

研究要旨 リウマチ(RA)とキャスルマン病(MCD)は病因、病態の異なる疾患であるが、共に血清中に高レベルの IL-6 が存在し、トシリズマブ治療が有効である点で共通点がある。そこで両疾患患者の治療前の血中サイトカイン・ケモカイン動態を Bio-Plex Human Cytokine Grpl Panel、Bio-plex Human Inflammation Panel 1 で測定し、キャスルマン病と強く関連するサイトカイン・ケモカインの検討を行った。RA では多くのサイトカイン・ケモカインが上昇しているが、MCD 患者ではやや限定的で、共通して高い項目と RA でのみ高い項目が認められた。

A. 研究目的

リウマチ(RA)とキャスルマン病(MCD)は病因、病態の異なる疾患であるが、共に血清中に高レベルの IL-6 が存在し、トシリズマブ治療が有効であるという点で共通点がある。今回、両疾患患者の血中サイトカイン・ケモカイン動態を測定し、それぞれの疾患に特異的なバイオマーカーの選択および、病態と強く関連するサイトカイン・ケモカインの検討を行った。

B. 研究方法

リウマチ(RA)とキャスルマン病(MCD)患者のトシリズマブ治療前(RA : n=48, MCD:n=14)と治療前後(RA : n=48, MCD:n=4)の血清中サイトカイン・ケモカインを測定した。

測定項目は Bio-PlexGroup I 27-plex Panel:IL-1 β , IL-1ra, IL-2, IL-4, IL-5, IL-6, IL-7, IL-8, IL-9, IL-10, IL-12p70, IL-13, IL-15, IL-17, TNF- α , Eotaxin, FGFbasic, G-CSF, GM-CSF, IFN- γ , IP-10, MCP-1, MIP-1 α , MIP-1 β , PDGF-bb, RANTES, VEGF および Bio-Plex Inflammation Panel: APRL, BAFF, CD30,

CD163, sgp130, IFN- α 2, IFN- β , IL-11, IL-12p40, IL-19, IL-20, IL-22, IL-26, IL-27(p28), IL-28A, IL-29, IL-32, LIGH, MMP-1, MMP-2, MMP-3, Osteocalcin, Osteopontin, Pentraxin-3, sIL-6R, sTNF-R1, sTNF-R2, TSLP, TWEAK を測定し、治療前のそれぞれの血中サイトカイン・ケモカイン等の疾患の特徴について、比較検討した。また一部の検体では治療前後の変化についても検討した。

C. 研究結果

1. 治療前のサイトカイン/ケモカイン動態

両疾患の治療前後でサイトカイン・ケモカインを測定したところ、MCD 患者では IL-2, IL-6, IL-8, Eotaxin, GM-CSF, MIP-1 α , MIP-1 β , VEGF, BAFF, CD163, Chitinase-3, IFN- α 2, IL-19, IL-20, IL-22, IL-35, MMP-1, MMP-3, Osteocalcin, Osteopontin, Pentraxin-3, TSLP, TWEAK が健常人比べて上昇していた。RA 患者では健常人に比較して IL-1 β , ILRa, IL-2, IL-4, IL-6, IL-8, IL-9, IL-10, IL-12p70, IL-13, IL-17, Eotaxin, FGF,

GM-CSF, IFN- γ , MCP-1, TNF- α , BAFF, CD30, CD163, Chitinase-1, IFN- α 2, IL-19, IL-20, IL-22, IL-35, MMP-3, Osteocalcin, Osteopontin, Pentraxin-3, TSLP が高かった。特に、IL-8, MIP-1 β , Chitinase-3, IFN- α 2, IL-19, IL-20, IL-22, IL-35, Osteopontin, TWEAK では、MCD 患者は RA 患者に比べても高い傾向が認められた。一方、RA 患者で高い IL-4, IL-10, IL-13, IFN- γ , FGF, G-CSF, TNF- α は MCD 患者では健常人レベルで有り、両疾患で明らかにサイトカイン・ケモカイン動態は異なっていた。

2. トシリズマブ治療前後のサイトカイン/ケモカイン動態

RA 患者ではトシリズマブ治療 16 週後には治療前に比べて DAS28-CRP が低下し、多くの上昇していたサイトカイン・ケモカインは低下していた。

一方、MCD 患者ではトシリズマブ治療により患者の病状は改善したが、治療数ヶ月後の IL-6, IP-10, MIP-1b, IL-28A, MMP-2, sIL-6R, sgp130 値は治療前よりも上昇していた。治療前の値より全員が低下していたのは今回調べた患者では Osteopontin のみであった。

これらの結果は、RA では IL-6 のブロックが間接的に関係のサイトカインの産生を低下させ、病状を改善させたと推察された。一方、MCD 患者では、サイトカイン値の改善は認められなくとも病状が改善したのは、IL-6 が直接病態に関係している、そのブロックが病態改善に繋がったとも考える事が出来、両疾患の病因が異なる可能性が示唆された。

D. 考察

RA 患者と MCD 患者では、血中のサイトカイン・ケモカイン動態は共通して高い項目と、RA では高

いが MCD 患者ではあまり高くない項目があり、両疾患のパターンは異なっている。今回測定した検体は全てトシリズマブ治療前であるが、併用薬の影響については検討が不十分である。さらに詳細な治療背景と併せた解析を加えることにより、両疾患のサイトカイン・ケモカイン動態の解析は、疾患特性および原因の解析に繋がる事が期待される。併せて、RA あるいは MCD 内での違いも明らかに出来る可能性があると期待される。

E. 結論

併せて、RA あるいは MCD 内での違いも明らかに出来る可能性があると期待される。MCD および RA 患者の治療前の Bio-Plex Human Cytokine Grpl Panel 及び Inflammation Panel 1 によるサイトカイン・ケモカイン等の測定は、疾患特性や患者特性を解析するのに有用であり、疾患を特徴づけるバイオマーカー探索に有用である。

F. 健康危険情報

特になし

G. 研究発表

1. 論文・書籍発表

- 1) Ikezoe K, Handa T, Tanizawa K, Kubo T, Oguma T, Hamada S, Watanabe K, Aihara K, Sokai A, Nakatsuka Y, Muro S, Nagai S, Uno K, Chin K, Fukui M, Hirai T, Mishima M. Bone mineral density in patients with idiopathic pulmonary fibrosis. *Respir Med.* 2015 Sep;109(9):1181-7. doi: 10.1016/j.rmed.2015.06.014. Epub 2015 Jul 6. PMID: 26174191
- 2) Sokai A, Handa T, Tanizawa K, Oga T, Uno K, Tsuruyama T, Kubo T, Ikezoe K, Nakatsuka Y, Tanimura K, Muro S, Hirai T, Nagai S, Chin K, Mishima M. Matrix metalloproteinase-10: a novel

- biomarker for idiopathic pulmonary fibrosis. *Respir Res.* 2015 Sep 29;16:120. doi: 10.1186/s12931-015-0280-9. PMID: 26415518
- 3) Sato K, Yamamoto H, Nomura T, Matsumoto I, Miyasaka T, Zong T, Kanno E, Uno K, Ishii K, Kawakami K. *Cryptococcus neoformans* Infection in Mice Lacking Type I Interferon Signaling Leads to Increased Fungal Clearance and IL-4-Dependent Mucin Production in the Lungs. *PLoS One.* 2015 Sep 18;10(9):e0138291. doi: 10.1371/journal.pone.0138291. eCollection 2015. PMID: 26384031
 - 4) Uno K, Yoshizaki K, Iwahashi M, Yamana J, Yamana S, Tanigawa M, Yagi K. Pretreatment Prediction of Individual Rheumatoid Arthritis Patients' Response to Anti-Cytokine Therapy Using Serum Cytokine/Chemokine/ Soluble Receptor Biomarkers. *PLoS One.* 2015 Jul 15;10(7):e0132055. doi:10.1371/journal.pone.0132055. eCollection 2015.
 - 5) 宇野賀津子 分担執筆 「放射線必須データ 32 被ばく影響の根拠」田中、角山、中島、坂東編 創元社 2016年3月刊
 - 6) 宇野賀津子 低線量放射線の影響:福島から何を学ぶ*ADC Letter for Infectious Disease Control* 27 Volume 3 (2), July 2016
 - 7) 吉崎和幸, 宇野賀津子, 八木克巳他 治療前血清バイオマーカー測定による間接リウマチに対する分子標的治療の効果予測～個別化医療の幕開け～*炎症と免疫*2016 vol24 No.5 62-69
- ## 2. 学会発表
- 1) 宇野賀津子, 角山雄一, 鳥居寛之, 谷都美子, 成井香苗, 坂東昌子 福島原発事故、放射能汚染不安を超えて: カギは食育にあり. 第 15 回日本抗加齢医学会, 福岡, 5.29-31, 2015.
 - 2) 宇野賀津子, 岩橋充啓, 八木克巳, 吉崎和幸 多項目サイトカイン・ケモカイン・可溶性受容体測定によるリウマチ抗体療法選択のバイオマーカーの探索 第 80 回日本インターフェロン・サイトカイン学会, 東京, 7.17-18, 2015
 - 3) Kazuko Uno, Kazuyuki Yoshizaki, Mitsuhiro Iwahashi, Miki Tanigawa, Katsumi Yagi Pretreatment Prediction of Individual Rheumatoid Arthritis Patients' Response to Anti-Cytokine Therapy Using Serum Cytokine/Chemokine/Soluble Receptor Biomarkers Third Annual Meeting of the International Cytokine and Interferon Society. Bamberg, 10.11-14, 2015
 - 4) Kazuko Uno, Kazuyuki Yoshizaki Is it possible to predict rheumatoid arthritis patients' response to anti-cytokine therapy using serum cytokine/chemokine/soluble receptor biomarkers before they are treated? 第 44 回日本免疫学会、札幌 11.18-20, 2015
 - 5) Kazuyuki Yoshizaki, Kazuko Uno Opposite role of soluble forms of IL-6 receptor system, sIL-6R and sgp130, on the regulation of inflammatory status in rheumatoid arthritis 第 44 回日本免疫学会、札幌 11.18-20, 2015
 - 6) 宇野賀津子, 嶋田裕記, 坪倉正治, 尾崎章彦, 及川友好 他 福島県南相馬・相馬地域仮設住宅の健康に関する仮設懇談会と検診の取り組み: IFN- 産生能検査から見えて来たもの 第 81 回日本インターフェロン・サイトカイン学会学術集会 発表 長崎 5.13, 14, 2016
 - 7) 宇野賀津子, 嶋田裕記, 坪倉正治, 尾崎章彦, 及川友好 他 福島県南相馬・相馬地域仮設住宅の健康に関する仮設懇談会と検診の取り組み: IFN- 産生能検査から見えて来たもの 第 16 回日本抗加齢医学会総会発表 横浜 6.9-11, 2016
 - 8) 宇野賀津子 低線量放射線の生体影響と食

- の重要性～福島から何を学ぶ～ 「日本エネルギー環境教育学会第 11 回全国大会」シンポジウム講演 北海道 8.9,10,2016
- 9) 宇野賀津子 「ふくしまから見る”性・家族”-災害が引き起こしたオトコとオンナの実態-」世界性の健康デー記念イベント 2016 性と神話-解き放つー シンポジウム講演 京都教育文化センター9.4,2016
- 10) 宇野賀津子「低線量放射線の様々な影響」低線量放射線とその影響に関するシンポジウム 核融合研究所 シンポジウム講演 9.20,2016
- 11) 宇野賀津子、嶋田裕記、坪倉正治、尾崎章彦、及川友好 他 USING IFN PRODUCTION TESTS, CLINICAL AND PSYCHOLOGICAL INDICATORS TO PROVIDE INDIVIDUALIZED SUPPORT FOR EVACUEES LIVING IN TEMPORARY HOUSING IN MINAMI-SOMA AND SOMA CITY (FUKUSHIMA) Cytokines 2016 (4th ANNUAL MEETING OF THE INTERNATIONAL CYTOKINE AND INTERFERON SOCIETY) 発表 サンフランシスコ 10.16-20,2016
- 12) 宇野賀津子、嶋田裕記、坪倉正治、尾崎章彦、藤宮仁、及川友好 他 多項目ビーズアレイ結果の非負値行列因子分解による解析の試み 第 22 回 MPO 研究会発表 京都 12.2-3,2016
- 13) 宇野賀津子 USING IFN PRODUCTION TESTS, CLINICAL AND PSYCHOLOGICAL INDICATORS TO LIVING IN TEMPORARY HOUSING IN MINAMI-SOMA CITY (FUKUSHIMA) 第 45 回免疫学会総会 発表 沖縄コンベンションセンター PROVIDE INDIVIDUALIZED SUPPORT FOR EVACUEES 12.5-7,2016
- H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）
1. 特許取得
国際特許 発明人 宇野賀津子、吉崎和幸、八木克己 他 国際特許（PCT 出願）発明の名称：「生物学的製剤による関節リウマチの治療効果を予測判定する方法」出願番号・出願日：PCT/JP2014/082061（平成 26 年 12 月 4 日）
2. 実用新案登録
なし

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等政策研究事業）
 キャスルマン病の疫学診療実態調査と患者団体支援体制の構築に関する調査研究班
 分担研究報告書

Multicentric Castleman 病に対する tocilizumab 治療後に IgG4 関連疾患を 発症した一例

研究分担者 大阪大学医学部附属病院 血液・腫瘍内科 水木満佐央

共同研究者 植田康敬¹、萩原圭祐²、木田亨¹、松井崇浩¹、森井英一³、熊ノ郷淳²、前田哲生¹、金倉
 譲¹ 1. 大阪大学医学系研究科 血液・腫瘍内科、2. 同呼吸器・免疫アレルギー内科、3. 同病態病理学
 講座

研究要旨 IgG4 関連疾患と multicentric Castleman 病は、いずれも原因不明の炎症性疾患である
 が、両者の病態は異なり、治療についても、前者は副腎皮質ステロイドホルモン治療が有効であるこ
 とに対して、後者は IL-6 作用の阻害薬である抗 IL-6 レセプター抗体 tocilizumab が有用と異なっ
 ており、両疾患の鑑別は重要である。我々は当初 multicentric Castleman 病で発症し、tocilizumab 治
 療中に IgG4 関連疾患の病態を示した症例を経験した。両疾患の病態の関連性、また鑑別困難例の存在
 について今後の検討を要すると考えられた。

A. 研究目的

IgG4 関連疾患は、血清 IgG4 高値、種々の臓器
 での IgG4 陽性形質細胞の浸潤、線維化で特徴づ
 けられる疾患であり、その病因は明確ではな
 い。一方、multicentric Castleman 病は、多発
 性リンパ節腫大と全身性の炎症状態を示す疾患
 であり、リンパ節における IL-6 の異常産生がそ
 の病態に関与していると考えられているが、そ
 の病因は明らかでない。治療は、前者は副腎皮
 質ステロイドホルモン治療が有効であることに
 対して、後者は IL-6 作用の阻害薬である抗 IL-6
 レセプター抗体 tocilizumab が有用で治療法は
 異なり両疾患の鑑別は重要である。我々は当初
 multicentric Castleman 病で発症し、
 tocilizumab 治療中に IgG4 関連疾患の病態を示
 した症例を経験した。両疾患の病態の関連性、
 また鑑別困難例の存在について注意を要する例
 と考えられたので症例提示を行う。

B. 研究方法

C. 研究結果

[症例経過] 56 歳男性。X 年に多発性リンパ節腫
 大(5mm から 3cm 径)にて当院受診。リンパ節組織

像は反応性リンパ節腫大であり、IgH、TCR α 、*BCL-2*
 のクロナールな再構成を認めなかった。リンパ
 節腫大は X+4 年まで持続し、頻回の呼吸器感染と
 ポリクローナルな高ガンマグロブリン血症で入院
 となった。入院時、リンパ節の再生検にて組織像
 は Castleman disease, plasma cell type に合致、
 IgG4 陽性細胞の増加(-)で、血液検査では IL-6
 軽度高値(5.9pg/ml, 正常値<4.0pg/ml) CRP 上
 昇(24mg/dl) HIV(-)、HHV-8(-)であり、idiopathic
 multicentric Castleman disease の診断にて
 tocilizumab の臨床試験に参加、同治療が開始さ
 れた。副腎皮質ステロイドホルモンは使用されな
 かった。リンパ節腫大、血清学的異常は改善し
 tocilizumab 治療が継続された。X+12 年、右眼球
 の上方変異と突出が出現。MRI 検査にて両側の眼
 窩腫瘍認め、FDG-PET 検査にて同腫瘍への集積と
 ともに、縦隔、腹腔内リンパ節への集積、前立腺
 腫瘍への集積を認めた。右眼窩腫瘍および前立腺
 部の生検にてリンパ濾胞過形成、IgG4 陽性形質細
 胞の集積(IgG4⁺/IgG⁺>40%)、著明な線維化を認め
 た。また IgG4 増加(3940mg/dl、正常値 4.8-
 105mg/dl)、IgE 増加(3280IU/ml、正常値 0-

173IU/ml)を認め、IgG4関連疾患の診断に至った。血清 IL-6 値は 137pg/ml であった。メチルプレドニゾロン 1000mg パルス療法を 3 日間にて症状改善し、その後 40mg/日のプレドニゾロン投与を継続、次第に漸減 5mg/日とし、tocilizumab 併用にて治療中である。その後 18 ヶ月以上リンパ節腫大の再燃なく経過している。眼窩内腫瘍には軽度の FDG の集積は持続している。

(倫理面への配慮)

「キャスルマン病の疫学診療実態調査に関する研究」として大阪大学医学部附属病院倫理審査委員会承認(2016年3月9日)。

D. 考察

Muticentric Castleman disease と IgG4 関連疾患の鑑別困難例の存在は報告されている。本例においては、当初のリンパ節腫大および炎症所見は tocilizumab で良好にコントロールされているところで、IgG4 関連疾患が発症しており、両疾患が併存していたことを示唆するとともに、両疾患の病因は別のものであることを示唆している。Tocilizumab の長期使用が IgG4 関連疾患の発症、増悪に関与した可能性も考察される。

E. 結論

Castleman 病で発症し、tocilizumab 治療中に IgG4 関連疾患の病態を示した症例を経験した。今後、両疾患の病態の関連性、また鑑別困難例の存在について検討を要する。

F. 健康危険情報

なし。

G. 研究発表

1. 論文発表

1)水木満佐央：分子標的治療．*血液疾患 診断・治療指針*（金倉讓編），中山書店，東京，pp112-120，2015

2) 水木満佐央、金倉讓．多発性骨髄腫の治療目標 移植非適応患者－．*IMiDs 基礎と臨床 2015*（赤司浩一総監修），メディカルレビュー社，東京，pp48-55，2015

3)水木満佐央：B 細胞性前リンパ球性白血病．*日本臨床* 74：422-427，2016

4) 肥満細胞症の病態と治療．*血液内科* 74(2):292-298，2017

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

なし

1. 特許取得

なし

研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
吉崎和幸, 岡本真一郎, 川端浩, 水木満佐央, 川上純, 正木康史, 矢野真吾, 井出眞, 宇野賀津子, 八木克巳, 小島俊行, 水谷実, 徳嶺進洋, 西本憲弘, 藤原寛, 中塚伸一, 塩沢和子, 岩城憲子, 古賀智裕	キャッスルマン病診療の参照ガイド	臨床血液	58	97-107	2017
井出眞, 吉崎和幸 (他 35 名、16・32 番目)	International, evidence-based consensus diagnostic criteria for HHV-8-negative/idiopathic multicentric Castleman disease	Blood	129(12)	1646-1657	2017
川端浩	Castleman 病	岡明編 小児科診療増刊号 小児の症候群. 東京都, 診断と治療社	vol 79 suppl,	pp 183	2016
<u>Masaki Y</u> , <u>Kawabata H</u> , <u>Kurose N</u> , <u>Ide M</u> , et al. (他 25 名、筆頭、2 番目、7 番目、8 番目)	Proposed diagnostic criteria, disease severity classification and treatment strategy for TAFRO syndrome, 2015 version.	Int J Hematol.	103(6)	686-92.	2016
<u>正木康史</u> , <u>川端浩</u> , <u>黒瀬望</u> , <u>ほか</u> (他 8 名、筆頭、2 番目、7 番目)	平成 27 年度厚生労働科学研究費補助金(難治性疾患政策研究事業)新規疾患; TAFRO 症候群の確立のための研究班. 新規疾患; TAFRO 症候群の診断基準・重症度分類・治療指針.	臨床血液	第 78 回日本血液学会学術集会「教育講演」号. 臨床血液 57	195-203 (2029-2037)	2016
<u>正木康史</u> , <u>藤本信乃</u>	TAFRO 症候群	臨床免疫・アレルギー科	65(6)	604-607	2016
<u>正木康史</u> , <u>藤本信乃</u> , <u>川端浩</u>	TAFRO 症候群の診断と治療. EMB 血液疾患の治療 2017-2018 金倉讓. 木崎昌弘. 鈴木律朗. 神田善伸編.	中外医学社	2016 年 10 月 15 日発行	p385-390	2016

研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
<u>正木康史</u>	新たな指定難病としてのIgG4 関連疾患.	臨床免疫・アレルギー科	65(1)	28-34	2016
<u>正木康史</u>	(特集; IgG4 関連疾患の病因・病態を考える)IgG4 関連リンパ節炎から	分子リウマチ治療	9(1)	17-20	2016
<u>正木康史</u>	IgG4 関連疾患の管理と治療における国際コンセンサス-日本人臨床医にも妥当で有用か?-	リウマチ科	55(2)	221-226	2016
<u>正木康史</u>	II 章 薬物療法の実践. B. リンパ腫. 33.免疫不全に続発するリンパ増殖性疾患	白血病・リンパ腫薬物療法ハンドブック 松村到編集	2016年6月25日発行	p278-282	2016
Fujita Y, Masaki Y, et al. (他14名、12番目)	Isolation of vascular smooth muscle antigen-reactive CD4(+) Th1 clones that induce pulmonary vasculitis in MRL/Mp-Fas(+/+) mice.	Cell Immunol	303	2016 May;303:50-4. doi: 10.1016/j.cellimm.2016.03.004.	2016
<u>正木康史</u>	不明熱の理解のために知っておくべきエビデンスとアート. 不明熱の原因疾患 pick up. 血管内リンパ腫.	Modern Practice	33(7)	1105-1107	2016
<u>正木康史</u>	IgG4 関連疾患の治療の最前線- 日米における診断と治療の違いを中心に.	医学のあゆみ	258(3)	217-222	2016
<u>正木康史、黒瀬望</u>	IgG4 関連疾患と間違っではいけない疾患	肝胆膵	73(4)	585-590	2016
<u>正木康史、川端浩、ほか</u> . (他6名、筆頭、7番目)	IgG4 関連疾患の診断と治療	金沢医科大学雑誌			
<u>正木康史、ほか</u> . (他4名、筆頭)	シェーグレン症候群とリンパ増殖性疾患	リウマチ科	56(5)	452-457	2016

研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Masaki Y, Kurose N, et al. (他 33 名、筆頭、31 番目)	A multicenter phase II prospective clinical trial of glucocorticoid for patients with untreated IgG4-related disease.	Mod Rheumatol.	2016 Dec 15	1-6	2016
正木康史	IgG4 関連疾患をどのように治療しているか.	アレルギーの臨床	36(13)	(1255)41-(1258)44.	2016
正木康史、川端 浩、ほか. (他 6 名、筆頭、7 番目)	IgG4 関連疾患の診断と治療	金医大誌	41	67-72	2016
正木康史	白血病やリンパ腫の治療緊急性.	Medical Practice	34(2)	335	2017
正木康史	血管内リンパ腫	血液疾患最新の治療 2017-2019		pp177-179	2017
Satoh-Nakamura T, Masaki Y. (他 10 名、最終、査読有)	CD14 ⁺ follicular dendritic cells in lymphoid follicles may play a role in the pathogenesis of IgG4-related disease.	Biomedical Res (Tokyo)	36(2)	143-153	2015
Khosroshahi A, Masaki Y. (他 40 名、20 番目、査読有)	International consensus guidance statement on the treatment of IgG4-related disease.	Arthritis Rheum	67(7)	1688-99.	2015
Nakajima A, Masaki Y. (他 30 名、2 番目、査読有) : e0126582.	Decreased expression of innate immunity-related genes in peripheral blood mononuclear cells from patients with IgG4-related disease.	PLoS One.	14;10(5)	e0126582. doi:10.1371/journal.pone.0126582. eCollection,	2015

研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Sakai T, <u>Masaki Y.</u> (他17名、2番目、査読有)	Prospective clinical study of R-CMD therapy for indolent B-cell lymphoma and mantle cell lymphoma from the Hokuriku Hematology Oncology Study Group.	Medical Oncol	32	232. DOI 10.1007/ s12032-015-0677- 9	2015
Yoshida H, <u>Masaki Y.</u> (他8名、9番目、査読有)	A case of probable IgG4-related disease involving the unilateral trigeminal nerve of the cheek region.	Oral Radiol	31	193-198	2015
北川 泉、 <u>正木康史</u>	「特集 関節が痛いんです！-コモンからレアものまでの診断と治療」関節痛・関節炎へのアプローチ 病因で診る関節痛・関節炎	総合診療	25(4)	330-332	2015
<u>正木康史</u>	新たな指定難病としてのIgG4 関連疾患	臨床免疫・アレルギー科	65(1)	28-34	2016
<u>正木康史</u>	(特集； IgG4 関連疾患の病因・病態を考える)IgG4 関連リンパ節炎から	分子リウマチ治療	9(1)	17-20	2016
宇野賀津子	低線量放射線の影響:福島から何を学ぶ	ADC Letter for Infectious Disease Control 27	Volume 3 (2)		2016

研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Satoh-Nakamura T, <u>Masaki Y.</u> (他10名、最終、査読有)	CD14 ⁺ follicular dendritic cells in lymphoid follicles may play a role in the pathogenesis of IgG4-related disease.	Biomedical Res (Tokyo)	36(2)	143-153	2015
Khosroshahi A, <u>Masaki Y.</u> (他40名、20番目、査読有)	International consensus guidance statement on the treatment of IgG4-related disease.	Arthritis Rheum	67(7)	1688-99.	2015
Nakajima A, <u>Masaki Y.</u> (他30名、2番目、査読有): e0126582.	Decreased expression of innate immunity-related genes in peripheral blood mononuclear cells from patients with IgG4-related disease.	PLoS One.	14;10(5)	e0126582. doi:10.1371/journal.pone.0126582. eCollection,	2015
Sakai T, <u>Masaki Y.</u> (他17名、2番目、査読有)	Prospective clinical study of R-CMD therapy for indolent B-cell lymphoma and mantle cell lymphoma from the Hokuriku Hematology Oncology Study Group.	Medical Oncol	32	232. DOI 10.1007/s12032-015-0677-9	2015
Yoshida H, <u>Masaki Y.</u> (他8名、9番目、査読有)	A case of probable IgG4-related disease involving the unilateral trigeminal nerve of the cheek region.	Oral Radiol	31	193-198	2015
<u>正木康史.</u> (他10名、筆頭、査読有)	IgG4 関連疾患の診断と治療～IgG4 関連皮膚病変も含めて～.	日本皮膚アレルギー-接触性皮膚炎学会雑誌	Vol.9 No.4(Serial No.42)	212-217	2015
<u>正木康史</u>	IgG4 関連疾患の鑑別診断	Modern Physician	Vol.35 No.11	1312-1317	2015

研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
<u>正木康史</u>	新たな指定難病としてのIgG4 関連疾患.	臨床免疫・アレルギー科	65(1)	28-34	2016
<u>正木康史</u>	(特集; IgG4 関連疾患の病因・病態を考える)IgG4 関連リンパ節炎から	分子リウマチ治療	9(1)	17-20	2016
Hiramatsu S, Ohmura K, Tsuji H, <u>Kawabata H</u> , Kitano T, Sogabe A, Hashimoto M, Murakami K, Imura Y, Yukawa N, Yoshifuji H, Fujii T, Takaori-Kondo A, Mimori T	Successful treatment by rituximab in a patient with TAFRO syndrome with cardiomyopathy.	Jpn J Clin Immunol			in press
Ichinose K, Arima K, Umeda M, Fukui S, Nishino A, Nakashima Y, Suzuki T, Horai Y, Koga T, Kawashiri SY, Iwamoto N, Fujikawa K, Aramaki T, Tamai M, Nakamura H, Sato S, Origuchi T, <u>Kawakami A.</u>	Predictors of clinical outcomes in patients with neuropsychiatric systemic lupus erythematosus.	Cytokine	79	31-37	2015
Suzuki T, Iwamoto N, Yamasaki S, Nishino A, Nakashima Y, Horai Y, Kawashiri SY, Ichinose K, Arima K, Tamai M, Nakamura H, Origuchi T, Miyamoto C, Osaki M, Ohyama K, Kuroda N, <u>Kawakami A.</u>	Upregulation of Thrombospondin 1 Expression in Synovial Tissues and Plasma of Rheumatoid Arthritis: Role of Transforming Growth Factor- β 1 toward Fibroblast-like Synovial Cells.	J Rheumatol	42 (6)	943-947	2015

研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Nakamura H, Takahashi Y, Yamamoto-Fukuda T, Horai Y, Nakashima Y, Arima K, Nakamura T, Koji T, <u>Kawakami A.</u>	Direct infection of primary salivary gland epithelial cells by human T lymphotropic virus type I in patients with Sjögren's syndrome.	Arthritis Rheumatol	67 (4)	1096-1106	2015
Ikezoe K, Handa T, Tanizawa K, Kubo T, Oguma T, Hamada S, Watanabe K, Aihara K, Sokai A, Nakatsuka Y, Muro S, Nagai S, <u>Uno K</u> , Chin K, Fukui M, Hirai T, Mishima M.	Bone mineral density in patients with idiopathic pulmonary fibrosis.	Respir Med.	Sep;109(9)	1181-7. doi: 10.1016/j.rmed.2015.06.014. Epub 2015 Jul 6. PMID: 26174191	2015
Sokai A, Handa T, Tanizawa K, Oga T, <u>Uno K</u> , Tsuruyama T, Kubo T, Ikezoe K, Nakatsuka Y, Tanimura K, Muro S, Hirai T, Nagai S, Chin K, Mishima M.	Matrix metalloproteinase-10: a novel biomarker for idiopathic pulmonary fibrosis.	Respir Res.	Sep 29	16:120 doi: 10.1186/s12931-015-0280-9. PMID: 26415518	2015
Sato K, Yamamoto H, Nomura T, Matsumoto I, Miyasaka T, Zong T, Kanno E, <u>Uno K</u> , Ishii K, Kawakami K.	Cryptococcus neoformans Infection in Mice Lacking Type I Interferon Signaling Leads to Increased Fungal Clearance and IL-4-Dependent Mucin Production in the Lungs.	PLoS One	Sep 18;10(9)	e0138291. doi: 10.1371/journal.pone.0138291. eCollection	2015

研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
<u>Uno K.</u> <u>Yoshizaki K.</u> Iwahashi M, Yamana J, Yamana S, <u>Tanigawa M.</u> <u>Yagi K.</u>	Pretreatment Prediction of Individual Rheumatoid Arthritis Patients' Response to Anti-Cytokine Therapy Using Serum Cytokine/Chemokine/Soluble Receptor Biomarkers.	PLoS One	Jul 15;10(7)	e0132055. doi:10.1371/journal.pone.0132055. eCollection	2015
水木満佐央、金倉讓	多発性骨髄腫の治療目標 移植非適応患者	IMiDs 基礎と臨床 2015 (赤司浩一総監修)		48-55	2015

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
正木康史. (他1名、筆頭)	III 治療の実際 1. 病型別治療方針 -標準的治療, 研究的治療 L. 治療上特別な配慮を要する疾患 8) 中枢神経系のリンパ腫	飛内賢正、木下朝博、塚崎邦彦編	悪性リンパ腫治療マニュアル	南江堂	東京	2015	201-203
正木康史.	II. 臓器別病変の診断と治療 11. リンパ節病変 治療と予後	岡崎和一、川 茂幸編集主幹	臨床医必読最新 IgG4 関連疾患	診断と治療社	東京	2015	143-145
正木康史	4章. 疾患の理解と治療/リンパ腫. 医原性免疫不全状態に伴うリンパ増殖性疾患.	金倉 讓編集	最新ガイドライン準拠 血液疾患 診断・治療指針	中山書店	東京	2015	434-438
正木康史. (他4名、筆頭)	X. 節外リンパ腫の臓器別特徴と治療. 唾液腺リンパ腫.		日本臨床 73巻増刊号 8 リンパ腫学 -最新の研究動向-	日本臨床社	大阪	2015	627-631
正木康史. (他4名、筆頭)	XI. 特論. TAFRO 症候群		日本臨床 73巻増刊号 8 リンパ腫学 -最新の研究動向-	日本臨床社	大阪	2015	674-678
正木康史.	Question & Answer ; 不明熱と皮膚生検から考えられる疾患は何か ; 血管内大細胞型 B 細胞リンパ腫	一般社団法人 日本内科学会専門医部会編	「一発診断！ 一目瞭然！ 目で診る症例から瞬時に診断！」	一般社団法人日本内科学会発行(ヤマノ印刷株式会社)	東京	2015	30,97-98
水木満佐央、金倉讓	多発性骨髄腫の治療目標 移植非適応患者	赤司浩一総監修	IMiDs 基礎と臨床 2015	メディカルレビュー社	東京	2015	48-55
水木満佐央	分子標的治療	金倉讓編	血液疾患 診断・治療指針	中山書店	東京	2015	112-120
川端浩	Castleman Disease	吉田弥太郎編	in 血液診療ハンドブック改訂3版	医薬ジャーナル社	大阪	2015	463-475
宇野賀津子 分担執筆	「放射線必須データ32 被ばく影響の根拠」	田中、角山、中島、坂東編	「放射線必須データ32 被ばく影響の根拠」	創元社	大阪	2016	

